ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

I - IV

1980

滋賀県教育委員会

默滋賀県文化財保護協会

はじめに

県下のほ場整備事業に伴う発掘調査も、新たな展開として蒲生、神崎郡が加わり、調査件数が増大しつつある。同時に新たな資料の増加は、調査結果をまとめ、社会に還元する作業というか、義務の遂行が困難さを増してきた。しかし整理の結果は、遺跡の所在する各々の地域はもちろん、県内において、今後、近江の生い立ちを考えるうえで重要な課題を提示するものが多くあった。

本報告書の作成にあたって、調査から整理までの一貫の作業の中で、地元教育委員会、地元住民、先生諸氏、学生諸君の絶大な指導、助言、援助を得た。ここに記して謝意を表したい。

昭和55年3月

滋賀県教育委員会 文化財保護課 課長 沢 悠 光

- 1. 本報告書は、昭和54年度国庫補助事業対象となった、団体営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、湖西地区(高島郡)の調査成果を収載したものである。
- 2. 調査にあたっては、地元マキノ町、今津町、新旭町の役場、教育委員会、今津県事務所をはじめ、マキノ町海津、上開田、北牧野、南牧野、今津町岸脇、梅原、下弘部、弘川、新旭町針江の方々から種々の協力を得た。
- 3. 現地調査は、本県教育委員会文化財保護課技師丸山竜平、同兼康保明を担当者とし、 財団法人滋賀県文化財保護協会嘱託久米雅雄(現大阪府教育委員会)、同本田修平(現彦根市教育委員会)を主任調査員に得て実施した。また、針江遺跡については、新 旭町教育委員会社会教育課主事図司高志氏にお願いした。
- 4. 調査に協力を得た諸氏については、各遺跡ごとに記した。厚く感謝の意を表する次第である。
- 5. 本報告書は、兼康保明が編集し、図版作成、レイアウト、校正、遺物写真等で、山口順子(滋賀県埋蔵文化財センター嘱託)、堀内宏司、寿福滋の諸氏の多大なる協力を得た。

また、各章の文責は、目次に明記した。

目 次

第1章	章 高島郡マキノ町海津遺跡兼康保明	· 久米雅雄·山口順子·堀内宏司
1.	はじめに	(兼康)1
2.	調査の経過	(兼康)2
3.	調査の結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	(久米・堀内) 2
4.	出土遺物 ······(1)土器 (2)木製品	(兼康・山口) 4
5.	結び······	(兼康) 8
第 2:	章 高島郡マキノ町上開田遺跡	兼康保明·本田修平·堀内宏司
1.	はじめに	
2.	位置と環境	(兼康)10
3.	調査の経過	(兼康)10
4.	調査の結果	
5.	出土遺物 ····································	
6.	まとめ	23
第3章	章 高島郡マキノ町南牧野遺跡(事業名	る 北牧野遺跡) 兼康保明・久米雅雄
1.	はじめに	(兼康)30
2.	調査の経過	(兼康)30
3.	歴史的環境	(兼康)30
4.	調査の結果 (1)北牧野遺跡の調査 (2)南牧野遺跡の調査 (3	
5.	出土遺物 ····································	
6.	要 説	(兼康)40
第4	章 高島郡今津町岸脇遺跡(事業名 心	・妙寺遺跡) 兼康保明・山口順子・堀内宏司
1	1+1×2	(兼康)46

	2.	位置と環境	·(兼康)··	46
	3.	調査の経過	·(兼康)··	47
	4.	調査の結果・・・・・ (1)湿気抜き (2)溝状遺構 (3)第15、19、29トレンチの調査 (4)塚状遺構(「首塚」)	・(山口・	兼康)47
	5.	出土遺物	·(堀内・	兼康)55
	6.	結 び	·(兼康)··	58
第	5 =	章 高島郡今津町梅ヶ原遺跡	•••••	…丸山竜平
	1.	はじめに	•••••	60
	2.	位置と環境		60
	3.	調査の経過	•••••	60
	4.	調査の結果		61
第	6 1	章 高島郡今津町弘川遺跡		…山口順子
	1.	弘川遺跡の概要		64
	2.	位 置		64
	3.	調査の経過		64
	4.	遺 構		66
第	7 章	章 高島郡新旭町針江遺跡	図司高志	・神谷友和
	1.	はじめに	·(図司)…	70
	2.	調査の経過	·(図司)…	70
	3.	調査の結果	·(図司)…	70
	4.	出土遺物	·(神谷)…	73
		(1)壺形土器 (2)甕形土器 (3)鉢形土器 (4)高杯形土器 (5)器台形土器 (6)蓋形土器・その他		
	5.	おわりに	·(図司)…	77

図 版 目 次

高島郡マキノ町海津遺跡

- 図版 1 遺跡全景(北東より)・遺跡全景(北東より海津を望む)
- 図版 2 Cトレンチ南壁面・トレンチ樹木出土状況
- 図版 3 出土木製品 (1~5)
- 図版 4 出土木製品・出土土器

高鳥郡マキノ町上開田遺跡

- 図版 5 遺跡全景(北より)・第20トレンチ調査状況
- 図版 6 第16トレンチ全景 (西より) 第41トレンチ・焼土拡 (南西より)
- 図版 7 第21トレンチ全景(東より)
- 図版 8 第21トレンチ・土坑 2~4 (北より)・第21トレンチ・土坑 1 (北東より)
- 図版 9 第40トレンチ全景(西より)・第21トレンチ南東部全景(東より)
- 図版10 第20トレンチ下層堆積状況・

佐第20トレンチ打製石斧出土状況 (右)第20トレンチ縄文式土器出土状況

- 図版11 1.第20トレンチ出土・縄文式土器・2.第20トレンチ出土・縄文式土器
- 図版12 3.第20トレンチ出土・縄文式土器・4.第20トレンチ出土・縄文式土器
- 図版13 須恵器・磁器・陶器・土拡出土・須恵器
- 図版14 土師質土器・皿・瓦質土器・土師質土器・羽釜

高島郡マキノ町南牧野遺跡

- 図版15 南牧野遺跡全景(北より)・Gトレンチ全景(西より)
- 図版16 Jトレンチ全景(北より) Jトレンチ・SK3 (東より)
- 図版17 Hトレンチ上層全景(南より)・Hトレンチ下層全景(北より)
- 図版18 いトレンチ自然流路検出状況(東より)・同(南より)
- 図版19 1.土師質土器・陶磁器・2.陶器・瓦質土器

高島郡今津町岸脇遺跡

- 図版20 岸脇遺跡より箱館山を望む(調査前)・首塚(調査前)・ 湿気抜き(第30トレンチ)
- 図版21 第29・19トレンチ全景(東より)・第19・15トレンチ全景(東より)
- 図版22 第1次調査・溝状遺構検出状況(西より)・同(東より)
- 図版23 第Ⅱ次調査・溝状遺構検出状況(西より)・同(東より)
- 図版24 第17トレンチ土坑・石検出状況(西より)・ 第17トレンチ土坑・調査終了後の状況(西より)
- 図版25 首塚・表土除去後の状況(東より)・首塚・調査終了後の状況(東より)

図版26 1.出土土器・2.出土土器、その他

図版27 須恵器 (15·17)、土師器 (14)、青磁 (20) · 首塚出土五輪塔残欠

高島郡今津町梅ケ原遺跡

図版28 1.第5-1試掘拡調査状況、山据右端の森は弓削八幡宮、背後の集落 は梅原・2.第28試掘址

図版29 1.第28試掘拡、海津大崎、竹生島を望む・2.第5試掘拡、溝検出状況

高島郡今津町弘川遺跡

図版30 調査地区遠景(東より)・竪穴住居1~3

図版31 竪穴住居4 • 竪穴住居5

図版32 第6トレンチ全景(西より)・第12トレンチ掘立柱建物1・2(東より)

高島郡新旭町針江遺跡

図版33 調査地区遠景(北より)・第1トレンチ 第2ブロック(南より)

図版34 第2ブロック土層堆積状況・第2ブロック土器出土状況

図版35 出土土器(1)

図版36 出土土器(2)

図版37 出土土器(3)

図版38 出土土器(4)

図版39 出土土器(5)

図版40 出土土器(6)

図版41 出土土器(7)

図版42 出土土器(8)

図版43 出土土器(9)

図版44 出土土器(10)

図版 45 出土土器(11)

図版 46 出土土器(12)

挿 図 目 次

高島郡マキ	・ノ町海津遺跡
第1図	遺跡位置図
第2図	トレンチ配置図3
第3図	出土土器実測図 4
第 4 図	トレンチ土層図 5
第 5 図	出土木製品実測図6
第6図	用途不明木製品実測図7
高島郡マコ	テノ町上開田遺跡
第1図	遺跡位置図9
第2図	トレンチ配置図(1)10
第3図	トレンチ配置図(2)11
第4図	第16トレンチ遺構実測図12
第5図	第21・第40トレンチ土層図13
第6図	土坑及び土址墓実測図14
第7図	第21トレンチ遺構実測図15
第8図	第41トレンチ・焼土拡実測図16
第9図	第40トレンチ遺構実測図16
第10図	縄文式土器実測図18
第11図	縄文式土器・須恵器実測図19
第12図	中世土器実測図20
高島郡マ	ドノ町南牧野遺跡
第1図	遺跡位置図31
第2図	トレンチ配置図32
第3図	G • H • I • J トレンチ配置図······33
第4図	Gトレンチ平面図34
第5図	J・G・Hトレンチ土層図34
第6図	Hトレンチ平面図35
第7図	J トレンチ平面図36
第8図	南牧野遺跡出土土器実測図38
第 9 図	Hトレンチ出土砥石・煙管実測図39
高島郡今海	車町岸脇遺跡
第1図	遺跡位置図46

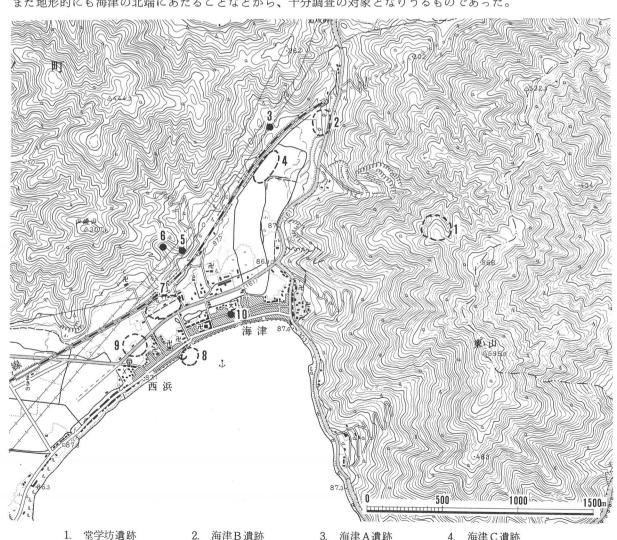
第2図	岸脇遺跡トレンチ配置図48
第3図	「湿気抜き」平面図49
第 4 図	溝状遺構平面図
第 5 図	第22・25・28トレンチ土層図51
第6図	第17トレンチ土坑実測図51
第7図	第15・19・29トレンチ土坑実測図52
第8図	第15・19・29トレンチ平面図53
第9図	首塚平面図及び断面図54
第10図	五輪塔実測図
第11図	出土遺物実測図57
第12図	Cトレンチ出土寛永通宝
高島郡今清	津町梅ケ原遺跡
第1図	遺跡位置図61
第2図	梅ケ原遺跡試掘拡配置図62
高島郡今海	車町弘川遺跡
第1図	遺跡位置図64
第2図	弘川遺跡トレンチ配置図65
第3図	第12・16トレンチ平面図66
第4図	第25・27拡張トレンチ平面図67
第 5 図	第19トレンチ平面図68
第6図	第 6 トレンチ平面図68
高島郡新加	旦町針江遺跡
第1図	遺跡位置図71
第2図	トレンチ配置図72
第3図	トレンチ土層図73
第 4 図	ミニチュア土器実測図76
第 5 図	土器実測図(1)79
第6図	土器実測図(2)
第7図	土器実測図(3)
第8図	土器実測図(4)82
第 9 図	土器実測図(5)
第10図	土器実測図(6)84
第11図	土器実測図(7)85
第12図	土器実測図(8)86
第13図	土器実測図(9)87

第1章 高島郡マキノ町海津遺跡

1 はじめに

本報告は、高島郡マキノ町所在海津遺跡についての、昭和54年度に実施したほ場整備事業に伴う発掘調査の結 果をまとめたものである。

本遺跡を調査する端緒となったのは、国鉄湖西線の海津トンネルの南西、国道303号線に挟まれた山裾で鉄滓 が採集されており、製鉄遺跡の可能性が指摘されていたことからである。マキノ町は周知のように、北牧野遺跡、 白谷遺跡、小荒路遺跡など製鉄遺跡の集中する地域の一つとして重視されてきた。そこで、今回のほ場整備が鉄 滓散布地に近接することから、遺跡の広がりを明確にし、遺構が検出された場合は適切な保存処置を講じるため 確認調査が必要となった。また、海津の地は古代以来、北陸と近畿を結ぶ水陸の交通の要衝としてしばしば記録 にもあらわれている。ことに中、近世の海津は、七里半越えで敦賀へ、あるいは湖上を大津方面に向うターミナ ルとして栄えてきた。そうした点についても、かつての町の規模を明確に示す資料が少ないことから、考古学的 に現在の集落の周辺部を試掘し、港町海津の往時の姿を把握する必要があった。今回の調査地点は、そうした意 味では集落より離れてはいるが、地元では七里半越えに沿ってあったという蔵屋敷跡の伝承地をも含んでおり、 また地形的にも海津の北端にあたることなどから、十分調査の対象となりうるものであった。



- 9. 万見寺遺跡
- 2. 海津B遺跡
- 5. 天神社裏山B遺跡 6. 天神社裏山A遺跡
 - 10. 海津大宮遺跡
- 3. 海津A遺跡
- 海津天神社遺跡 7.
- 4. 海津 C 遺跡
- 西浜遺跡

第1図 遺跡位置図

2 調査の経過

調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、現地調査は滋賀県文化財保護協会嘱託久米雅雄(現大阪府教育委員会)を主任に、昭和54年4月3日から5日まで実施した。調査の方法は、谷の地形を標式的に補えることのできる、国鉄湖西線沿いの水田(ほ場整備後の水路にあたる部分)をバックホウで順次試掘して行った。その結果、少量の遺物は含むものの遺構の無いことが確認されたため、調査を打切った。

なお調査にあたっては、マキノ町教育委員会、マキノ町土地改良課、地元海津の方々から援助を得た。また、 調査・整理にあたっては、堀内宏司、越出佳代子、山口順子、米田実、川南隆、出口秀夫の諸氏の協力を得た。 記して厚くお礼申しあげたい。

3 調査の結果

国鉄湖西線沿いの水田に、調査順にAよりKまで11カ所トレンチを掘り、遺構の有無と土層の堆積状況を観察した。なおトレンチは、当初水路予定地に一定方向に掘進むはずであったが、付近は湿田で場所によってはトレンチを掘穿するバックホウが、自らの重量によって沈むこともあり、そのためトレンチの方向が不規則なものとなった。

以下、各トレンチの土層を中心に述べていきたい。

Aトレンチ 東西方向に設定したトレンチで、地表高は86.23mである。

土層は、第1層耕土、第2層灰色粘質土、第3層褐色スクモ層となり、第3層より田下駄、自然木などが出土 した。

Bトレンチ 北東~南西方向に設定したトレンチで、地表高は86.23mである。

土層は、第1層耕土、第2層灰色粘質土、第3層褐色スクモ層、第4層青灰色粘質土、第5層暗黄褐色粘質土、第6層灰黒色粘質土であり、このうち第2層はさらに細かく分けることができ、灰色粘質土と灰色礫質土が交互に堆積している。第2層中の礫層は、湿田に体が沈むのを防ぐために入れられたものと考えられる。なお、第3層より田下駄が出土した。

Cトレンチ 北東~南西方向に設定したトレンチで、地表高は85.94mである。

土層は、第1層耕土、第2層灰色粘質土、第3層褐色スクモ層、第4層青灰色粘質土であり、第3層に木などの自然遺物を含む。

Dトレンチ 北東~南西方向に設定したトレンチで、地表高は85.79mである。

土層は、第1層耕土、第2層灰色粘質土、第3層黄青灰色粘質土、第4層褐色スクモ層であり、第4層に木などの自然遺物を含む。

Eトレンチ 南北方向に設定したトレンチで、地表高は85.54mである。

土層は、第1層耕土、第2層灰色粘質土、第3層灰色砂質土、第4層黄青灰色粘質土、第5層褐色スクモ層であり、第2層と第3層は基本的には同一層と考えられる。

Fトレンチ 北東~南西方向に設定したトレンチで、地表高は85.39mである。

土層は、第1層耕土、第2層灰色粘質土、第3層黄青灰色粘質土、第4層灰色粘質土、第5層黄青灰色粘質土 (第3層より褐色がかる)、第6層褐色スクモ層であり、第2層から第5層までは、灰色粘質土と黄青灰色粘質



土が交互に重なりあって堆積している。なお、第5層より土師質小皿と土師質(瓦質か)壷(?)の破片が、また 第6層からはやや摩滅した陶器片が出土している。

Gトレンチ 南北方向に設定したトレンチで、地表高は85.42 mである。

十層は、第1層耕土、第2層灰色粘質土、第3層灰色礫質土、第4層褐色スクモ層であり、第2層に食込むよ うに灰色砂質土が混っている。第4層中より自然木に混って、箸や用途不明の木製品などが出土した。

北東~南西方向に設定したトレンチで、地表高は85.57mである。

土層は、第1層耕土、第2層灰色粘質土、第3層灰褐色粘質土、第4層褐色スクモ層である。

「トレンチ 北東~南西方向に設定したトレンチで、地表高は86.31 mである。

土層は、第1層耕土、第2層灰褐色粘質土、第3層灰色砂質土、第4層褐色スクモ層であり、第2層と第3層 は基本的には同一層と考えられる。

Jトレンチ 北東~南西方向に設定したトレンチで、地表高は87.30mである。

十層は、第1層耕土、第2層灰褐色粘質土、第3層褐色スクモ層である。

Kトレンチ 北東~南西方向に設定したトレンチで、地表高は87.30 mである。

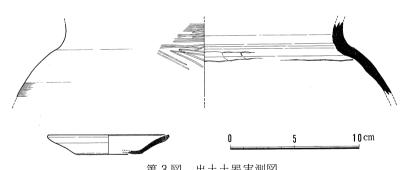
土層は、第1層耕土、第2層灰褐色粘質土、第3層褐色スクモ層である。

以上各トレンチの土層を中心に述べてきたが、各トレンチの土層堆積状況は比較的なだらかに堆積しており、 急激な地形変化はなかったものと思われる。また、各トレンチで遺構は検出されなかった。

出土遺物

(1) 土 器

瓦質土器 壷かと考えられる頸 部から肩部にかけての土器片がFト レンチから出土している。頸部は黒 色を呈し外面に細かいヘラミガキが 施され、肩部にあたる下半部は灰色 を呈しョコナデが認められるが、小

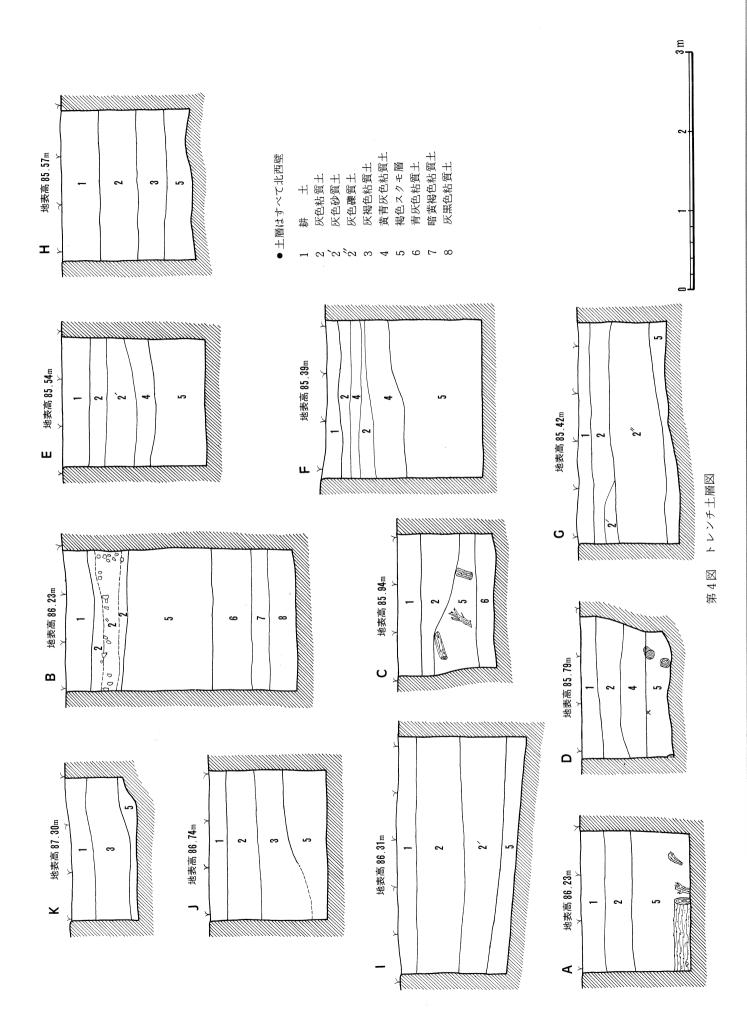


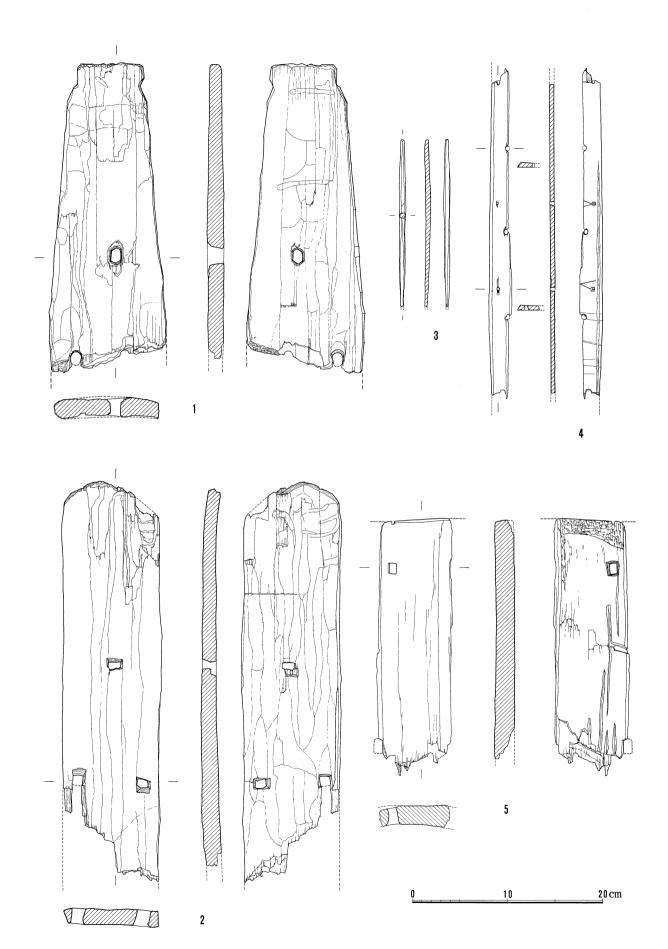
第3図 出土土器実測図

破片であるため全体に行なわれているのかどうか明確ではない。内面は、頸部をヨコナデ整形、下半を不調整で 仕上げる。胎土は精良で、微小の金雲母を含んでいる。

Fトレンチから、小皿の小破片が出土している。形態は、口縁部が体部にくらべてやや肥厚し、 十師質十器 内面の口縁端部にわずかに段のつく、底部の平らな小皿で、法量は復原口径 9.4 cm、高さ 1.5 mを測る。整形は 口縁外面上部と内面をヨコナデで仕上げ、外面下半は指頭圧痕を多く残した不調整のままである。胎土は精良で、 色調は淡白褐色を呈する。

陶器 Bトレンチから信楽と思われる壷の破片、Fトレンチからは摩滅した常滑の甕の破片が各々1点づつ 出土している。





第5図 出土木製品実測図

(2) 木製品

田下駄(1、2) (1) は、端部の両側面にえぐりの入った足板で、裏面に枠のあたり痕が2カ所認められる。鼻緒孔は前と左横の2孔が残存し、鼻緒孔の前後間隔は約11cmである。現存長32.5cm、幅12.4cm、厚さ1.6cmを測り、復原すると足板は約60cmほどの長さになる(Aトレンチ出土)。

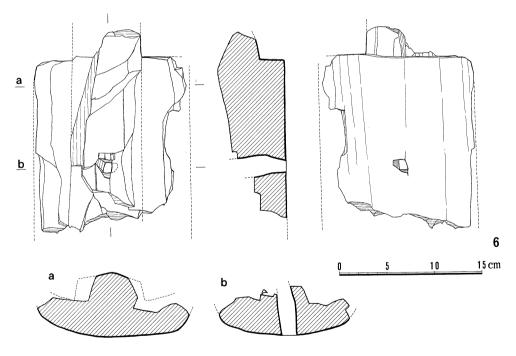
(2) は、先端を丸く整形した足板で、鼻緒孔は 3 カ所とも残存する。鼻緒孔の前後間隔は12cm、横間隔は 7 cm である。現存長 42.2 cm、幅 10cm、厚さ $1.3 \sim 1.9$ cmを測り、足板の復原長は63 cmほどと推定される(Bトレンチ出土)。

著(3) 多角に面取りし、両端に向って細く削り、本と末を区別する。本例は本の部分が残存する。残存長 $7.7\,\mathrm{cm}$ 、太さは最大径で $6\,\mathrm{rm}$ を測る($G\,\mathrm{F}\,\mathrm{L}$)。

用途不明品($4\sim6$) (4) は柾目を利用した薄い板で、小孔が3ヵ所づつ2列に交互にあけられている。 孔の形は、直径5 mmほどの円形に近いものと、縦3 mm横2 mmほどの方形のものとがあり、方形孔の裏面には紐のあたり痕と思われるものがV字型に認められる。側面は斜めに削り、裏面には整形痕が一部残る。現存長34.7 cm、現存幅2.5 cmを測る(G トレンチ出土)。

(5) は板状で、縦10mm横8mmの方形の孔が1カ所認められ、別にもう1カ所不明瞭であるが孔があけられているようである。全体に腐蝕が著しい。現存長26.9cm、現存幅8cm、厚さ2cmを測る(Gトレンチ出土)。

(6) は全体に厚手で、上面中央に突出した軸部を作り出し、なかほど下方に方形の孔を穿った木製品である。 下面は緩かに彎曲し、樹皮をはいだだけの木肌を利用している。(5) と同様全体に腐蝕が著しい。現存長21.4 cm、現存幅15.9 cm、厚さは突出部を含めて6.9 cmを測る(Gトレンチ出土)。



第6図 用途不明木製品実測図

5 結 び

調査の結果、当初予測された製鉄遺跡の広がりも、それ以外の遺構も確認されなかった。

本年度調査地域は土層から判断して、かつては沼地であったことが明らかになった。この沼地については、数少ない遺物ではあるがFトレンチ出土の土師質小皿などからみて、室町時代の15世紀頃はまだ存在していたようで、埋立てが行われて現在のように水田化されていったのは、おそらく近世以降のことと思われる。しかし、こうして開発された水田も、ほ場整備によって十分な排水が行われる以前は、旧沼地と水の集まりやすい谷状の地形といった自然条件のため、水はけの悪い湿田であった。そのため、作業中水田に体が深く沈むのを防ぐためBトレンチでみられたように、耕土下に砂礫をまいている。同様に湿田地帯で発掘調査を実施したマキノ町蛭口でも、やはり砂礫をまいたり、あるいは木を沈めたりして体が沈むのを防いでいる。もっとも、沼地の存在していた中世においても、沼地の縁辺部の山麓よりに営まれたであろうと推定される水田は、やはり今日のような湿田であったのだろう。A、Bトレンチで出土した田下駄は、そうした湿田で用いられたものが廃棄され、沼地に流れこみ堆積したものである。

さて、海津遺跡で出土した田下駄は、マキノ町の湖西線沿いにある湿田で近年まで使用されていたものと同じ ②で、また海津より約2.9km西方に所在する蛭口の仏性寺遺跡から出土した奈良時代かと推定される田下駄の足板とも、細部は異なるが基本的な構造においては一致する。このように一地域の中で、古代、中世、現代と歴史的な流れの中で型式を確認したことは、今後農具の歴史、あるいは民具を考えるうえに貴重な資料となろう。

註

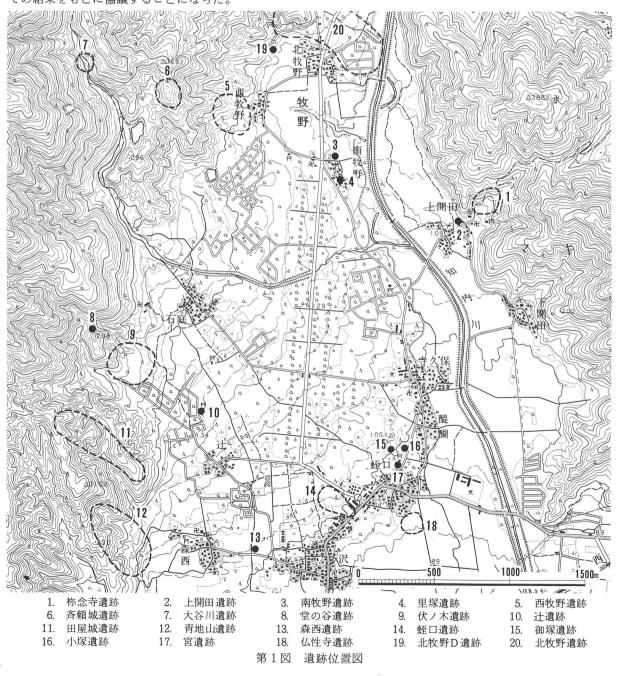
- ① 兼康保明・本田修平他「高島郡マキノ町仏性寺遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』 VI-2、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和54年)
- ② 山口順子「高島郡マキノ町仏性寺遺跡出土の田下駄」(『滋賀文化財だより』32、滋賀県文化財保護協会、昭和 54年)

第2章 高島郡マキノ町上開田遺跡

1 はじめに

本報告は、高島郡マキノ町上開田において昭和54年度に実施した、ほ場整備に伴う発掘調査の結果をまとめた ものである。

上開田遺跡は、『滋賀県遺跡目録』(昭和40年度版、滋賀県教育委員会編)には標示されていないが、水田畦畔の石垣に室町時代の石仏が積まれていることや、上開田の山麓に中世寺院の堂坊跡と考えられる平坦地が残っていることなどから、地元よりほ場整備に先立って発掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無を明らかにしてほしいとの要望があった。そこで、町教育委員会の関係者と現地立合いを行ったところ、ほ場整備の範囲は寺院の中心部から離れており特に問題はなかったが、畦畔の石垣に積まれた石仏は、中世寺院および現在の墓地との関係からみて、付近に中世墓地の所在していた可能性が考えられた。そこで、ほ場整備に先立って発掘調査を実施し、その結果をもとに協議することになった。



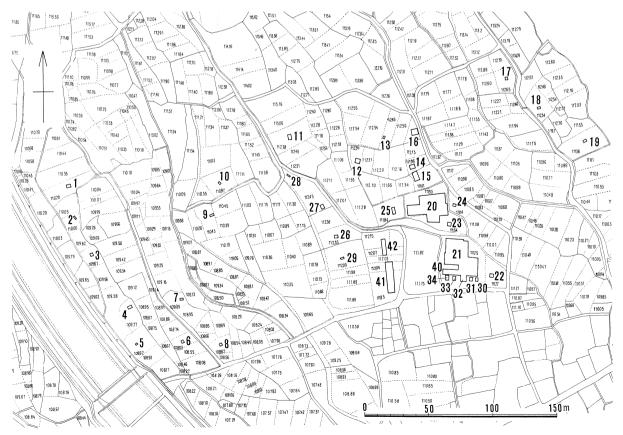
2 位置と環境

上開田は、国鉄湖西線マキノ駅北西約 2.5 kmに所在する。集落は、仲仙寺山の南山麓にあり、その西側を知内川が流れている。

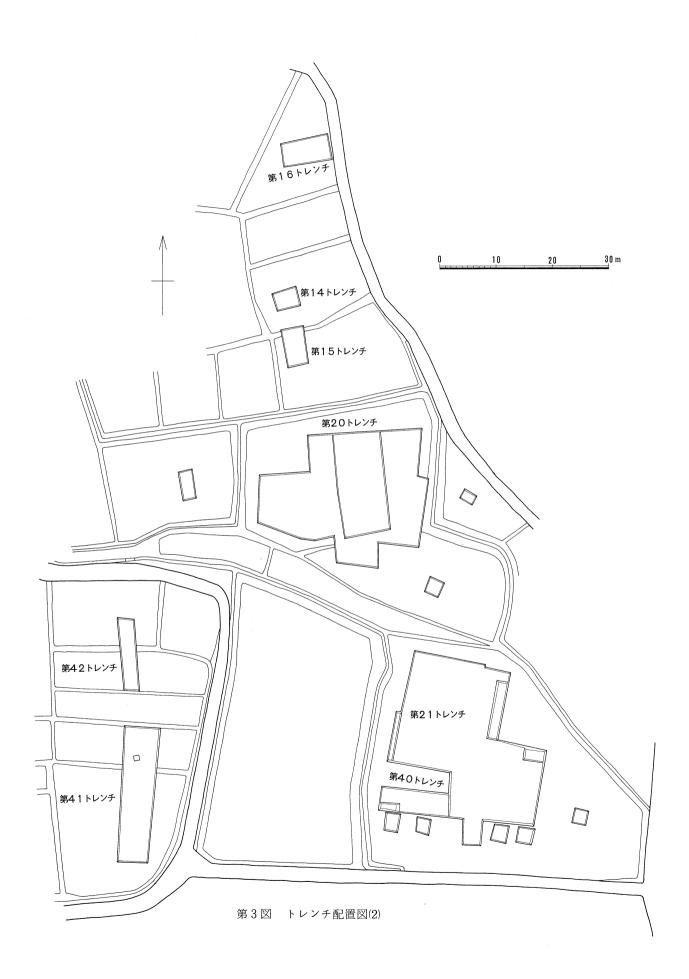
上開田遺跡は、集落の北側、地形的には知内川の左岸段丘上に位置している。この付近は、これまで遺跡の分布が確認されていなかったが、西近江路に面した場所でもあり、記録によれば戦国時代には上開田の村は存在していたようである。また、仲仙寺山々麓にある薬師堂や称名寺の周辺には、かつての堂坊跡かと思われる平坦地があり、境内には鎌倉時代の石造宝塔をはじめ、層塔など中世石造美術品の残欠も認められる。上開田の集落の立地する場所は、こうした寺院の門前ともいうべき位置を占めている。一方、中世遺跡とは別に、上開田より知内川を約1.5 km下流に下った地点で、河川工事の際に地下約数mのところで須恵器が発見されている。須恵器の器体はあまりローリングをうけていないが、工事関係者より聞いた出土状況や本調査の知内川寄りの堆積などから類推して、現地点よりそう遠くない場所から流されてきたのではないだろうか。そうした場合、出土地点の上流にある寺久保や下開田の集落周辺に遺跡の埋もれている可能性が指摘できる。

3 調査の経過

調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、滋賀県文化財保護協会嘱託本田修平(現 彦根市教育委員会)を主任に、ほ場整備の夏期施行区域を対象に昭和54年4月6日から5月10日まで実施した。 発掘調査は、まずほ場整備によって削平される水田に、バックホウで順次約2~3m角の試掘坑を穿って、遺



第2図 トレンチ配置図(1)



物包含層および遺構の有無について確認を行った。試掘坑は総計42カ所となったが、その内上開田の集落の北西側で小規模な古墳時代と中世の複合する遺跡を発見したほか、縄文時代中、後期の土器を多く含む二次堆積層を検出した。そこで、調査を集落北西側の工事によって削平をうける部分に集中し、遺跡の状況を把握するため試掘坑を拡張して行った。その結果、遺跡の広がり、二次的堆積の状況と旧地形などを明らかにすることができた。

4 調査の結果

第16トレンチ

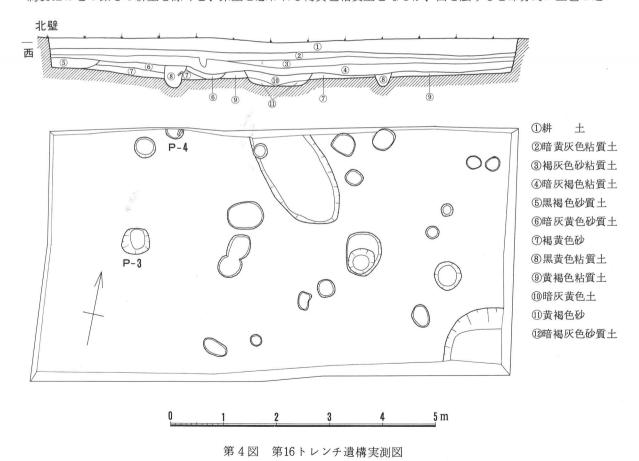
遺物包含層の確認される、最も北に位置するトレンチである。地形的には、仲仙寺山から延びる尾根の最先端にあたる。

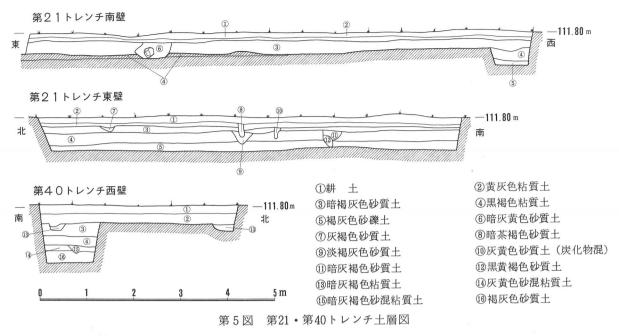
耕土下約30cmほどで認められる第2層――暗黄灰色粘質土には、中世の遺物と縄文式土器の小破片が包含されていた。トレンチ北壁西側でみられる第3層――暗灰褐色粘質土層の上面で、ピットや土坑状の落ち込みが認められたが、トレンチの東南側は砂礫層となる。検出されたピットは規則性も無く、また土坑状の落込みも、羽釜などの遺物が入ってはいたが、焼土、炭などは認められず、遺構とは断定しがたいものである。

第16トレンチの南側に位置する第14、15トレンチでは、砂層に落込みが認められ中世の遺物が出土した。しかし、この遺物の含まれた落込みは、砂層上にできた窪みに遺物包含層が入込んだものであった。この事から、第16トレンチの落込みも、同様なものであると考えられる。

第20トレンチ

約30cmほどの深さの耕土を除くと、床土と思われる褐黄色粘質土となるが、面を広げると部分的に土色の違い





が認められ、あるいは遺構面かと思われたが、結果的には二次的堆積の際の土の違いであることが判明した。縄 文時代の遺物は、大半がこの層から出土する。遺物の出土状況は、前記した土色の違いによって密度が異なることはあるが、ほぼ全面に散布していた。出土の密度は、土色の褐色が強い部分に多く、遺物包含層の厚さは約60~70cmであった。出土遺物は、縄文時代中、後期の土器を主体に、石斧、石錘などの石器、さらに少量の須恵器などがあり、各々混在した状態で出土した。

この二次堆積の遺物包含層よりさらに下層を、バックホウで掘下げ確認を行った。その結果、第3層は上部にやや砂が混るが青灰色粘土層で、層中より寛永通宝が出土した。また第4層では、植物遺体と粘土の混るスクモ層となった。以上のことから、第2層と第3層が年代的に逆転していることと、第4層の状態から、東西に伸びる谷か沼状の湿地を、江戸時代に付近の縄文時代の遺跡のある土地を切取って、埋めたてに用いて現状の高さの水田に変えたものと推定される。

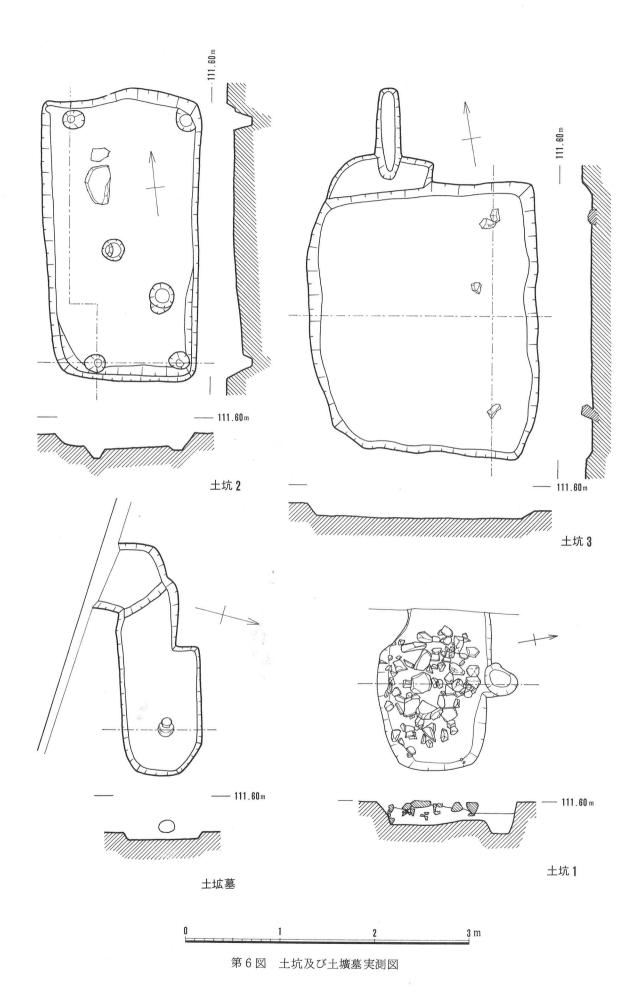
第21トレンチ

集落の北側に近接して広げたトレンチで、縄文時代の遺物が多量に出土した第20トレンチの南東側にあたり、 田面で約50cm高いことから、縄文時代の遺構の検出が期待された。

約10~15cmの厚さの耕土を除去すると、第2層は縄文式土器片と中世の土器が混在する黄灰色粘質土の包含層となり、第3層——暗褐灰色砂質土上で遺構が検出された。

遺構は、ピット、土坑などその性格が明らかでないものが大半を占め、第16トレンチ同様生活面上の窪みを包含層が覆ったため、一見遺構のように見えるものも含まれよう。このことは、トレンチの各部で下層の状況を的確に把握するために掘り下げた断面からも確認されている(第40トレンチ西壁)。現在、明確に遺構と考えられるものは、形状あるいは遺構の壁面がしっかりしたもの――古墳時代の土壙と、中世の土坑4カ所の計5カ所を数えるのみである。ピットについては、建物の柱穴を構成するものは無く、おそらく稲木等の田に関係するものであろう。

土壙墓 トレンチの南東端で検出されたもので、長軸約 1.9 m、短軸約90cm、深さ20cmを測る楕円形をした 土壙である。土壙周辺の地山は砂質が強く、検出後の遺構壁面は崩れやすいものであった。土壙の西南端は他の 土壙と重複しているが、相互の切り合いの前後については明確にできなかった。土壙内の北東部には、脚部を意





-15-

図的に欠いたと思われる台付壷が立てた状態で置かれ、土壙の形状、須恵器の出土状況から判断して、土壙墓の 可能性がきわめて強い。

土坑1 長辺1.7 m以上、短辺1.2 m、深さ20cmほどの楕円形をした土坑で、坑内に集石が認められ、集石の上部および集石中から炭および炭化米が少量検出された。また、集石中に、信楽の胴部と思われる破片が混り込んでいた。中世の整理坑かと推定される。

土坑2(小屋状遺構) 長辺3.1 m、短辺1.6 mの長方形の平面をもち、深さ20cmほどの皿状の窪みをなす竪穴遺構で、四隅には斜めに入り込む柱穴がある。遺物はほとんど検出されていないが、ごく少量の覆土中の遺物からみて、土坑1と同様中世のものと考えられる。遺構の性格については不明な点も多いが、構造からみて簡単な小屋掛けを持っている野小屋的なものと理解している。

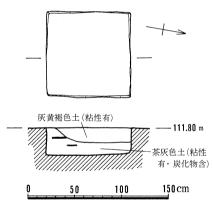
土坑3 土坑2の南側に近接して位置し、長辺2.8 m、短辺2.4 m、深さ10cmを測る方形の土坑で、遺物はほとんど検出されなかった。規模、形態より考えて、土坑2と同様な性格と年代を有するものと推定される。

土坑 4 土坑 3 の西側に位置する、長辺 1.8 m、短辺 1.3 mの南側に丸味をもつ不整形な土坑である。遺物は検出されず、遺構の性格についても不明である。

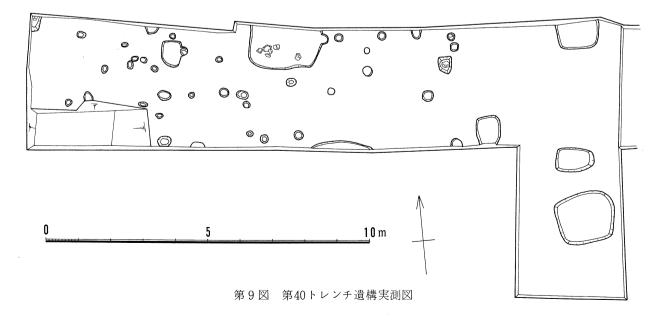
第41トレンチ

集落の北西端で、第21・40トレンチの東方の、地形が周囲より約50cmほど高い水田に設定した、南北に長いトレンチである。本トレンチは、第20・21・40トレンチを中心として出土した縄文式土器に関連する、遺構および

遺物包含層を確認することに主眼をおいた。しかし、13世紀頃の遺物に混じって微量の縄文式土器の小片が検出されたにとどまる。また、第3層の黄褐色粘質土を掘り込んで、一辺が約90cmのほぼ正方形をした、深さ約30cmの土壙が確認された。この土壙は、壙内の四周の壁が焼けており、底に約6cmほどの厚さで灰の層があった。遺物は出土しておらず、年代は不明であるが、本トレンチの南側に道を隔てて墓地があり、そこに1基の石祠がある。その大きさが、土壙の上部施設と考えるとよく合致し、あるいは石祠と関係するなら、江戸初期の火葬墓の可能性が推測される。



第8図 第41トレンチ・焼土壙実測図



5 出土遺物

縄文時代の土器と歴史時代の土器が同一層より出土している。ことでは一応縄文時代と古墳時代及び歴史時代の土器とに分けて考えていきたい。

(1) 縄文式土器

主に第20トレンチからの出土であり、それ以外のトレンチからの出土は極めて少ない。現在整理の途中であり、 整理が進むに従ってさらに詳しく判るものと考えられる。総体的に器壁への鉄分付着が著しく、残りは非常に悪い、精製と粗製の別はあるが、器形は鉢、注口土器の二種類である。

- (1) は上下2つの円弧の凸帯に箆状工具によりきざみ目をつけ、その円弧間はやや堅めの繊維による縄文をつけ地文様にしている。 (2) の器表の地文様も (1) と同一であり、 (1、2) ともに深鉢になるものと思われる。
 - (3、4)の深鉢は地文様を無節縄文でおおい、(4)には貼付突帯を付ける。

精製深鉢はその口縁部の形態、外面の施文等の違いにより大きく分けて6つに分類することができる。

A類(5)、巾5㎜の太めの平行沈線を伴う磨消縄文で、口縁部は内弯し、口縁端部は水平に面取りを行う。 沈線間に沈線の原体と思われる竹管で竹管文をつける。

B類 (6)、巾3㎜の平行沈線を伴う磨消縄文で、口縁部は内弯しており、口縁端部を内側に大きくつまみ出している。外面下方は無文帯になっている。

C類(7、8)、A類より細めの巾2mmの平行沈線を伴う磨消縄文で、形態はA類とほぼ同様である。

D類 (9.10)、円弧や平行沈線を施した大きなキャリパー状になる深鉢の波状口縁部で、口縁端部は丸くおさまる。外面下方は無文である。

E類($11\sim13$)、D類に比べて施文構成が単純化しているキャリパー状になる深鉢の口縁部で、外面下方は恐らく無文になるものと思われる。(13)は刺突文を伴う。

F類 (14)、口縁部が逆「くの字」状になり、口縁端部は内傾し尖りぎみにおさまる。内傾した端部外面に縦方向に粘土紐を貼付け、その上に箆状工具により刻み目をつける。

A~F類以外に胴部ではあるが沈線文のもの(16)、綾杉文と沈線文の組み合わせのもの(15)があり、(15)はあるいは注口土器の胴部になるかもしれない。

粗製の深鉢はその口縁部の形態により、大きく3つに分類することができる。

A類(18)、口縁部がやや内弯している。

B類 (19) 、口縁部はほぼ直線的に外上方に開く。

C類(20~23)、口縁部は外反している。

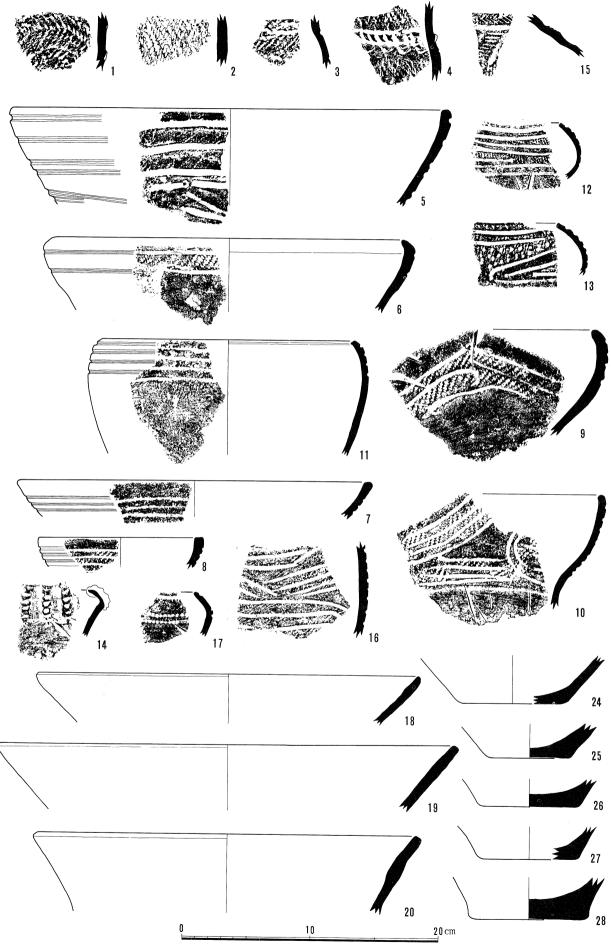
粗製深鉢の底部はその形態により、大きく3つに分類することができる。

a類(24~37)、底部が平底かそれに近いものである。

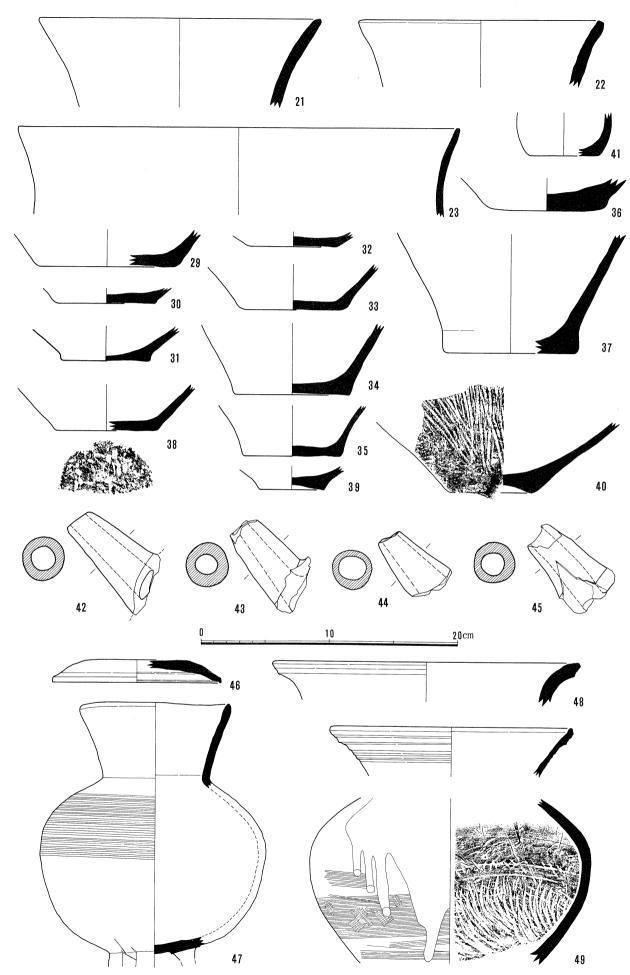
b類(38)、平底で底部に網代痕を残すものである。

c類(39、40)、窪み底になるもので、(40)は胴部外面に恐らく貝殻を使ったであろうと思われる条痕文を施している。

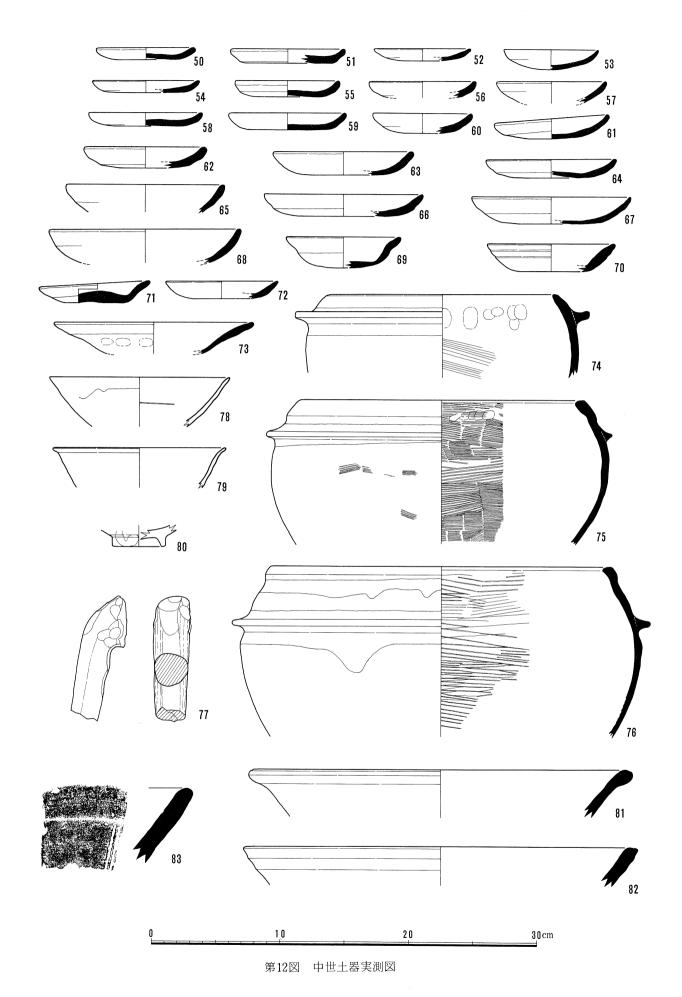
 ${\bf a} \sim {\bf c}$ 類以外で底部が平底になるものがあり、恐らく小型のコップ状のものになると思われる。(41) 注口土器は、口縁部(17)と注口部(42~45)が出土している。(17)は口縁部と体部の ${\bf 3}$ カ所に棒状工具に



第10図 縄文式土器実測図



第11図 縄文式土器・須恵器実測図



-20-

よる連続刺突文を巡らせる。注口部は長いもの(42、43)と短いもの(44、45)とがある。いずれもがほぼ直線的に先細りになっている。

(2) 古墳時代~歴史時代の遺物

古墳時代の遺物は、第20、第21トレンチから、歴史時代の遺物は、主に第16トレンチからの出土であり、それ以外のトレンチからの出土は極めて少ない。器形は土師質の皿が圧倒的に多く、他に須恵器の坏蓋・甕・壷・土師質・瓦製の羽釜、磁器の碗、陶器の擂り鉢・鉢と種々の器形があり、時代もさまざまである。

須恵器

坏蓋(46)は内面のかえりが消滅し、口縁部はやや外下方にさがる。天井部は中央がやや窪んでおり、器高は低く器壁は厚い。

台付壷(47)は口縁部がわずかに外反しながら立ち上る。口縁部は焼成時の歪みがみられる。頸部はあまり屈曲せず、胴部は球体である。三方透かしの貼り付け脚部は、貼り付け後に透かし窓をあけているようである。

甕(48)は口縁部が外反し、口縁端部で一度屈曲し外面に面を作る。器壁は厚い。

甕(49)は口縁部と胴部の破片であり、恐らく同一個体と思われる。緩やかに外反する口縁部は口縁端部においてやや屈曲し、その後内弯して丸くおさめる。胴部は球体である。

土師器・土師質土器

土師質の皿は、いくつかの形態があるが、口径の法量により小皿($50\sim62$ 、 $69\sim72$)、中皿($63\sim67$)、大皿(68、73)の三種類に分類することができるが、小破片からの復元で、法量に多少誤差の生じているものも含まれよう。

(50~62、72)は概ね口縁部に面取りを施す畿内で一般的にみられるもので、整形は口縁部内外面に横ナデを施し、底部外面は不調整である。

- (71) は口縁部が外反する。
- (69) は口縁部中程で屈曲し、再び外方へのびている深い小皿である。
- (70)は口縁部内面が外弯し、器壁がやや厚いものである。

大皿は口縁部が内弯するもの(68)と口縁端部がやや肥厚し外反するもの(73)の二種類がある。

羽釜は口径より大・中・小の三種類がある。

- (74) は小型で、口縁部は内弯し口縁端部が丸くおさまる。つば部はやや上向きながら水平であり、先端は角になる。
- (75) は中型で、口縁部は内弯し口縁端部はやや内面肥厚している。つば部は断面三角形の短いもので、瓦質の可能性もある。内面に横刷毛を施す。
- (76) は大型で、口縁部は内弯し口縁端部はやや内面肥厚している。つば部は短くほぼ水平で先端は丸い。内面には粗い横刷毛を施す。
 - (77) は羽釜の脚部で脚部下方を欠いているが、羽釜胴部への接合方法を知りえる好例になると思われる。

陶磁器

青磁の碗(78、79)は共に口縁部を外方に強く引き出したもので、文様はみられないが、(78)は内面中程に一条の沈線が入る。

- (80) は天目碗(瀬戸)の高台で、高台はやや外にふんばり内側で接する。
- (81) は産地不明の鉢で、ゆるやかに外反した口縁部は、口縁端部で外面肥厚し丸くおさまる。

(82、83)は共に信楽の鉢であり、(82)は口唇部にゆるい一条のナデによる凹線が入る。(83)は口縁部下方の内面に沈線を周らし、2本以上を単位とする条線が入る。

(3) 小 結

以上出土遺物の形態を中心に述べてきたのであるが、大部分の土器が同一層よりの出土であり、層位別による時期区分は困難な状態である。以下縄文式土器と古墳時代及び歴史時代の遺物に分けて、時期決定を混じえながら補足していきたい。

縄文式土器はその大部分が深鉢であり、器形的にみてバラエティーに富んでいるとはいえない。しかし同一器 形においてもその施文パターン及び形態の違い等から中期中頃から後期中頃までの時期に分類することができる。

 $(1 \sim 4)$ はその施文パターン及び地文様の特徴等からして船元式と思われる。また個々の土器を細かくみて② いくと、(1)は凸帯の隆起が里木貝塚出土の船元式土器よりも少なく刻み目も浅い感じがする。これが時期的な差を表わすものか、滋賀県における船元式の地域的な特徴を表わすものかは現在のところ不明である。今後滋賀県及び隣接各県の発見例が増加するに従って解明されるかもしれない。また(4)の貼付突帯下方の円弧は、縄文施文時の紐のあたりと思われ、縄文施文の方法を知りえる好例になるものと思われる。

粗製深鉢のA類は、その施文パターン及び口縁端部の形状等からして中津式のものである。しかし、この期に属するものは1点のみであった。B類は口縁端部の様相が、内側に大きくつまみ出されているという点で中津式とはやや異なり、中津式より後出の福田KII式の範疇に入るものと思われる。ただ沈線の太さが福田KII式に比べるとやや細く、これも地域的な特徴なのかもしれない。C類はその施文パターン等からして関東の加曽利BI式にその類形を求めることができる。他の精製土器については、恐らく福田KII式から北白川上層式に該当する後期中頃を中心とする時期の遺物であろう。

精製土器については、精製土器に比べて詳細な時期を決定する良好な資料はみあたらないが、底部の形態を中心にみていくと、当遺跡出土の底部を大きく3つに分類したが、b類の底部は一乗寺K式に多くみることができ、続く元住吉山式においてはほとんどみられなくなり、次第に窪み底であるC類に移っていく。ただ当遺跡出土の底部では、b、c類の割り合いが低く、これに対応する型式の精製土器が認められないことから、この数点だけからして粗製土器の時期を決定するのは早急すぎると思われる。全体的にみれば粗製土器も精製土器と同様に後期中頃(福田KII式~一乗寺K式)を中心とする時期のものと考えられる。

須恵器の脚台付壷(47)は、類例として兵庫県西宮市具足塚石室床面出土土器群と比べた場合、胴部はこの土器の方が丸く、口縁端部もやや厚く丸みをおびている点等から考えて6世紀後半頃のものと考えられる。(49)の甕は、口縁部はあまり外反せず凸線は明確でない。内面の円孤文の叩きが一部スリ消されており、外面も平行叩き後、2次調整としてカキ目を施している。湖西線関係遺跡 V D 区東半6号墓出土の甕と比べてみた場合、当遺跡出土土器の方が全体的にややシャープである。また陶邑TG203号窯出土土器と比べた場合、この遺物の方が外反度が少なく、凸線の鋭さにおいては劣るが、口縁端部に面はもたない。これらの点等から考えて6世紀後半頃のものと考えられる。(46)の坏蓋は、内面のかえりが消滅し、器形の低い扁平な蓋で、弘川遺跡出土例等からして、8世紀から9世紀初めの頃のものと考えられる。(48)の甕は口縁部の感じが厚く、恐らく8世紀代のものと思われる。

土師質の皿は小皿・中皿・大皿の別はあるが、概ね口縁部に面取りを行うものである。これらの土器は、中之の 切 坊遺跡第 102トレンチ出土遺物に類例を求めることができ、12世紀後半から13世紀初め頃に比定できると思われる。ただこの範疇に入らないものに($69\sim71$ 、73)がある。これらの土器は前述のものに比べ、出土状況において は層位が異なり、また形態的にも口縁部が外反しており、口縁端部外面の面取りも見受けられず、時期がやや下り14世紀以後のものと思われる。

生師器の羽釜は三種類あるが、口縁部が内弯し、つば部下方に媒の付着がみられる。富波遺跡出土遺物や中之 坊遺跡第102トレンチ出土遺物及び当遺跡出土の土師質の皿との伴出関係から考えて、恐らく13世紀頃に比定で きるものと思われる。

青磁の碗については、他の土師器と同様に13世紀頃のものと考えられる。

他の陶磁器については、他の土師器同様に13世紀から14世紀にかけてのものと考えられる。ただ(83)の擂り 鉢は、室町時代に下るものと思われる。

出土遺物を時期的に分けると

- (1)縄文時代中期の船元式を中心とする一群
- (2)縄文時代後期福田KII式より北白川上層式を中心とする一群で、本遺跡出土の縄文式土器の中心となる時期
- (3) 古墳時代後期の6世紀後半の一群
- (4) 平安時代初期の一群
- (5)鎌倉時代初期を中心とする一群で、本遺跡出土の土師器の中心となる時期
- (6)室町時代の一群

6 ま と め

以上、今回の調査によって知りえたことをまとめ列記すると次のようになる。

- (1)調査当初予測された寺院関係の遺構は検出されなかった。しいてあげれば、奈良~平安時代頃の須恵器がそれに関連したものかもしれないが、集落の遺物が流入した可能性もあり断定はできない。
- (2)第20トレンチで、縄文時代の遺物包含層(おそらく遺構もあったと思われる)が切り取られて浅い谷の造成に再堆積した状態で検出された。おそらく付近に、小規模な縄文時代の遺跡が所在していたものと推定されるが、調査範囲内では確認できなかった。
- (3) 縄文時代後期の土器についてみれば、同じ知内川の下流の平野部に仏性寺遺跡があり、やはり後期の土器をかなりまとまった状態で調査している。この両遺跡を比較すれば、仏性寺遺跡が中津式、福田KII式、北白川上層式、上開田遺跡が福田KII式、北白川上層式、一乗寺K式に主体があり、上開田遺跡の方が新しい様相を持っている。この両遺跡の土器をまず型式的に分類し、同一型式によってならべ組み立てれば、知内川流域における縄文時代後期前~中葉にかけての編年が可能である。
- (4)知内川左岸には、北牧野、西牧野両古墳群をはじめとする群集墳が所在するのに対し、右岸には古墳がほとんど知られていなかった。今回、古墳時代後期の土壙墓が一基検出されたことから、今後群集墳形成期の古墳を築造することのできなかった階層の墓制を考えるうえでの一資料となろう。
- (5)中世の遺物は、鎌倉、室町時代の二時期の遺物が出土しているが、顕著な遺構は少なかった。小規模な方形の竪穴遺構は、柱穴状のピットをもつことから、野小屋的な性格をもつものと考えている。第41トレンチで検出された火葬墓と考えられる土壙も単独であり、特に墓地を形成していない。畦畔にみられた室町時代の石仏と対応させるには、すでに石仏の数の方が多く、おそらく直接関係するものではないであろう。

これらのことと地形から考えて、当該地は中世においては、山麓で水温も低く、平坦地も少い小支丘の連なりで、現在のように十分開墾されておらず、あるいは畑地が点在していたような状態であったかもしれない。おそらく今日のような農村景観をなすのは、第20トレンチでみられたような造成のなされる江戸時代以降のことであろう。

註

- ① 勿谷石製(凝灰岩)の石祠で、中にやはり勿谷石製の一石五輪塔を収めている。
- ② 間壁忠彦・間壁葭子『里木貝塚』 (倉敷考古館研究集報第7号、倉敷考古館、昭和46年)
- ③ 具足塚発掘調査団編『具足塚発掘調査報告』(西宮市教育委員会、昭和51年)
- ④ 湖西線関係遺跡発掘調査団編『湖西線関係遺跡調査報告書』(滋賀県教育委員会、昭和48年)
- ⑤ 中村浩・高島徹他『陶邑』Ⅱ(大阪府文化財調査報告書第29輯、大阪府教育委員会、昭和53年)
- ⑥ 田中勝弘『弘川遺跡発掘調査報告書』 (滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和54年)
- ① 兼康保明「高島町中ノ坊遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』V、滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保 護協会、昭和53年)
- ⑧ 丸山竜平・山口辰一他「野洲郡野洲町富波遺跡調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和48年度、滋賀県教育委員会、昭和50年)
- ⑨ 兼康保明・本田修平・堀内宏司「高島郡マキノ町仏性寺遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』WI-2、 滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保護協会、昭和54年)
- ⑩ 高島郡マキノ町仏性寺遺跡、同上開田遺跡の縄文式土器については、整理完了後、湖西の他遺跡出土の縄文式土 器と共に別途報告を計画している。
- ① 類例は、大阪府高槻市川西遺跡、奈良県橿原市軽池北遺跡などにみられる。河音能平・原口正三「中世荘園村落と農民の生活」(『高槻市史』第1巻、高槻市役所、昭和52年)奈良国立文化財研究所編『軽池北遺跡発掘調査報告』(軽池北遺跡調査会、昭和52年)

上開田遺跡出土土器観察表

縄文時代の遺物

器 形	No.	形態の特徴	手 法 の 特 徴	文 様	備考
中其	明縄文記	岩上岩			
深 鉢	1	胴部はほぼ真直である。外 面に2本の円弧の凸帯を貼	地文様は堅めの繊維に よる縄文。	円弧上に刻み目を入れる。	40トレンチ 第3層 茶 褐色 小石を含む。
	2	胴部はほぼ真直である。	地文様は堅めの繊維に よる縄文。		40トレンチ 第3層 淡 茶褐色 小石を含む。
	3	胴部は内弯後上方でやや外 反。	地文様は無節縄文。		20トレンチ 第2層 茶 褐色 小石を含む。
	4	貼り付け突帯を中心に上方 は外反、下方は内弯した胴 部。	外面は無節縄文、内面 は丁寧なナデ。	貼り付け突帯。	21トレンチ 第3層 淡 茶褐色 1 mm位の微砂を 含む。
後期	· 明縄文云	尤土器			
精製深鉢	A 類	口縁端部に面取りを行う。	磨消縄文。	3条の平行沈線と線文、 竹管文。	褐色 微粒の金雲母片含。
	B 類 6	口縁部は内弯し、口縁端部 は内面肥厚。	磨消縄文。	2条の平行沈線。	20トレンチ 第3層 濃 褐色、微粒砂を含む。
	C 類7、8	□縁端部はほぼ丸くおさまる。	磨消縄文。	7 は3条、8は4条の 平行沈線。	8、40トレンチ 第3層 黄褐色、微粒砂を含む。 7、20トレンチ 第2層 赤茶褐色、微砂を含む。
	D 類 9、10	大きなキャリパー状になる 波状口縁部。	磨消縄文。	10は波状にそった4条 の平行沈線と円弧と線 分 9は波状にそった平行 沈線と沈線端部を折り 曲げた線分。	10、20トレンチ 第2層 茶褐色、微砂を含む。 9、31トレンチ 第2層 赤茶褐色、微粒の金雲母 片を含む。
	E 類 11~13	キャリパー状になる□縁部	磨消縄文。	11は4条の平行沈線、 13はZ字状に流れる沈 線文と刺突文、12は沈 線文。	11、20トレンチ 第2層 淡黄褐色、微砂を含む。 13、20トレンチ 第2層 黄茶褐色、微粒砂を含む 12、20トレンチ 第2層 黄褐色、微砂を含む。
	F 類 14	口縁端部は内傾。	内外面共に箆磨きと思 われる。	内傾した端部外面に縦 に粘土紐を貼り付け、 その上に刻み目を入れ る。	42トレンチ 第3層 暗 褐色、微粒砂を含む。
	15	胴部はほぼ真直である。		綾杉文と沈線文の組み 合わせ。	20トレンチ 第2層 淡 茶白色、微砂を含む。
	16	胴部は内弯している。	外面は削り、内面はナデ。	沈線文。	20トレンチ 第2層 黄 茶褐色、微砂を含む。
粗製深鉢	A 類	口縁部は内弯している。	内面は削り、外面は不明。		20トレンチ 第2層 黄 褐色、微砂を含む。
	B 類 19	口縁部はほぼ直線的に立ち 上る。	外面は削り、内面はナデ。		31トレンチ 土坑内 灰 褐色、微砂を含む。
	C 類 20~23	口縁部は外反している。	20内外面共に磨き 21外面は削り、内面は		20、31トレンチ 第2層 黄褐色、微砂を含む。

	l			I .			
				ナデ。			21、22、23、20トレンチ
				22内外面共に不明			第2層、淡茶褐色、微砂
				│23外面は削り、♬ │ナデ。	国面は		を含む。
	a 類	底部はほぼ平底	 長である。	外面に磨きを施す	-もの		25、31トレンチ 第2層
	24~37			が多い。			27、40トレンチ 第3層
							他は20トレンチ 第2層
							色調は淡黄褐色か淡赤褐
							色系統で、胎土は概ね微
							砂を含む。
	b 類	底部は平底であ	 うる。	底部に網代痕を発	します。		20トレンチ 第2層 淡
	38			他の内外面は磨き	š 0		茶褐色、微粒砂を含む。
	C 類	底部は窪み底で	 ごある。	外面は磨き、40%			39、20トレンチ 第2層
	39, 40			に貝を使った条痕			濃灰色、石英片等を含む
		-					40、20トレンチ 第2層
							茶褐色、微砂を含む。
コップ状	41	底部は平底で、	体部は内弯	磨きと思われる。			20トレンチ 第2層 茶
の鉢		している。					褐色、微砂を含む。
注口	17	口縁部は内弯し	 ,ている。			口縁端部と口縁部中程	20トレンチ 第2層 赤
	:			, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,		外面に計3つの丸棒状	褐色、微粒砂を含む。
						工具による連続刺突列	
						点文を囲らす。	
	42~45	先細りのする泊		外面は磨き。		3.00 (0 2 2 3 3 0	42、20トレンチ 第2層
							黄白色、微砂を含む。
							43、20トレンチ 第2層
							濃茶褐色、微砂を含む。
							45、40トレンチ 第4層
							土坑 4-4 黄白色、微
							砂を含む。
							44、40トレンチ 第3層
							赤褐色、微粒の金雲母片
			· ·				を含む。
1	古墳~月	歴史時代の遺	動				
器形	No.	法 量 (cm)	形 態	の特徴	Ę	手法の特徴	備考
			۶.				
須	恵 岩	是				`	
坏 蓋	46	口径 14.1	内面のかえり	のが消滅、口縁部	天井台	部の不調整を除いて、他	色調 淡灰色
		器高 1.8	は外下方にお	おり、口縁端部は	の内外	外面はミズビキ調整。	胎土 石英片等を含む。
			丸くおさまれ	3.			焼成 硬
							38トレンチ 第2層 残
							1/4
台付壷	47	口径 11.3	口縁部はわる	<u></u> ずかに外反しなが	口縁音	 部内外面はミズビキ調整、	
			ら立ち上る。	胴部は球体で、	胴部	上半はカキ目、下半は箆	胎土 2㎜位の小石を含
				透しの貼り付け。		透しは貼り付け後に穿	ť.
					つ。		焼成 硬
							21トレンチ 土壙墓 脚
							部を除いてほぼ完形
甕	48	口径 23.5	口縁部は外月	 页し、口縁端部で	外面に		色調 暗灰色
			上方につまる			デ調整。	胎土 精良
					" "	· 	焼成硬

49 日曜 18.5 競やかに外反する口縁的は、								1611111 程1 /0
日報報的で上方につまる上げる。 関節は球体である。 日報報外面下方に対している。 日報報外面下方には上興等。下方は、機疲、硬 一部の 日報報外面下方には上興等を 技術を 大 正 日報報は内質し、日報報が 日報報外面及び内面は横ナデ 色譜 技術を 大 正 日報 日報報は内質し、日報報的 日報報外面及び内面は横ナデ 色譜 技術を 提出 大 上 大 上 大 上 日報 大 日報 日報			40		105	(何のかけり 巨士フロ 緑如け	明如从五戸立会田を後取され	16トレンチ 残1/8
上方はミスピキ 調整、下方は 一般表 記した 一部ス 一部、 一部ス 一部、			49	口径	1 0. 0			
一部								
日本の						る。胴部は球体である。 		
世 2 4								
土 師 器							口縁部外面下方には工具等を	面に自然釉が付着
小 □ □ 50 □ ○ □ ○ □ ○ □ ○ □ ○ □ ○ □ ○ □ ○ □ ○ □							使った強めの横ナデ。	残 1/4
↑ Ⅲ 50 □径 7.4 □経部は外反し、□縁端部外 □縁部外面及び内面は横ナデ 色調 淡黄褐色 筒土 精良 境域 硬 72、37トレンチ 第2層 投いマンチ 第2層 投いマンチ 第2 層 投いマンチ 第3 順土 特良 機成 硬 16トレンチ 第4 層 投 上を 12 番								
1		土.	師	器				
62 9.1 1.0 72 72 73 71 72 72 72 73 74 74 75 75 75 75 75 75	小	Ш	50	口径	7. 4	口縁部は外反し、口縁端部外	口縁部外面及び内面は横ナデ	色調 淡黄褐色
1.0 1.			≀		≀	面に面取りを行う。	底部は不調整。	胎土 精良
1.95			62		9. 1			焼成 硬
1.95			•	器高	1. 0			72、37トレンチ 第2層
69			72		₹			他は16トレンチ 第2層
図					1.95			残1/3~1/7
## 20			69	口径	8. 6	口縁部中程で屈曲する深い小	口縁部外面及び内面は横ナデ	色調 淡褐色
16トレンチ 第3層土射 11 残1/7 70 口径 9.8				器高	2. 5	□.	底部は不調整。	胎土 精良
11 残レ7 12 13 14 15 15 16 17 16 17 17 17 18 18 17 18 18								焼成 硬
70								 16トレンチ 第3層土坑
胎土 精良 機成 やや軟 16トレンチ 第4層 列 1/6 71 日経 8.2 日縁部は外反し底部内面が盛								11 残1/7
焼成 やや軟 16トレンチ 第4 層 列			70	口径	9. 8	口縁部内面が外反している。	内外面共に横ナデ。	色調 淡褐色
焼成 やや軟 16トレンチ 第4 層 列								胎十 精良
16トレンチ 第4 層 列 1/6 1/6								
1/6 1/								
71								
最高 1.7 り上る。 底部は不調整。 胎土 精良 焼成 硬 37トレンチ 第2 層 到 1/3			71	口径	8.2	□縁部は外反し底部内面が成	口縁部外面及び内面は構ナデ	
焼成 硬 37トレンチ 第2層 列 1/3			11	-				
中 皿 63 口径 9.7 口縁部は外反し、口縁端部は 力 (100	1. /	1 2 2 0	及即便。	
中 Ⅲ 63 □径 9.7 □縁部は外反し、□縁端部は □縁部外面及び内面は横ナデ 色調 淡黄褐色系統 胎土 精良 焼成 硬 16トレンチ 第3層 勇 1/4~1/7 大 Ⅲ 68 □径 14.7 □縁部は内弯し、□縁端部外 両に面取りを行う。								
中 皿 63 口径 9.7 口縁部は外反し、口縁端部は 口縁部外面及び内面は横ナデ 色調 淡黄褐色系統 胎土 精良 焼成 硬 16トレンチ 第3層 勇 1/4~1/7 大 皿 68 口径 14.7 口縁部は内弯し、口縁端部外 面に面取りを行う。						i i		7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7
12.3 ESSICHT	rh	m	63	口汉	0.7	□緑邨は外屋1 □緑랟邨は	口緑如从而及が内面は楪上デ	
12.3 焼成 硬 16トレンチ 第 3 層 列	+	mr						
器高 2.15 16トレンチ 第3層 列 1/4~1/7 大 皿 68 口径 14.7 口縁部は内弯し、口縁端部外 内外面共に横ナデ。 色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 16トレンチ 第3層 列 1/9 73 口径 15.3 口縁部は大きく外反し、口縁 内外面共に横ナデ。 色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 37トレンチ 第2層 列 1/4 74 口縁部は内弯し、口縁端部が 丸くおさまる。 口縁部外面は横ナデ、内面は 一般部 暗灰色 胎土 精良 焼成 硬 41トレンチ 第3層 タ 面に媒が付着 残1/5						入 (ね さ ま る 。	区のは小詞金。	
1/4~1/7 1/4			01	聖古				
大 皿 68 口径 14.7 口縁部は内弯し、口縁端部外				台田	2.13	:		
面に面取りを行う。 胎土 精良 焼成 硬 16トレンチ 第3層 月 1/9	+	m	68	口径	147	□ □ 縁部は内弯し □ □ 縁端部外	内外 面土 に 構 ナデュ	
焼成 硬 16トレンチ 第3層 預			00		1 1.1		13716 (10 (10)) 8	
73						<u>шсших у гелі у в</u>		
73				2-				
73								
端部はやや肥厚する。			70	L13A	1 5 0	口縁如けナキノが 巨 口 口 回 口	内外面サルサンゴ	
現 釜 74 口径 17.4 口縁部は内弯し、口縁端部が 口縁部外面は横ナデ、内面は 色調 暗灰色 別毛後上方のみナデ。 色調 暗灰色 胎土 精良 焼成 硬 41トレンチ 第3層 外面に媒が付着 残1/5			10	□□性	1 0.3		「Y37ト四六に伸びて。	
37トレンチ 第2層 列 1/4 羽 釜 74 口径 17.4 口縁部は内弯し、口縁端部が 丸くおさまる。						姉即はヤヤ肥序9る。		
羽 釜 74 口径 17.4 口縁部は内弯し、口縁端部が 丸くおさまる。 口縁部外面は横ナデ、内面は 色調 暗灰色 胎土 精良 焼成 硬 41トレンチ 第3層 夕面に媒が付着 残1/5								
羽 釜 74 口径 17.4 口縁部は内弯し、口縁端部が 口縁部外面は横ナデ、内面は 色調 暗灰色 丸くおさまる。								
丸くおさまる。 刷毛後上方のみナデ。 胎土 精良 焼成 硬 41トレンチ 第3層 ダ 面に媒が付着 残1/5					17.	口(目前) 上台市) — (目 III 上中) .		
焼成 硬 41トレンチ 第3層 タ 面に媒が付着 残1/5	XX 	釜	74	口径	17.4			
41トレンチ 第3層 タ 面に媒が付着 残1/5						丸くおさまる。 	刷毛後上方のみナデ。 	
面に媒が付着 残1/5								
								41トレンチ 第3層 外
│ 75~76 │□径 75 21.8 │□縁部は内弯し、□縁端部は│□縁部外面は横ナデ、内面は│色調 茶褐色								面に媒が付着 残1/5
			75~76	6 口径	75 21.8	口縁部は内弯し、口縁端部は		色調 茶褐色
76 24.6 やや内面肥厚している。 刷毛調整、76は粗い刷毛、胴 胎土 精良					76 24.6	やや内面肥厚している。	刷毛調整、76は粗い刷毛、胴	胎土 精良

	T	1	1	-	
				部外面は媒付着のため詳細は	焼成 75軟
				不明。	76硬
					75、16トレンチ ピット
					4 残1/6
					76、16トレンチ 残1/8
					いずれも外面にススが付
					着
	77		脚部下方を欠いている。	脚部は箆削り、接合部は指お	色調 暗褐色
				さえが残る。	胎土 1㎜位の微砂を含
					む。
					焼成 硬
					41トレンチ 第3層
			1		
陶	磁岩	5			
青磁碗	78、79	口径 78 14.0	口縁部を外方に強く引き出し	内外面共に横ナデ。	色調 78 緑灰色
		79 13.3	口縁端部は丸くおさまる。78		79 淡緑色
			は内面中程に一条の沈線が入		 胎土 精良
			る。		焼成 硬
					78、40トレンチ 第4層
					土坑4-7 残1/9
					79、14トレンチ 第3層
					残1/13
天目碗	80	高台径 3.4	 「八の字」型の高台である。	胴部外面は篦削り、他は横ナ	いずれも文様はない。 色調 淡黄灰色
\ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \	00	同口任 5.4	「八の子」至の向日である。	一デ。	胎土精良
				7 0	焼成硬
					16トレンチ
AL.	01	F747 00 6			残1/2
鉢	81	口径 28.6	口縁部は緩やかに外反し、口	内外面共にロクロナデ。	色調 淡黄褐色
			縁端部で外面肥厚する。		胎土 2~3㎜の小石
					を含む。
					焼成 硬
					16トレンチ ピット3
					残1/8
信楽鉢	82	口径 29.6	口縁部は内弯する。	内外面共にロクロナデ。	色調 赤茶褐色
					胎土 精良
					焼成 硬
		,			21トレンチ 残1/12
	83		口縁部は内弯する。口縁部内	内外面共にロクロナデ。内面	色調 外淡赤褐色
			面下方に沈線を囲らす。	に2本以上を単位とする条線	内赤茶褐色
				をつける。	胎土 1㎜位の微砂を含
					む。
					焼成 やや硬
			I		

-29-

第3章 高島郡マキノ町南牧野遺跡 (事業名 北牧野遺跡)

1 はじめに

本報告は、高島郡マキノ町北牧野、南牧野において、事業名「北牧野遺跡」として昭和54年度に実施したほ場整備事業に伴う発掘調査の結果をまとめたものである。当該事業地の北半は、北牧野古墳群に近接するため現在の水田下に、墳丘の削平された古墳跡の存在が予測された。ところが調査の結果、当初遺構の検出が期待された北牧野によった地域では一片の土器片すら出土せず、予想もしなかった南牧野で遺構および遺物包含層が発見された。したがって、遺跡の性格も所在地も当初と異ることから、南牧野遺跡として報告する。

さて調査地は、国鉄湖西線マキノ駅北西約3.2 kmの地点にあたる。さらに調査地域を詳細にのべるなら、知内川右岸の段丘上に立地し、南牧野から北牧野に至る県道287号線(小荒路、牧野、蛭口線)の東側で、北は北牧野の集落の南端から、南は南牧野の集落の北端までの範囲である。

2 調査の経過

調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者として、春と秋に二回、ほ場整備の実施に先立って行った。

第1次(春)調査は、滋賀県文化財保護協会嘱託久米雅雄(現大阪府教育委員会)を主任に、昭和54年4月19日から5月31日まで実施した。調査は、ほ場整備実施工区の北側に農道をはさんで境を接する墓地の周辺が、北牧野古墳群に最も近接することから、開墾などによって削平された古墳の存在を推定して試掘を行った(第い~ほトレンチ)。しかし結果は、耕土と床土を除去すると、地元で「クロボク」とよんでいる黒褐色粘質土層と砂礫層になり、遺構の存在はまったく認められなかった。そこで、水田化される以前の旧地形を確認することをも兼ねて、ほ場整備で削平される個々の水田に試掘坑を穿ち、遺物包含層、遺構の有無について確認を行った。その結果、大半の試掘坑では、遺物包含層および遺構は検出されなかったが、南牧野の集落に近接して中世遺物が出土した。そのため調査を南牧野に集中し、調査面を拡張して遺跡の性格を追究したところ、撹乱はうけているものの、中世の住居の一部ではないかとの結論を得た。

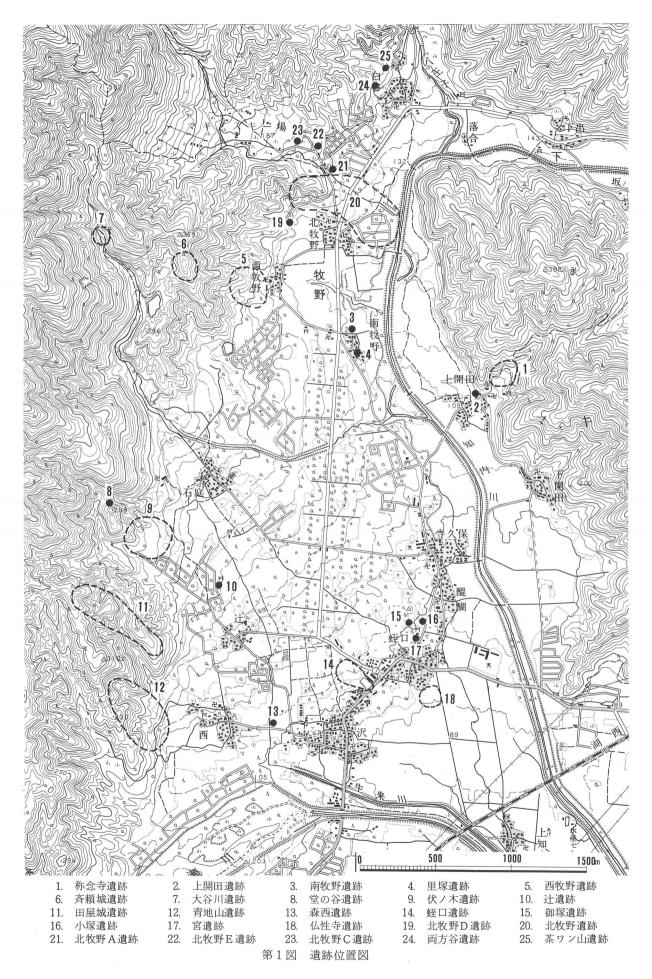
第 2 次(秋)調査は、昭和54年 9 月 10日から 9 月 24日まで、兼康が現場を担当した。調査は、第 1 次調査で住居の一部と思われる石列を検出したHトレンチと、農道をはさんで相対する南側の地域を対象に行った。しかし、第 1 次調査地点に接する付近のトレンチでわずかに遺物が出土したのみで、その他の場所では何ら遺構、遺物は検出されなかったため調査を打切った。

3 歷史的環境

調査のいきさつと遺跡の性格を理解する助けとなるよう、今回は場整備を実施した地域とその周辺に所在する遺跡についてみてみよう。

当地域においては現在までのところ、縄文、弥生時代の遺跡、遺物は発見されておらず、古墳時代以降遺跡が認められるようになる。

北牧野は、集落の北側から東側にかけて北牧野古墳群が所在する。この古墳群は、横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の群集墳で、現在25基以上の存在が確認されている。しかし、完存するものは少なく、墳丘が削





平されたり、石室の石材が露頭しているものが大半を占める。

また西牧野も、集落の背後の山麓に西牧野古墳群が所在する。この古墳群も、北牧野古墳群と同様に横穴式石室を内部主体とする後期群集墳で、17基以上所在し、なかでも斎頼塚古墳は玄室に石棚のある特異なものとして注目される。

こうした二つの古墳群の前面に広がる水田が、昭和54~56年にかけてほ場整備が施行される地域である。こう したことから、古墳群に近接するところでは削平された古墳、また、古墳群の前面に広がる水田下には、遺物の 散布こそ認められないものの、古墳時代の集落跡の存在が推定されていたのである。

一方、奈良、平安時代になると、北牧野では北牧野A~E遺跡とよばれる製鉄遺跡の存在がある。この遺跡は、『続日本紀』天平宝字6年(762)2月の記事にみられる恵美押勝の賜った近江国高島郡の鉄穴との関連で注目されている。

中世の遺跡については、本地域においてはこれまであまり注意されていなかった。ただ石造品についてみれば、南牧野の瑞光院境内に石造宝塔が所在することや、北牧野付近で工事中に出土したと伝えられる宝塔の残欠が北牧野の東漸寺に保管されている。また、室町時代の小石仏も、寺や墓地、あるいは畦畔に認められ、おそらくこの時期には集落の形成が十分にうかがえるのである。伝承によればこの地域の開発は、康平年間(11世紀)に源斎頼(あるいは僧西来とも伝える)が山野を開墾したと伝えられており、現在の村が古墳などの示す年代とはかなりへだたった時代の開発によるものであるとする点興味深い。

4 調査の結果

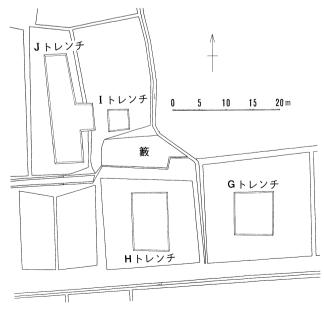
春秋2次にわたる調査で穿った試掘坑の数は、第2図に示すように57カ所におよぶ。

(1) 北牧野遺跡の調査

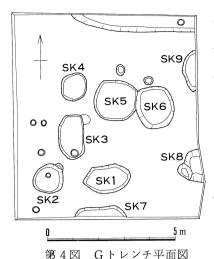
試掘坑のうち、北牧野の墓地に近接する、 "い、 ~ "ほ、、 $U \sim Y$ トレンチは遺構検出の可能性が強く最も期待されていたが、全てクロボクとよばれる黒褐色粘質土と礫層からなり、 "い、 トレンチで幅約 2 m、深さ約60 cmの自然流路(図版18)が検出されたのみである。

(2) 南牧野遺跡の調査

南牧野の集落の北東端の水田に、小さな藪が残されている。この藪は、自然にできたものとみるにはあまりにも不自然で、人為的に植えて作られたもののように感じられた。その理由は、付近の農家の中には、家の北側に風よけのために木を植え垣にしたものがみられるからである。そこで藪の周囲に試掘坑を掘ったところ、その南側で遺物が出土したため、試掘坑を拡張して調査を進めた(第3図)。遺構は、G、H、Jトレンチで検出された。各トレンチにおける層位は第5図のとおりであるが、包含層の認められるG、Hトレンチの場合、面で遺構を追っている時は、土色の変化が明確ではなくきわめて識別しがたかった。両トレン第



第 3 図 G • H • I • J トレンチ配置図



チの遺構面は、土層断面と遺構検出レベルから見て、表土下約50~60cmの 黒色砂礫層を除去した面と思われる。以下、G、H、Jトレンチの調査所 見をのべて行きたい。

Gトレンチ

平面形が直径約40~60cmの円形と、60~70cm×40cmの楕円形をした土坑があり、共に深さ10~20cmの浅い鍋底状を呈している。また、直径約20cmほどのピットも認められる。これら土坑やピットが、どのような性格をもつ遺構であるのかは不明である。

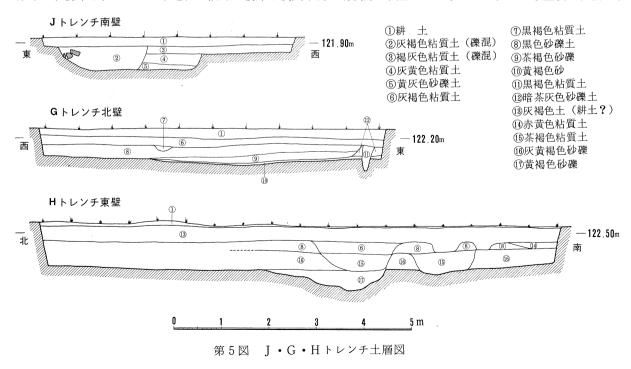
遺物は、微量であるが土坑—— $SK1 \sim 3$ より室町時代の土器片が出土している。また、SK4では中世と近世の陶器片が混りあっており、ピッ

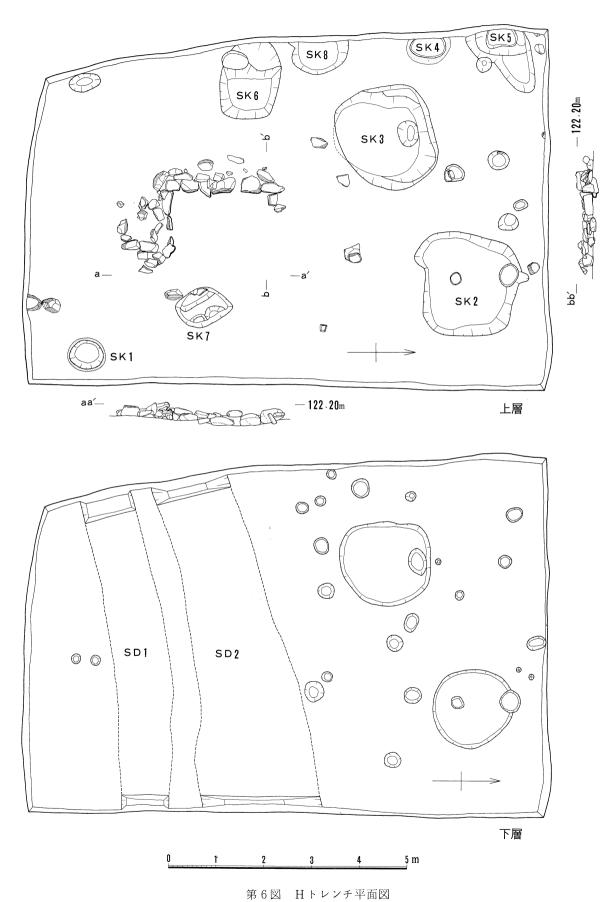
ト内からもやはり近世の擂鉢が出土している。さて遺構の年代であるが、土坑内の埋土に認められる微量な土器 片のみをもって、直ちに土坑の年代を決定することは難しい。

Hトレンチ

土坑と石列が確認されたが、すでに述べたように遺構検出の難しい土層で、東壁の土層断面図にみられるように、掘下げすぎて失われた土坑と思われる落込みも若干ある。遺物はGトレンチ同様、室町時代と近世のものが混在するが、各遺構を検出した面(遺構面)でとらえられる遺物は、ほぼ室町時代のものに限定される。

(土坑) SK1 & SK4は、共に土坑の周囲に黄色粘土がめぐり(第6図、土坑周囲のアミ部分)、土坑内は砂で埋っていた。土坑内の遺物は微量で、SK1からは銅製の煙管の先と炭化物、SK4からは近世のものと考えられる陶磁器の小破片が出土したのみである。土坑の性格については、土坑の周囲に粘土がめぐらされていることから考えて、土坑内に桶のような木製品を埋めてその周囲に粘土を巻いて固定したのではないかと思われるが確証はない。SK1、4以外の土坑は、規模の大小はあるがこれといった特徴はなく、Gトレンチの土坑同様、遺物の出土しないものもあり、また出土しても微量である。遺物は、SK3から天目茶碗かと思われる土器の口縁部の小破片と、SK5から近世の擂鉢の破片と銭文不明の銅銭片が出土したにすぎない。これら土坑の性格も、





Gトレンチ同様不明である。ただ、土坑中最大のS K 2 、3 は、ゴミ穴か撹乱によるものではないかと考えている。 (石列) 唯一の遺構らしい遺構で、幅 $30\sim40$ cmほどの河原石を $1\sim2$ 石積み、東と北側の面をそろえてL字形の石列を作る。石列の東南に散在する石も、東面する石列としてL字形の石列につながっていたものであるかも しれない。なお、L字形の石列を構成する石の間から、わずかではあるが土器片が出土した。

(下層の調査) 本トレンチの遺構面は、ほ場整備の際に削平されるレベルにあるため、下層に遺構があるのかどうかを確認するためさらに掘下げて調査を行った。その結果、上部で見落したピットと思われるものや、自然的要因によると思われるピットが検出された。また、トレンチの南側で、東西方向に流れる幅 $1.2\,\mathrm{m}$ 、深さ $40\,\mathrm{cm}$ の溝(SD1)と、その北に幅 $1.6\,\mathrm{\sim}2.5\,\mathrm{m}$ 、深さ $40\,\mathrm{cm}$ の溝の肩の落込みを見ると、SD1の方がSD2よりも上層に溝の肩があり、SD2より新しいことが判る。また、SD1の上面には石列があることから、すでに遺構形成時にはSD1は埋っていたものと理解できる。遺物については、上層からの混入か、上層の遺構検出で見落したピットに伴うと思われるものが数片あるほか、全く遺物は含まれていなかった。溝の性格については、遺物が下層で出土しないことや、溝の方向が地形に応じていることなどから、北牧野古墳群に近い、い、トレンチでみられるのと同様な自然流路と考えるのが妥当であろう。

Jトレンチ

南牧野の集落の配置から見ると、藪の外側にあたるためか、遺構、遺物はG、Hトレンチにくらべ少なかった。また、G、Hトレンチでは認められた遺物包含層が無く、すぐに遺構が検出された。検出された遺構のうち土坑は、大小形態は異るが、深さ $30\sim40$ cmの浅いもので、各土坑内からわずかに土師質土器片が出土した。土坑の性格は、H、Gトレンチ同様不明である。また、南北方向に並ぶ直径 $10\sim20$ cmの円形のピットは、ピット内の土から判断して稲木の抜きあとと考えられる。

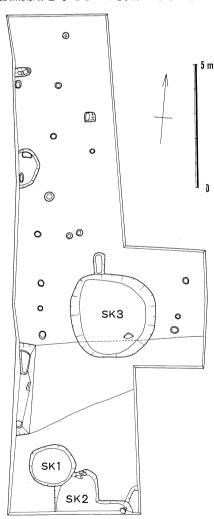
トレンチの中央部よりやや南で、Gトレンチ下層の溝と同じく東流する幅約3mほどの自然流路が確認された。SK3は、この溝と重複するが、溝が埋って後に掘込んだもので、Gトレンチの上層遺構と下層の溝の関係と矛盾しない。

第2次調査

G、Hトレンチと農道をはさんで南側の地点を発掘した。当初は、Hトレンチで検出された石列などに関連する遺構が続くものと期待されたが、1トレンチに包含層が続くのみで遺構はなかった。また包含層も、G、Hトレンチにくらべると遺物の出土量は極めて少く、遺跡の中心部からはずれているようである。

(3) 南牧野遺跡・遺構小結

これまで各トレンチごとにみてきた南牧野遺跡の遺構についてまとめる と、次のようになる。



まず共通する遺物包含層は、G、Hトレンチの黒色砂礫土であるが、遺物の出土状況は層中と、遺物包含層を除去した遺構検出面上(以下遺構面上とよぶ)で様相が異る。すなわち、遺物包含層中の土器は近世の陶磁器を主体とし、遺構面上では中世――室町時代の土器がほとんどである(遺構面上においても、近世の遺物が2片ほ

ど出土しているが、おそらく遺物包含層中のものが混入したものと考えられる)。南牧野で出土した遺物は、各層、各遺構内出土のものとも小破片ばかりであるが、ローリングはうけておらず、また遺物の出土するトレンチも限定されることなどから、現地点かその周辺で廃棄されたものであろう。

次に遺構の年代であるが、Gトレンチの説明の中でも述べたように、土坑内の埋土に認められる微量な土器片のみをもって、直ちに土坑廃絶の年代にあてるのは難しいと思われる。つまり本遺跡の場合、遺構に伴う遺物の出土状況は、遺構内に埋めたり捨てたりしたものではなく、遺構が埋まって行く過程で混入したと考えるべきものである。ただ遺構面上の遺物に、ある程度の時期幅を容認すれば同時性が認められることから、石列などはこうした遺構面上の薄い遺物包含層をかぶったものと考え、遺構の年代を知る一つの手がかりを得たと思うのである。おそらく室町時代——15世紀頃を遺構の年代とし、近世には埋っていたと考えられる。土坑については、遺物の量が少ないとはいうものの、土坑内に中世と近世の遺物が混在する例は1例しかなく、かなり遺物では中世と近世が明確に分離できる。おそらく、中世遺物を含む土坑の場合は、遺構面上の遺物堆積の時期とそう相前後しない時期の所産で、遺物包含層の形成された近世には埋っていたのではないだろうか。

遺構の性格については不明な点が多いが、中世の遺構のうちで石列は、現在の集落に近接して検出されたことや、中世の遺物の出土範囲が限定されることなどと関連して、室町時代の住居の一部ではないかと推定される。また、各種の土坑については、その当時のゴミ穴か撹乱によってできたものではないだろうか。

5 出土遺物

出土遺物は、全て南牧野の集落北東部に設けたトレンチからの出土で、中でもG、H、Jトレンチに集中している。しかし、出土した遺物はいずれも小破片で、出土総数も約60点ほどである。

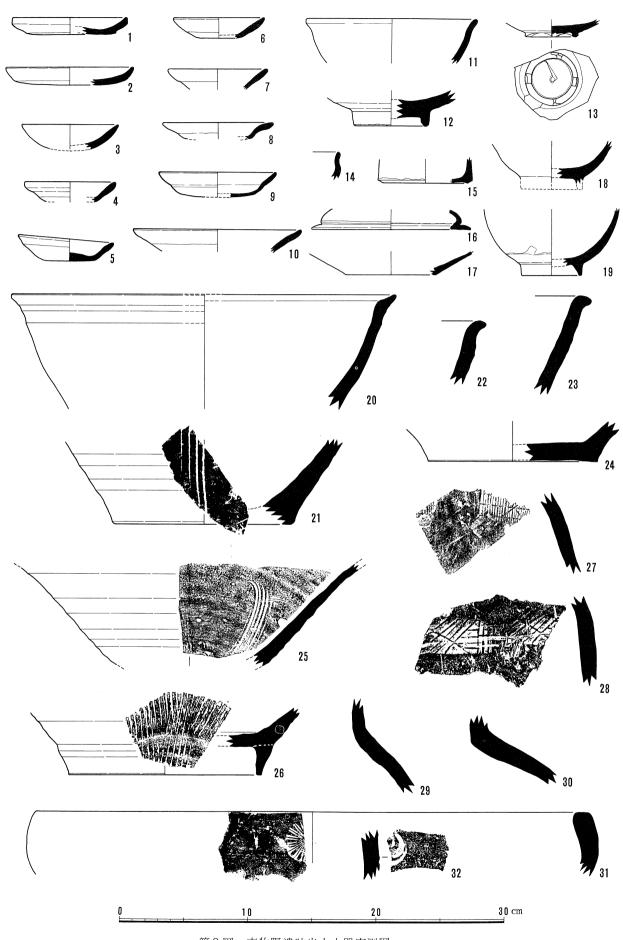
(1) 土師器・土師質土器

①、②は、法量、形態、口縁端部に面取りを行う手法など、同じ高島郡内では高島町中ノ坊遺跡第 102 トレン② チ出土の土師器小皿(I類)に類似する。他の皿と形態や法量も異なり、細部の手法にも相違がある。おそらく、本遺跡出土遺物中で最も古く、鎌倉時代(13世紀)ごろのものと思われる。

③~⑨は、直径 7~8 cm代の小形の皿で、⑤、①、⑧は口縁が外方へ開き、口縁部の器壁が肥厚する、底部が平らかあるいはやや上げ底になるなど、室町時代の土器の特徴を示している。⑩は法量こそ異なるが、⑤、⑨と形態や、口縁端部をわずかにつまむなどの手法に共通する特色が認められることから、小皿と同時期のものと考えてよいだろう。これら土器は、高島町中ノ坊遺跡第20トレンチ出土のものより後出的な要素をもち、かつ遺構あるいは遺構面上の共伴遺物などから考えて、室町時代(15世紀頃)の所産と推定される(なお⑧については、④~⑥、⑧と法量において類似を示すが、形態的には特色はない。石列内の共伴遺物よりみて、④~⑩などと同じ時期のものと理解している)。

(2) 陶磁器

(近世) ⑩、⑪は形態と土器の外面に煤が付着していることなどから、行平とよばれている片口や把手のついた土鍋の蓋と底部の破片である。⑲は、特色ある光沢のない青緑色をした碗で、他に⑳、⑳の信楽と思われる擂鉢や、小破片のため器形のわからない⑯の底部、染付などが新しい時期の遺物を構成する。近世でも、江戸時代後期以降の新しい時期のものではないだろうか。



第8図 南牧野遺跡出土土器実測図

(中世)

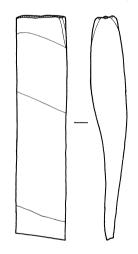
擂鉢 (⑳、⑳~㉑)、甕(㉑、⑳)、壺(㉑) があるが、擂鉢は軟質の⑳を除いて、胎土、色調などからみて全て信楽であり、壷も図示できなかった数個体分の体部の破片も含めてやはり信楽であった。ただ甕のみは、胎土、色調、押印の文様などからみて、信楽とは判定しがたく、あえて産地を比定するなら常滑ではないかと思われる。

陶器の年代についてみるなら、各器形とも小破片であるが、比較的形態の特色がつかめる擂鉢では、口縁部を外方へ丸く引き出しておさめる作りは、室町時代後期のものにみられる、口縁内面に平縁の内凹みのしっかりした面をもつものより、型式的に古い様相を示しているものと思われる。

輸入陶磁器としては、⑪、⑫の青磁碗が認められるが、同一個体の可能性もある。この種の無文の青磁碗は、 今津町岸脇遺跡からも出土している。しかし、両者を比較すると、底部の施釉法に、本例は高台外面まで施釉するのに対し、岸脇遺跡例は内面にまでおよんでおり、本例の方がやや古い様相を示している。

(3) 瓦質土器

火舎の口縁部付近の破片で、器体のカーブから復原すると約41cmほどの直径のものであろう(1)。破片は2点あり、共に押印が認められる。①は菊花文であるが、中房は無く、花弁は粗雑で残りの悪い部分では、中心部より弁のなごりをとどめる放射状の直線のみの退化したものである。②は巴文で、巴の頭部が失われているが、巴の尾の太く短い感じは室町時代以降の軒丸瓦の文様に似る。



(4) 石製品

幅 2.9 cm、長さ13.0 cm、厚さ2.1 cm (最大)の長方形をした、表面のなめらかな仕上砥石が1点出土している。この砥石の片面半分は、使用のため最も厚い部分の半分ほどにすり減っている。石材はアジノール板岩で、Hトレンチの遺構面上から出土した。

(5) 金属製品

HトレンチのSK1より煙管と釘状の鉄製品の破片、SK5より銭文 不明の穴あき銭が各1点ずつ出土した。

煙管は銅製で雁首と吸口の部分が出土した。形態は近世の出土煙管としては一般的なもので、雁首と羅宇の接続部に加工を施す。管は、薄い銅板を丸めて接合したものである。



第9図

コ (6) 遺物小結

10cm

南牧野遺跡の土器を大別すると、鎌倉時代と室町時代、江戸時代に分けられる。鎌倉時代のものは、すでにみてきたように土師器の小皿であ

Hトレンチ出土砥石・煙管実測図 り、おそらく13世紀も中~後半までのものであろう。室町時代のものは、出土状況や土師器からみてもそう年代幅のあるものではなく、おそらく15世紀頃とみてよいだろう。江戸時代のものは、特に根拠とするだけの資料をもたないが、近年の県下各地の調査例からみて、後期以降のものと思われる。

6 要 説

昭和54年度の調査の結果、当初予測された北牧野古墳群の一部が削平され水田化しているのではないかという 見解は否定された。一方、南牧野遺跡の新たな発見は、中世の村を考えるうえに一つの素材を与えてくれた。こ こでは、南牧野遺跡の調査結果を踏まえて室町時代の村について考えてみたい。

中世の村落を求めて、昭和53年よりほ場整備に関連して機会あるごとに湖西北半のマキノ町、今津町の集落の周辺に試掘坑をあけて行った。その結果、室町時代の遺物の散布が認められることはあっても、村を構成する個々の住居などの遺構は未だ検出されていなかった。しかし、幸いにも南牧野遺跡の場合、集落の一角を思わせる遺構が検出されたことなどから、現集落が中世以来現在の位置をほとんど動くことなく今日に至っていることを、具体的に例示することができたのである。おそらく、現集落の周辺で中世の遺物の出土したところでは、中世の住居跡などはほとんど、現在の集落と重複して所在すると推察できるのである。

さて次に、出土した土器をみる時、出土量こそごくわずかではあるが、一応輸入品をも含めて各種の土器が認 められるのは、いったい何を意味しているのだろう。現在、輸入陶磁器の出土は各地において珍しいものではな くなってきているが、例えば中世の墓地の副葬例で見ると、墓地の構成員に一般的に認められるといったもので はない。食膳具の場合、材質的にも椀の座を木地椀や漆椀に譲ってしまった室町時代において、村における青磁 碗の使用は、特定の用途なりある地位の人々に限定されていたとは考えられはしないだろうか。また甕にしても、 近江で生産される信楽の陶器をあえて使用していないのは、信楽が吸水性が高く液体の保存に適していないこと を前提に、常滑を使用している節がある。つまり、南牧野の村は、用途と要求に応じた陶器を入手する手段を持 っていたようである。それは、湖上の水運の拠点の一つである海津と南牧野が距離的にそうへだたっていないこ とや、街道に沿った村といった立地の良さもあるが、そうした交通路との関係とは別に、流通する商品を購入し 消費する経済力の一端が認められる。これは、今津町岸脇遺跡などの調査結果でも、同じような土器の組成傾向 を示している。これは近江が京に接しており、かつ湖西の場合、越前、若狭への陸路、琵琶湖を介しての近江各 地との水運など、交通路として物資の往来を生み出す位置にあり、こうした環境の中からおそらく農、漁業以外 にも商業や運輸などへの発達があり、地域的に豊かさを持つに至ったのではなかろうか。マキノ町の中世の各村 の経済力を示す例として、現在地表で観察できる石造品をみてみよう。町内の中世の石造品を一瞥しただけでも、 上開田、南牧野、北牧野(残欠)に宝塔、蛭口(残欠)、中庄(残欠)に宝篋印塔が見られる。さらに室町時代 中~後期の小形の石塔、石仏の増加は著しい。宝塔、宝篋印塔については、田岡香逸氏の言われるように近江の 石造美術の中心を占めており、複雑な構造の塔形式が選ばれたのは、単に中世近江における好みだけではなく、 造立者の経済的基盤の豊かさによるものであり、マキノ町においても同様に考えてよいだろう。それとは別に、 室町時代中~後期の小形石塔の増加は、墓地での供養塔としての意味ももっている。これら石造品の造立者は、 けっして特別な人々ではなく、その数から単純に考えても村を構成する人々を抜きに語ることはできない。この 現象については、墓地の構成から庶民層の地位と経済力の向上によるものとして説明される。また、湖東八日市 市今堀町の今堀文書の永正17年(1520)の村掟にみられる、罰則が金銭や米などの支払いで済まされている点な どから、「すべて罰金主義であることは、ある意味では村の編成がきわめてドライなものであり、何ごとも金品 ⑦ で解決するという、商業・農業兼業の村落である」と指摘されている。やや南牧野遺跡と年代的に差はあるが、 こうした惣の姿が早く湖西にも存在し、経済力を向上させつつあったのだろう。そうした状況の中にあっての輸 入陶磁器の位置は、町の文化の香りを伝えるものであったに違いない。また、水甕の選択一つをとってみても、

単に陶器の流通圏としてだけでなく、購買力を持つことによって製品を選定するだけの余裕が生じつつあったのであろう。極論するなら、単に水を溜るだけの容器であるなら、桶などの木器をもってしてもその用をなすはずである。

南牧野遺跡を手がかりに、一つの中世像を描いてみた。中世の村が、現在の集落立地とほとんど変りない場合、今回の調査のような形からのアプローチが、村自体を掘れないまでも、集落立地、耕地の開発、生活の様相などを一つ一つ押えて年代などを与えて行くことができる。この、一見落穂拾い的な発掘調査の蓄積と、文献や石造美術品などの調査が互いに補いあって、中世村落の実態が明らかにされる日もそう遠くないものと思われる。

註

- ① 森浩一「滋賀県北牧野製鉄遺跡調査報告」(『若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』、同志社大学文学部考古学調査報告第4冊、同志社大学考古学研究室、昭和46年)
- ② 兼康保明「高島町中ノ坊遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』V、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保 護協会、昭和53年)
- ③ 室町時代の土師質土器の年代観については、大津市延暦寺東塔法華総持院跡出土資料を標式として用いた。 兼康保明「法華総持院の調査――室町時代の遺物を中心に――」(第6回広島考古学研究会レジメ、昭和56年)
- ④ 本報告書、第4章。
- ⑤ 田岡香逸『近江の石造美術』6 (民俗文化研究会、昭和48年)
- ⑥ 坪井良平「山城木津惣墓墓標の研究」(『考古学』10-6、東京考古学会、昭和14年)田岡香逸『石造美術概説』(綜芸舎、昭和43年)木下密運「石塔類」(『日本仏教民俗基礎資料集成』第4巻 元興寺極楽坊Ⅳ、中央公論美術出版、昭和52年)
- ① 仲村研「湖東・湖西の中世村落」(『湖国と文化』第5号、滋賀県文化体育振興事業団、昭和53年)

南牧野遺跡出土土器観察表

器 形	No.	1	i (cm)	形態の特徴	手 法 の 特 徴	備考
土	師質	(土岩	器			
小 皿	1	器高	8. 8 1. 4	○体部は内弯気味に外上方にのび、端部は尖り気味である。○底部はやや上げ底で、外面に稜をもたせる。	○□縁部内外面、及び、底部 内面は横ナデ。○底部外面は不調整。	(色調) 淡黄橙色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/5 (地区) 表採
	2	口径器高	9. 9	○体部は外上方にのび、口縁端部は丸くおわる。 ○底部は平底で丸味をもつ。	○口縁部内外面、及び、底部 内面は横ナデ。○底部外面は不調整。	(色調) 淡黄橙色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/6
	3	口径	7. 4	○体部は内弯気味に外上方にのび、口縁端部は尖り気味である。○底部は丸味をもつ。	○口縁部内外面、及び、底部 内面は横ナデ。○底部外面は不調整。	(地区) 1トレンチ包含層 (色調) 黄白色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/10
	4	口径 器高	7. 1 1. 6	○体部は外弯気味に外上方にのび、口縁端部は丸くおわる。	○□縁部内外面、及び、底部 内面は横ナデ。○底部外面は不調整。	(地区) Hトレンチ石組内(色調) 黄灰色(胎土) 精良(焼成) 硬(残部) 1/10(地区) Hトレンチ包含層
	5	口径器高	7. 3 2. 1	○体部は外弯気味に外上方にのび、端部は丸くおわる。○底部は平底で丸味をもつ。	○口縁部内外面、及び、底部 内面は横ナデ。○底部外面は不調整。	(色図) 所下レックと音信 (色調) 黄白色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) ほば完形 (地区) GトレンチSK
	6	口径 器高	7. 0 1. 7	○体部は内弯気味に外上方に のび、口縁端部はやや尖り 気味に丸くおわる。	○□縁部内外面、及び、底部 内面は横ナデ。○底部外面は不調整。	(色調) 黄橙色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) JトレンチSK2
	7	口径	7. 6	○体部は外上方にのび、口縁端部は丸くおわる。○底部欠失。	○□縁部内外面横ナデ。 ○体部外面仕上げナデ。	(色図) J トレンテS K Z (色調) 淡黄橙色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) JトレンチS K 3
	8	口径器高	8. 4 1. 3	○体部は屈曲をもち外上方にのび、口縁端部は丸くおわる。	○摩滅のため不明瞭。	(色調) 黄褐色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) JトレンチSK1
	9	口径器高	9. 0 1. 2	○体部は屈曲をもち外上方にのび、口縁端部は丸くおわる。○底部は上げ底である(ひずみか?)。	○□縁部内外面、及び、底部 内面は横ナデ。○底部外面は不調整。	(色調) 淡黄橙色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/6 (地区) JトレンチSK1
大 皿	1 0	口径	1 3. 0	○体部は外上方にのび、口縁端部は丸くおわる。 ○底部は欠失。	○口縁部内外面横ナデ。○体部外面不調整。	(色調) 淡黄褐色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/20

						(地区) JトレンチSK1
陶	碐	袋 岩	\$			
碗 ほ か	11 (青磁)	口径	1 3. 2	○体部は内弯気味であり、口 縁部を外弯させ、口縁端部 は丸くおわる。	○内外面ロクロナデ。	(色調) 淡緑色 (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) Hトレンチ石組内
	12 (青磁)	底径	5. 0	○体部は内弯気味に外上方にのびる。○底部は高台をもち内側に面をもたせる。	○内外面ロクロナデ。	(色調) 緑色 (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/5 (地区) Hトレンチ遺構面
	13 (磁器)	底径	3. 8	○体部は内弯喜味に外上方にのびる。○底部は高台をもち外側に面をもち、4ヶ所を削る。	○内外面ロクロナデ。○高台には4ケ所へラによる 削りがみられる。	(残部) 2/3 (地区) 表採 ※重ね焼きの痕跡を残す。 (色調) 白色 (胎土) 精微 (焼成) 硬
	1 4			○体部は内弯気味で、口縁部 直下がややくびれ、端部は 丸くおわる。	○内外面ロクロナデ。	(色調) 茶褐色 (鉄釉) (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) HトレンチSK3
	15	底径	6. 6	○体部は上方にまっすぐにのび底部は上げ底である。○外面境に平坦面をもつ。	○内外面ロクロナデ。	(色調) 赤褐色 (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1∕10 (地区) Hトレンチ
行 平	16(蓋)	口径	9. 2	○内弯する体部をもち、口縁端部外に横に突出する幅広い面をもたせる。	○内外面ロクロナデ。	(色調) 赤褐色 (釉は暗茶褐色) (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) Hトレンチ包含層 ※口縁部外面スス付着
	1 7	底径	6. 6	○体部はまっすぐに外上方に のびる。	○内外面ロクロナデ。	(色調) 黒灰色 (内面は黄白色) (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) Hトレンチ包含層 ※外面にススの付着?
碗	18 (瀬戸 ・美濃 系)			○体部は内弯気味で外上方に のびる。 ○底部は高台をもつが欠失す る。	○内外面ロクロナデ。 ○貼付け高台。	(色調) 淡黄緑色 (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/3 (地区) 2トレンチ第3層
	1 9	底径	4. 2	○体部は内弯気味に外上方にのびる。○底部は高台をもち端部は方	○内外面ロクロナデ。	(色調) 青緑色 (胎土) 精微 (焼成) 硬

					形状におわる。		(残部)	1/3
							(地区)	Hトレンチ遺構面
								直上
擂	鉢	2 0	口径	2 6. 2	○□縁部は外上方につまみ出	○□縁部内外面ロクロナデ。	(色調)	淡黄灰色
					し丸味をもつ。	○体部内外面不調整。		(内面黒み帯びる)
					○体部は内弯気味に内下方に		(胎土)	精良
					のびる。		(焼成)	軟
							(残部)	1/10
							(地区)	表採
								質か?
		2 1	底径	1 3. 6	○体部は外上方にのびる。	○体部内外面ロクロナデ。	(色調)	赤褐色
		(信楽)			○底部は平底である。	○底部外面不調整。	(胎土)	
						○内面に 4 条の溝が刻まれる。	(焼成)	
						○内面は使用のため平滑であ	(残部)	
						3.	1	Hトレンチ遺構面
						.50	(ACC)	直上
		2 2			○□縁部は外反し端部を丸く	 ○内外面ロクロナデ。	(毎調)	
		(信楽)			おわる。		(胎土)	
	(おき木)			○体部は内弯気味に内下方に		(焼成)		
					のびる。			
					0000		(残部)	•
		0.0				O + 4 T		GトレンチSK2
		2 3			○□縁部は外反し端部を丸く	○内外面ロクロナデ。		赤褐色
		(信楽)			おわる。		(胎土)	
					○体部は内弯気味に内下方に		(焼成)	
					のびる。		(残部)	•
		-	-					GトレンチSK1
		2 4	底径	1 3.2	○体部は外上方にのびる。	○体部内外面、及び、底部内		赤褐色
		(信楽)			○底部は平底である。	面はロクロナデ。	(胎土)	
						○底部外面は不調整。	(焼成)	
						○内面はたいへん平滑である。	(残部)	1/5
					1		(地区)	GトレンチSK1
		2 5			○体部は外上方にまっすぐに	○内外面ロクロナデ。	(色調)	紫褐色
		(信楽)			のびる。	○内面に7条の溝が下より上	(胎土)	精良
		?				に向って刻まれる。	(焼成)	硬
						○内外面釉がかかる。	(残部)	1/20
							(地区)	Gトレンチpi t1
		2 6	底径	1 4. 2	○体部は外上方にのびる。	○内外面ロクロナデ。	(色調)	暗茶褐色
		(信楽)			○底部は平底で、高台は内下	○底部は貼り付け高台。	(胎土)	精微
			-		方にのび、端部は方形状に	○内面に6条の溝が刻まれる。	(焼成)	硬
					おわる。		(残部)	1/10
							(地区)	HトレンチSK5
翌	Œ.	2 7			○肩部の部分	○内外面ロクロナデ。	(色調)	淡灰色
		(常滑)				○外面に刻印を押す。	(胎土)	_
		?					(焼成)	
							(残部)	
								I トレンチ包含層
		2 8			○体部の部分	○内外面ロクロナデ。	 	赤褐色
		(常滑)			O LL MA O MAN	○外面に刻印を押す。	(胎土)	
		(帝伯)				○○下四□○◎□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□	(焼成)	
		-					(残邸)	
								·
		0.0			() ではなった。	○ 中		GトレンチSK3
Ī	蓜	2 9			○頸部の部分	○内外面ロクロナデ。		赤褐色
		(信楽)					(胎土)	有饭

					1	I
						(焼成)硬
						(残部) 1/20
						(地区)Hトレンチ遺構面
甕	3 0			○頸部の部分	○内外面ロクロナデ。	(色調) 淡黄灰色
	-					(胎玉) 精微
	ŀ					(焼成) 硬
						(残部) 1/20
						(地区)Hトレンチ遺構面
						直下
火	3 1	口径	4 1.0	○□縁部は内弯し端部は平坦	○□縁端部上面、外面は横方	(色調) 黒灰色
				におわる。	向のヘラ磨き。	(胎土) 精良(瓦質)
					○□縁部内外面ロクロナデ。	(焼成) 硬
					○外面に菊花文を刻印。	(残部) 1/8
						(地区) Hトレンチ遺構面
	3 2			○□縁部の部分	○内外面ロクロナデ。	(色調) 淡黒灰色
					○外面に巴文を刻印。	(胎土) 精良(瓦質)
						(焼成) 硬
						(残部) 1/20
						(地区)Hトレンチ石組内

第4章 高島郡今津町岸脇遺跡 (事業名 心妙寺遺跡)

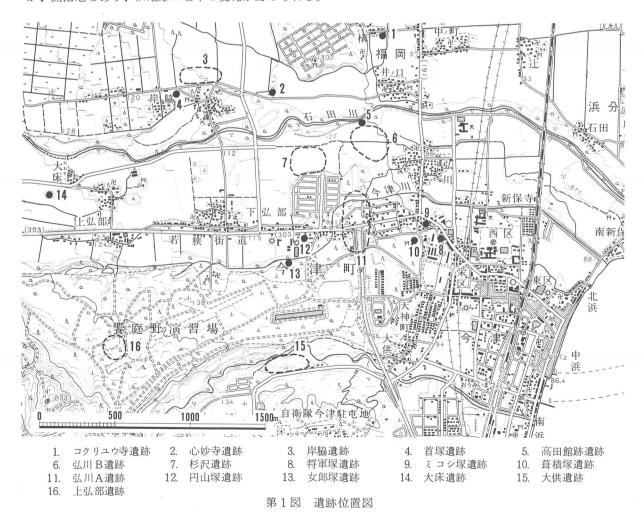
1 はじめに

本報告は、高島郡今津町岸脇で実施した、昭和54年度の団体営ほ場整備に伴う発掘調査の結果をまとめたものである。

調査は、『滋賀県遺跡目録』(昭和40年度版、滋賀県教育委員会編)に標示されている地点――心妙寺遺跡(寺院伝承地)として実施した。ところが「心妙寺」の小字名と伝承をもつ場所は、台帳標示の地点より約250 m 東の岸脇と井ノ口との境界に近い場所であることが判った(なおこの地点は、同年県営は場整備に伴い「妙見山 遺跡」として調査を実施した)。また、本調査の結果、検出された遺構等から考えて、寺院跡としての確固たる 証拠は認められず、むしろ現在の岸脇の集落との関係の方が密接であり、遺跡名としては岸脇遺跡とする方が妥 当ではないかと考える。

2 位置と環境

今津町岸脇は石田川の左岸段丘上に所在し、国道 303号線と 161号線との合流点より北西約 2 kmのところに位置している。集落の西には隣接して岸脇神社が鎮座し、東には平野部に独立して存在する妙見山の丘陵、北方には赤坂山・箱館山、南方には饗庭野丘陵をのぞむ景勝の地である。付近は明治末年に耕地整理にかかっているほか、開拓地もあり、旧地形に若干の変化が認められる。



当該遺跡地は、岸脇の集落の北側に接して認められるが、周辺遺跡の主要なものについてみると、西約 250 m にある「心妙寺」の小字と伝承を持つ場所で、古墳時代中、後期と平安時代の住居跡が調査されている。また、「心妙寺」と上郷川をはさんで対岸の妙見山には尾根上に19基からなる木棺直葬墳と推定される妙見山古墳群が所在する。さらに石田川をはさんで東南東には、弥生時代から平安時代までの集落、古代の郷倉と推定される遺構が認められた弘川遺跡、嘉吉年間にあったという宮内大輔橘義忠の高田館跡伝承地、北の赤坂山南裾には古墳時代後期の酒波古墳群、酒波寺遺跡などがあげられる。またそれ以外にも、赤坂山、箱館山裾部や饗庭野丘陵端部に沿って多数の古墳が分布し、西明寺遺跡、沙弥寺遺跡、興福寺遺跡、コクリュウ寺遺跡、梅ケ原遺跡などの寺院跡、寺院伝承地が知られている。

3 調査の経過

調査は滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、夏期施行区域を第1次調査として昭和54年5月15日から6月22日まで、滋賀県文化財保護協会嘱託本田修平(現彦根市教育委員会)を主任に実施した。また通年施行区域は第2次調査として同年10月2日から24日まで、滋賀県文化財保護協会調査員山口順子(現滋賀県埋蔵文化財センター)、藤野道成によって実施した。

調査の方法は、遺跡が伝承地であるため、その規模、内容などがまったく不明なため、第1次調査ではほ場整備によって削平をうける水田に、バックホウで1~29まで順次試掘坑を穿ち、必要に応じて試掘坑の面積を広げて遺構、遺物包含層の有無について確認を行った。その結果、岸脇の集落の北側を東西に走る道路に沿って溝状遺構が存在すること、同じく溝状遺構の北側に近接して少量ではあるが中世の遺物の散布地が認められたため、工事によって削平をうけ損壊する場所についてのみ、トレンチを拡張して精査した。

第2次調査では、第1次調査で検出した溝状遺構の西側延長部分と、岸脇の集落の西端――岸脇神社の北東に近接する水田に残る「塚」の伝承地を調査した(A~Eドレンチ)。

なお調査にあたっては、今津町公民館、今津町農地改良課、地元岸脇の方々から援助を得た。調査・整理にあたっては、堀内宏司、越出佳代子、田中正彦、米田実、松井正規、高田一弘、出口秀夫諸氏の協力を得た。また調査中、地元河原田健一氏からは種々御配慮を賜わったほか、滋賀民俗学会の菅沼晃次郎、田村博氏から「湿気抜き」についての助言をいただいた。記して諸氏、諸機関に厚くお礼申しあげたい。

4 調査の結果

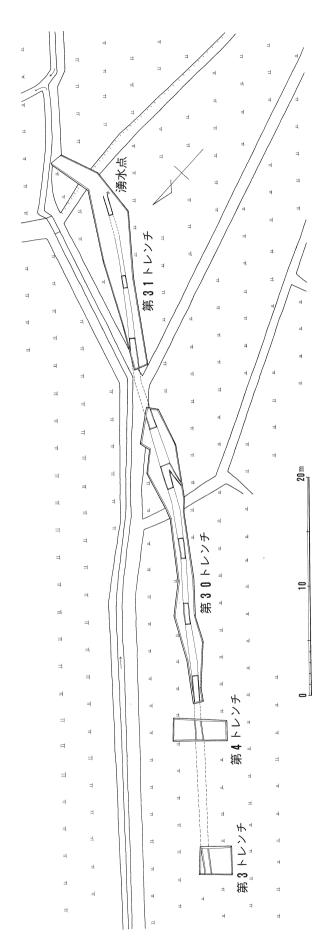
調査地域内は、北側の上郷川寄りの場所は湿田で湧水点も高く、標高 108 m台の水田に穿った第5、7~10トレンチでは表土を除去すると湿地帯独特の粘りの強い青灰色粘土となり、トレンチによっては地下水の圧力で調査面がふくれ上ったり、あるいは水が湧き出すものもあった。そうした水田より少し高い場所の水田に設定した第3、4、30、31トレンチでは、耕土下に「湿気抜き」と思われる溝状遺構が検出された。一方、標高 110 m以上の水田になると、耕土下は赤土層となる。また、遺物の散布が認められた第15、19、29トレンチは各々調査面積を拡大して一つのトレンチとして調査したが、明確な遺構は検出されなかった。

1. 湿気抜き

「湿気抜き」は、第3トレンチで耕土を除去した際、調査面の粘質土層に淡く灰色に変色した柔らかい土の入



第2図 岸脇遺跡トレンチ配置図



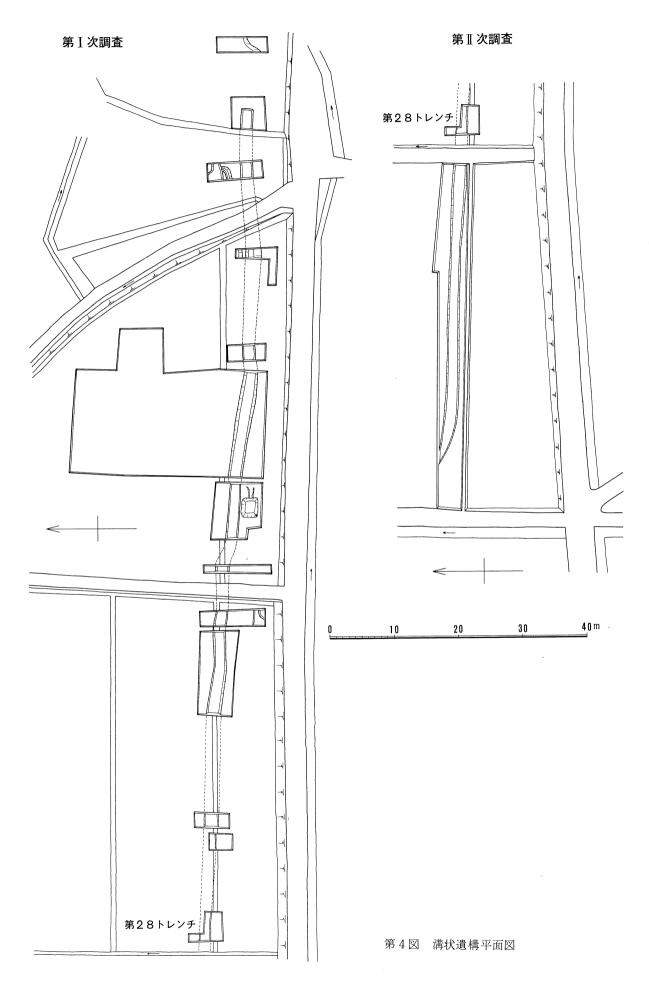
第3図 「湿気抜き」平面図

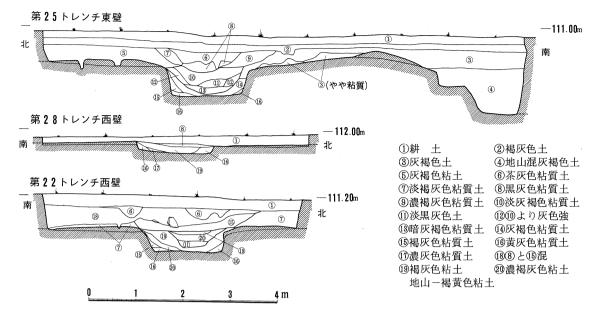
った溝状のプランが認められたことから、第4、30、31トレンチとその延長を求めて調査して行くと、各トレンチで続けて検出された。溝の幅は約60cm、深さは約60cmで、第31トレンチの南に行くにしたがって浅くなる。溝の底のレベルも北側の第4トレンチの方が第31トレンチのものより高く、「湿気抜き」に集まった水は北側(北東)から南側(南東)へ流れていたことが判った。途中第30トレンチでは、別の溝が合流する。また、第31トレンチの溝の南端部付近に地下水の湧水点(第3図、第31トレンチ溝南端の×印)が認められた。

この溝は素掘りで、壁面はほぼ垂直に掘りこまれ、 底面は平坦である。おそらく検出状況から考えて、年 代は不明であるが現在の水田に伴うものとして理解で きる。

2. 溝状遺構

第1次調査において、岸脇の集落の北――井ノ口か ら岸脇を通って梅ケ原に至る道路の北側に、第16トレ ンチを設定したところ、トレンチ内の北端で地山を掘 り込んだ落込みの肩を検出した。この落込みは、後に 調査が進展するにつれて、溝状遺構の南肩であること が判った。次に第16トレンチから50m東に第17トレン チを設けたところ、幅約2m、深さ約70cmほどの溝状 遺構を検出した。そこで、さらに溝状遺構の範囲を確 認するため、第18~29トレンチまで順次設定し発掘調 査を行なった。その結果、溝状遺構は幅約2mで東西 に長くのびていることが判り、第22トレンチではその 東端が確認された。第2次調査では第28トレンチの西 側にAトレンチを設定したところ、同じ溝状遺構の続 きを検出することができた。なおこの溝状遺構はトレ ンチの西側になるとしだいに北にカーブするため、西 端は確認することはできなかった。しかし、溝状遺構 は西に行くほど浅くなることから、Aトレンチの西端 付近でほぼ終了するのではないだろうか。なおこの溝 状遺構の底部のレベルは、西の方が東より高く、東へ 流れることが確認されている。また、どのトレンチに おいても、溝状遺構の壁(側)面は鋭利な工具によっ



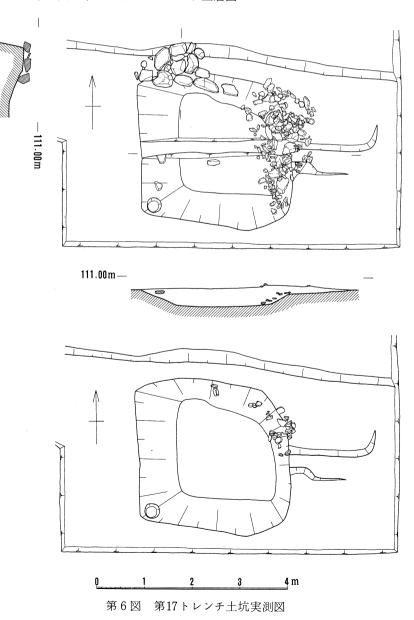


第5図 第22・25・28トレンチ土層図

て掘り込まれたようにすっきりとした様相を示しており、底面もほぼ平坦である。また、溝状遺構から遺物はほとんど出土しておらず、わずかに第22トレンチで底部付近より土師器の皿、坏、須恵器の坏の計3点が出土したのみである。

その他溝状遺構に近接して、第20、21トレンチでは、溝状 遺構の北側に深さ20cmほどの 落ち込みがあり、あるいは小 規模な溝になる可能性がある。 また、第25トレンチでも溝状 遺構の南側で、最も深い部分 で約1mほどある落ち込みを 検出したが、東隣の第24トレ ンチではその続きが認められ ないため、どのような形状を 示すものか決めがたい。

第17トレンチでは、溝状遺構の南側に接して一辺3mほどの方形の土坑があり、土坑の北側の肩には縦約20cm、横



約40cmほどの石がならべられたような状態で検出された。また、同じ土坑の東側の肩付近にも直径 $5 \sim 10$ cmほど の石が多数検出されたが、土坑内からは何も遺物は出土しなかった。土坑と溝状遺構の関係は、土坑北側の石の 検出状況からみて、石が溝の肩から内側にほぼ似たレベルでならんでおり、溝が掘られて以後のものであること は明らかである。

3. 第15、19、29トレンチの調査

本トレンチ内では、南端部で検出された東西方向の溝状遺構以外に、大小の土坑やピットが多数検出されたが、明確に遺構と考えられるものはほとんど無く、赤土層上の凹凸や上層からの掘り込みや打ち込みによるものであるう。

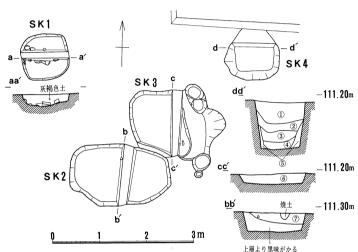
なお土坑内から遺物等の出土したものは次 のとおりである。

SK1 1 m×0.9 mの方形に近いプランで、深さ約30cmを測る。土坑底部から直径 5 \sim 20cmほどの石が数個検出された。土坑内の堆積は1層で、遺物は含まれていない。

S K 2 1.7 m×1.4 mの不定形の土坑で、深さ約20cmを測る。土坑内の堆積は1層で、底部から鉄器片が数点出土した。

SK3 2.4 m×1.5 mの楕円形の土坑で、深さ40cmを測る。土坑内の堆積は2層で、上層から土師器片と焼土を検出した。

SK4 直径1mほどの円形に近い土坑



① 黒褐色粘質土 ②暗黄褐色粘質土 ③暗褐色粘質土 ④褐黄色 粘質土 ⑤暗灰褐色粘質土 ⑥暗褐色粘質土(灰色粘質土ブロック 混) ①暗灰褐色粘質土(灰色粘質土、黄褐色粘質土ブロック混) 第7図 第15・19・29トレンチ土坑実測図

で、深さ1mを測る。土坑内の堆積は4層で、遺物は含まれていない。 また、南北方向よりやや東に軸を振って並ぶピット列が3カ所認められるが、①それに付随する遺構、遺物が 無いこと ②冬々のピット列の関連性が薄いこと ③周辺の水田の畦畔の方向にほぼ合衆オスことなどから 怒

無いこと、②各々のピット列の関連性が薄いこと、③周辺の水田の畦畔の方向にほぼ合致することなどから、稲木の跡ではないかと理解している。

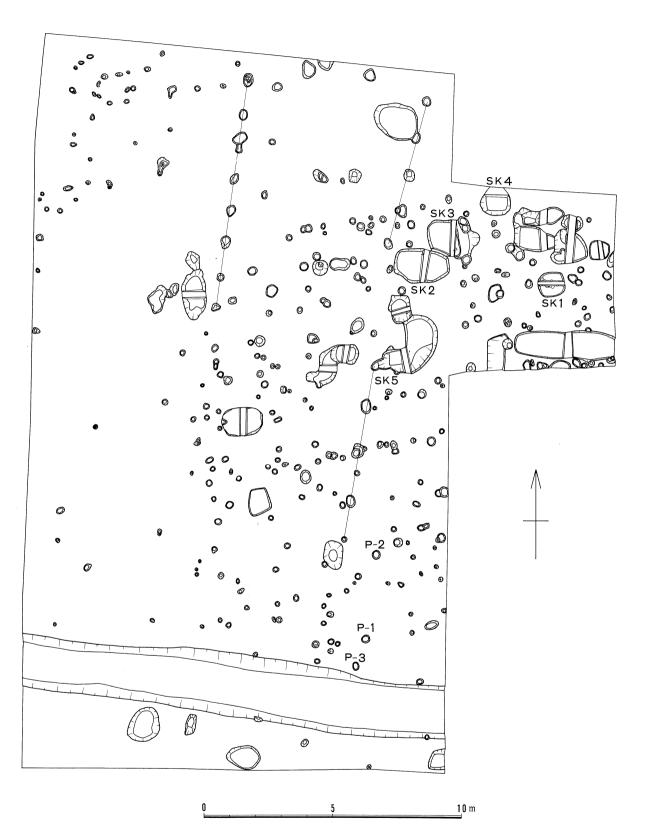
4. 塚状遺構(「首塚」)

岸脇神社の北側の水田中にある。これは、50m程離れた薮の中で切られた人の首が、塚のある場所まで飛んだという伝承のため、地元では掘ればたたりがあると、今日まで残されたものであった。

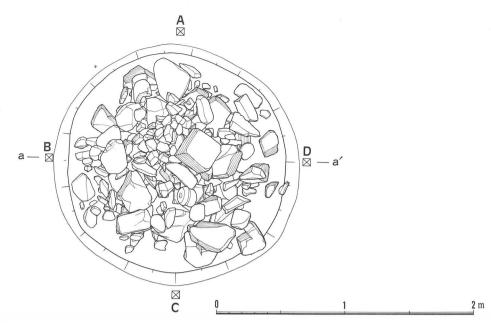
現状は、直径 $5\sim30$ cm程の石を無造作に積みあげた直径 2 m程の塚で、水田面から約50 cm程の高さであった。調査は、まず、現状の 1_{10} の平面図を作成し、次に断面図をとりながら積み石を除いていくと、黒褐色粘質土が10 cm 程認められた。さらに地山まで掘り下げると、直径 2.5 m程の円形プランをもつ、高さ $5\sim15$ cm程の地山を整形した遺構を検出できた。さらに遺構の中央から西よりに、直径 1 m程の土壙を確認したため、掘り下げたところ、60 cm程の深さであった。

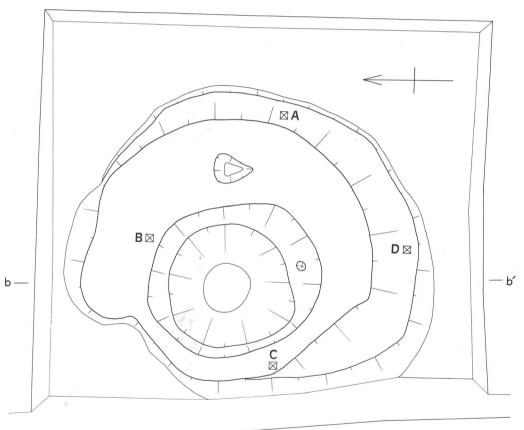
遺物は、土壙内には何もなく、伝承にあるような人骨なども検出できなかった。なお上部の積み石の間からは、時期不明の須恵器1、擂り鉢2、陶磁器2、瓦、鉄釘1、砥石1、扁平打製石斧1、鉄滓1が出土した。また、五輪塔の地輪1、水輪1、空風輪1、空輸1も含まれていた。

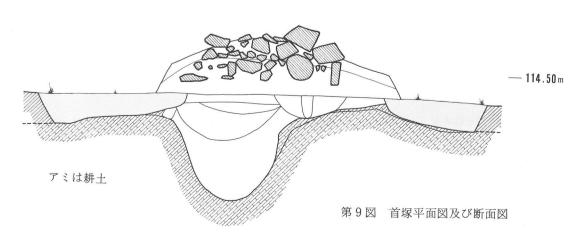
塚の時期であるが断面図をみると、耕作土が黒褐色粘質土の下に入りこんでいるため、墳丘を形成する積み石



第8図 第15・19・29トレンチ平面図







・黒褐色粘質土共に新しい堆積と考えられる。故に、五輪塔の残欠も当初からあったものではなく、付近から寄せ集められたものであろう。しかし、下層の地山を整形したマウンドの残骸状の遺構は、耕作によって削られており、当初この地に塚状のものがあった可能性を示している。

5 出土遺物

各トレンチより出土した遺物のうち、ここでは器形のある程度復元出来るものを、各トレンチ別に述べていく ことにする。

第19トレンチより土師質土器の皿が9点と常滑の甕、青磁の碗、砥石各1点が出土している。

皿は内弯するもの(1、5、6、7)と外反するもの(2、3、4、8、9)の二種があり、外反するものは概ね上げ底である。口端部は全て丸くおさまる。このうち(1、2、3、4、7)は土壙よりの出土であり、(8)はP-2より出土している。口径 7.6 cm~10.8 cm、器高は 1.2 cm~1.8 cmにほぼ納まるものと思われる。色調は黄褐色系統が多く、胎土はほぼ精良で、焼成は概ね硬い。

常滑の甕(23)はP-1よりの出土であり、恐らく肩が大きく張る器形と思われる。頸部はしまらず外反したまま口縁部になり、口縁部は図のように二重に重なり合い口端部は丸くおさまる。全体的にロクロナデを行い、口縁部のみみずびき調整しているようである。色調は茶褐色で、胎土は $3 \, \text{m} \sim 5 \, \text{m}$ の小石を含み、焼成は硬い。

青磁の碗(20)はP-3内よりの出土であり、恐らく南方青磁と思われる。体部は内弯して立ち上り、口縁部において外反し口端部は丸くおさまる。高台端部はほぼ水平である。内外面共に釉薬を丁寧にかけているが、底部外面の一部に釉薬のかかっていない所がある。口径14.4 cm、高台径5.2 cm、器高6.6 cmである。色調は淡灰色で、胎土はやや気泡が目立ち、焼成は硬い。

砥石(29)はアジノール板岩製のもので両端は欠落している。四面全てを使っており、恐らく仕上げ用に使われたものであろう。

第22トレンチの溝下層より須恵器の坏と土師器の坏と皿各1点が出土している。

須恵器の坏(15)は、貼り付けの高台をもち、高台内側で接する。底部と口縁部との境には明確な稜はつかない。口縁部は内弯し口端部は丸くおさまる。口縁部内外面及び底部内面はみずびき調整を行い、底部外面は篦切り後不調整である。高台の貼り付け部分は篦先でナデられているようである。口径11.9 cm、高台径7.4 cm、器高4.4 cmである。色調は淡青灰色、胎土は精良、焼成は硬い。

土師器の坏(B)は、なだらかに内弯しながら立ち上る口縁部で、口端部は丸くおさまる。外面下方の一部は不調整であるが、他の内外面は丁寧に横ナデ調整を行う。口径13.0 cm、色調は赤褐色、胎土は精良、焼成は硬い。土師器の皿(14)は、底部はほぼ平底で体部にかけて緩やかに内弯し、口縁部ではやや外反し口端部は丸くおさまる。口縁部は内外面共に横ナデにより調整し、他の内外面は不調整ではあるが外面のみ比較的丁寧に仕上げている。口径20.4 cm、器高2.8 cmである。色調は淡赤褐色、胎土にはごくわずかに砂粒を含むが精良、焼成は硬い。

塚の積み石の間より擂り鉢 2 点、器形不明の須恵器・碗・砥石・打製石斧・釘・鉄滓各 1 点と五輪塔の残欠 4 点が出土している。

須恵器(16)は、底部はほぼ水平で体部はやや外反し、底部と体部との境には明確な稜はつかない。体部内外面及び底部内面はみずびき調整で、底部外面は荒いナデを加えるだけである。恐らく何かの底部であろう。底径

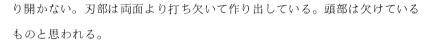
8.6 cm、色調は暗青灰色、胎土は精良、焼成は硬い。

磁器碗(18)は、体部がなめらかに内弯し体部と高台との境には明確な稜はつかず、高台端部はほぼ水平である。内外面共に横ナデにより調整されている。高台径4.1 cm、色調は白色、胎土は精良、焼成は硬い。

信楽産の擂り鉢は器壁の厚いもの(25)とやや薄いもの(24)の2通りある。底部はどちらも平底であり、体部は外反する。(25)は底部と体部との境に段がつく。内面には2本以上の単位による条線が所々につく。色調は淡黄褐色、胎土には1mm位の石英片等を含む、焼成は硬い。(24)は底部と体部との境は明瞭でない。内面には5本を単位とする条線がびっしりと付けられている。体部内外面及び底部内面はロクロナデで、底部外面は不調整である。色調は赤茶褐色、胎土は精良、焼成は硬い。この2つの擂り鉢の内面の条線の付け方の違いは時代差の現われであり、(25)の方が時代が古く、時代による条線の変化がうかがわれる。

砥石(30)は低質頁岩製で、両端と1側面を欠落しており詳細は不明である。2面を使用し、うち1面には明瞭な使用痕と思われる痕跡が残る。

打製石斧(31)は高質頁岩製で、片面に自然面を残す。着装部の括れが少なく、着装部より刃部にかけてあま



五輪塔は4点とも花崗岩製であり、積み石の中に寄せ集められていたもので、空風輪(第10図-1)水輪(第10図-2)地輪(第10図-3)空輪で、空輪は摩滅が激しく図示できなかった。この4点は組み合わせ式のもので、同一の五輪塔かどうかは不明である。

地輪は風化のため表面に 3 mm~5 mmの石英粒が目立つ。長さ 26.0 cm、高さ 16.5 cm で、下方は整形していないが、恐らく上方より 14.0 cm位の所から下が 埋め込まれていたために、タガネ等を使用して打ち欠いただけで終ったもの であろう。その痕跡が一部分ではあるが残っている。上方は水輪との組み合わせに適するように約 1.0 cm中心部がわずかに盛り上っている。

水輪は、高さ $16.8 \, \text{cm}$ 、最大径 $24.0 \, \text{cm}$ 、上方径 $10.5 \, \text{cm}$ 、下方径 $13.5 \, \text{cm}$ で、上下にはそれぞれ火輪・地輪との組み合わせに適するように $3 \, \text{mm}$ 、 $2 \, \text{mm}$ 窪ませて作られている。

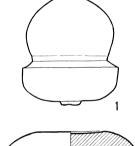
空風輪は一石作りで、やや風化しており空輪頂部は欠落している。残存高は17.4 cmであり空輪部分の最大径13.6 cm、風輪部分は上方14.6 cm下方9.0 cmである。火輪との接合部分は最大径3.3 cmで残りが悪く、高さは8 mmしか測ることが出来ず、やや欠けているものと思われる。

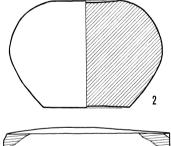
釘(28)は、長さ7.55 cm、巾6 mm、厚み4.5 mmの角釘で、頂部を折り曲げて頭部を作っている。

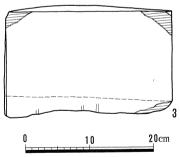
鉄滓 (図版26) はこぶし大位の大きさであり摩滅が著しい。北西1 kmの山裾に谷八幡製鉄遺跡があり、そこから流出してきたものかもしれない。

その他に瓦(図版26)が出土しており、光沢をもった近世以降の新しい時期のものである。

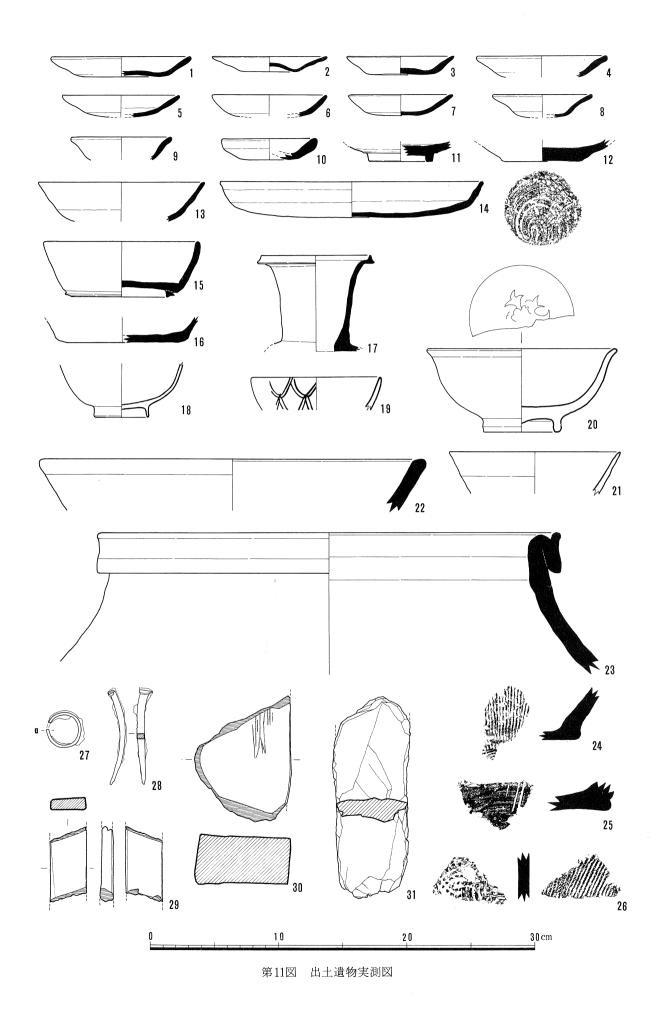
第31トレンチの湿気抜きの溝内より須恵器の瓶(17)が出土している。瓶は口縁部が外反し口端部は図のように上方につまみ上げられており丸くおさまる。頸部はあまりくびれず明確な稜はつかない。口端部はつまみ上げた後で、他の内外面と同様にみずびき調整を行う。口径 8.4 cm、色調は濃灰色、胎土は精良、焼成は硬い。







第10図 五輪塔実測図



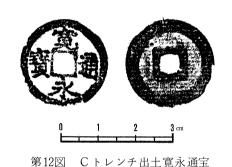
第25トレンチの第2層よりは、磁器碗2点が出土している。(11)は高台部分だけであり、全体的な器形は不明である。高台端部は水平である。高台と碗部との貼り付け部には箆先によるナデが加えられている。外面は箆削りを行い、内面は横ナデにより調整されている。底部内面には重ね焼きの跡が明瞭に残っている。高台径4.1 cm、色調は淡灰色、胎土は精良、焼成は硬い。(19)は口縁部が内弯し、口端部は丸くおさまる。内外面共に横ナデによって調整し、外面には細い筆状のもので向かい合った楕円状の藍色の染付絵が描かれている。口径9.9 cm、色調は白色、胎土は精良、焼成は硬い。

第26トレンチの第3層ピット内よりは信楽産と思われる鉢(22)が出土している。口縁部は内弯して立ち上り、口端部は内傾している。内外面共にロクロナデを行う。口径29.2 cm、色調は赤黄褐色、胎土には1 mm位の腐り礫を含む、焼成は硬い。

他に表採ではあるが土師器の皿の底部 (12) や須恵器の甕腹 (26) 青磁の碗 (21) 等が出土している。

第19トレンチSK3より鉄環 (27) が出土している。内径2.25 cm、巾 4 mm、厚み 2 mmで、断面は長方形である。

Cトレンチより寛永通宝(第11図)が出土している。地元で「くろぼく」と通称されている黒褐色粘質土(第3層)よりの出土である。



以上出土遺物について土器を中心に述べてきたのであるが、 土器の時期について若干の補足を加えてみたい。

は近世のものであり、それ以外の土師器や陶磁器は室町時代のものと思われる。

第22トレンチの溝下層より出土した土器 (13、14、15) と、第31トレンチの湿気抜き溝より出土の土器 (17) は、平安時代前期頃のものと思われる。 (20) の碗は南方青磁で、15世紀頃のものと思われる。 (19、18、24)

6 結 び

調査の結果明確に遺構とよべるものは、東西方向に掘られた溝状遺構のみであった。この溝状遺構は、これに付随する他の遺構がなかったことから、立地より推定して次の二つの性格を考えている。一つは、岸脇の集落の北限の溝――つまり堀のようなものが想定できる。しかし、今回の調査で溝状遺構の東西両端を確認していることから、集落を囲むようなものでないことは確かである。二つは、現在井ノ口から岸脇を通って梅原に至る道路があり、その道のかつての側溝ではないかとの考え方である。しかし、溝状遺構が岸脇付近だけにしか存在しないため断定は難しい。このように遺構の性格については不明な点も多いが、溝状遺構の東端の溝底より出土した遺物から見て、本遺跡で最も古い平安時代前期の遺構であることはまちがいない。

次に集落の西端に所在した「首塚」の伝承地について考えてみよう。「首塚」は、おそらく塚の周囲が現在のように水田化される以前に、地山を整形し、あるいは若干の盛り土を持ったわずかなマウンドがあったことに伝承の原因が求められそうである。発掘調査の結果からも判るように、現在地表にある積み石および高まりは当初のものではなく、周囲の水田化以後に形成されたものである。空想的な見方をすれば、開墾によって当所にあった塚の上部を破壊したところたちまち「たたり」があり、以後その場所を神聖視したといったところだが、これを積極的に証明する手だては今のところない。ただ積み石については、同様な石が付近の溝や水田の石垣、畦な

どにも使用されており、開墾などによって出た石が自ずとこの場所に集められ積み石塚の体をなしたものであろう。したがって形状は類似するが本墳よりも規模の大きい、広島県森山積石塚や阿品積石塚などのような広島県下に多く見られる中世の墳墓あるいは供養塚とはややニュアンスの異なるものである。さて、この塚の地下遺構についても、土壙のみで何ら副葬品を伴出せずその年代、性格など実態はまったく不明であるといってよく、仮に伝承をある程度傍証資料に使用したとしても「墳墓の可能性がある」としか言えないであろう。ただ、もし墳墓であるとするなら、土壙の大きさから考えて火葬か、あるいは土葬の場合人体の一部か改葬によらねば埋葬することのできないスペースである。もっとも土壙内の土に火葬骨、炭、灰のようなものは認められなかったため、土葬と思われるが、これも一つの仮説にすぎない。ここでは可能性をあげるにとどめ、類例の増加を待って結論を求めるべきであろう。

「湿気抜き」は特に埋蔵文化財の問題ではないが、すでに民俗学の分野で橋本鉄男氏により問題提起がなされる。この機会を利用して考古学的な方法を用いて調査してみた。この「溝(湿気抜き)」については、調査中に地元の方々にたずねてみたが覚えがないとのことで、かなり以前に行われなくなって廃棄(?)されたものと思われる。溝の機能については、溝内の土の堆積が掘った土を再び埋め戻しただけのものであり、しかも埋め土が粘土質であるため、この部分に土の固さの違いから水分が集まりはしても、暗渠機能をはたすものではない。郡内の農作業の例からみて、田おこしする前に溝を掘ってショウズを集めて落とす溝と考えるべきである。ちょうどこの水田の位置する場所は、一段低い場所の水田のように水が湧くほど湿気ておらず、かといってそれより高い水の湧かない水田にくらべると湿気が多い。それゆえ、季節的にショウズヌキが必要であったのだろう。

註

① 地山整形のみで盛り土をせず塚を作った例は、県下においては大津市雄琴町新池東地区の丘陵尾根上に所在する 4 基の塚などをあげることができる。

松浦俊和「日本住宅公団仰木地区土地区画整備事業対象地区内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告」(『大津市文化財調査報告書(11)』、大津市教育委員会、昭和55年)

- ② 小都隆、木村妙子『広島県高田郡吉田町森山積石塚発掘調査概報』(広島県教育委員会・広島県文化財協会、昭和50年)
- ③ 小都隆、中田昭『山田積石塚発掘調査報告』(甲田町文化財保護委員会、昭和47年)
- ④ 橋本鉄男「物を以て物を観る」(『民俗文化』22、滋賀民俗学会、昭和40年) 橋本鉄男『比良山系東麓のショウズヌキについて』(滋賀民俗学会、昭和40年)

第5章 高島郡今津町梅ケ原遺跡

1 はじめに

今回、ほ場整備事業の対象地となり、発掘調査を実施した梅ケ原遺跡は、高島郡今津町大字梅原小字梵野、中野、南野の3つの小字にまたがるおよそ77,000㎡の水田である。

本遺跡は、昭和41年発行の『滋賀県遺跡目録 昭和40年度』(滋賀県教育委員会)に遺跡番号23として立地は台地、地目は宅地で、寺院跡の伝承地として記載される周知の遺跡である。但し、この遺跡地は『滋賀県遺跡目録』に記載されている梅ケ原遺跡の赤丸は、現梅原集落の西側、小字野出にプロットされており、その間500m程距たっている。

しかし、当該地がその所在地の確定しない伝承地であることから、的を出来る限り広くするとともに、若干ながらも十師片の採集出来た今回のほ場整備区域をも調査対象地に加えることになった。

2 位置と環境

梅ケ原遺跡の所在する高島郡今津町梅原は、今津町の中央に位置し、東は岸脇、南は藺生、西は若狭国との境をなす山地が迫り、北は箱館山山麓に三谷の集落がある。南側には段丘崖下に石田川が東流し、琵琶湖へ注いでいる。

このような地理的位置ではあるが、村の西方山裾に鎮まる氏神は弓削八幡宮と称し、式内社(「延喜式」927 年完成 神名帳に記載されている)弓削神社といわれている。

また、この弓削八幡宮から北東山ぞいには大規模な製鉄遺跡が大字梅原小字北頃谷に知られており谷八幡遺跡 と呼ばれている。さらにこの八幡宮一帯は小字芋谷と呼ばれているが、芋とは鋳物のことであり、この谷筋にも 同様な遺跡が存在するものと思われる。

なお、石田川を南に距てて、西近江路と分岐して西・若狭へ至る若狭街道が東西に走っており、この街道に面するように古代からの大集落が知られている。その著名なものは縄文時代から弥生前期、中、後期さらには古墳時代を経て奈良、平安時代に至る弘川遺跡である。

そして、最近明らかにされた上弘部から下弘部にかけて広がる大床遺跡もまた、一部藺生地先から縄文時代の 大集落が発見されるとともに弥生時代後期、古墳時代、奈良・平安時代に及ぶ、建物跡や古墳なども明らかにさ れた。

さらに若狭街道を距てた大俵山や小俵山、饗庭野台地には大小の古墳や須恵器の窯跡、製鉄所跡など豊かな資料が知られている。

梅原の歴史についてはそのほとんどが今後の考古学的研究をまたなければならないが、小字名のなかにうかがえるように「野」のつく地名が多く、さらに中江、久保、川原など肥沃な土地はほとんど望めなかったようである。『物産誌』に「地味薄く百穀その実を結ばず」とあることはその実情をよく物語っているといえる。

3 調査の経過

調査は、伝承地の実在を確定するため、全域にわたって試掘壙を設定することから始めた。このため該当する ほ場整備区域内に均一に端から端まで機械により機械的に調査を実施した。なおまた、区域内においても、整備 事業にともない掘削あるいは削平工事のなされる区域に重点を置いた。結果的において、試掘壙は小字梵野では 石田川寄りで段違いに一条、また、第12号支線道跡に沿って一条を現田面一枚あたり一個所の割で設けた。しか し、遺構の発見個所では試掘壙をさらに設けることになった。

小字中野、南野地区も同様であって、大きく二条、いずれも地形等に合せて段違いに設定することになった。

調査の結果 4

試掘壙は都合35個所にのぼったが、小規模なものは5m×5m、大規模なものは5m×50mに及ぶものも生じ た。

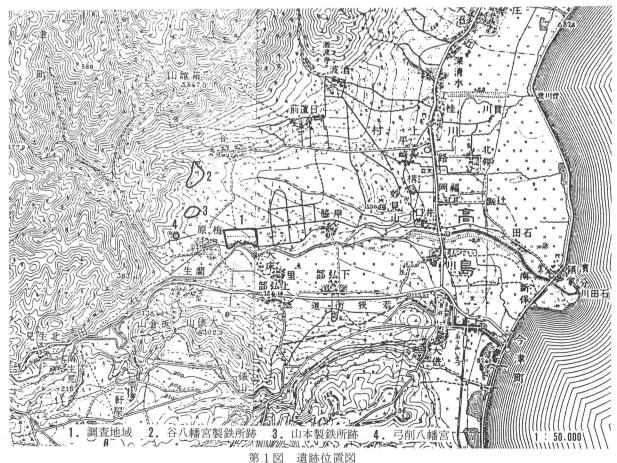
特に東寄りの試掘壙は現田面の規模が大きかったこともあり長大なものとなり、地山検出までの深さも1 m以 上に及んだ。

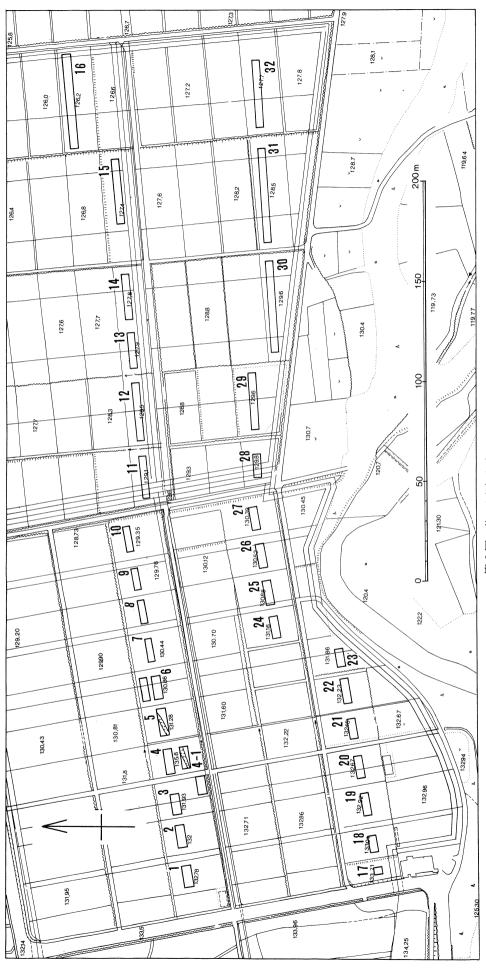
その結果、各試掘壙全面にわたって黒色の褐色味を帯びた粘質土層が耕土を形成し、床土の明確なものは不明 のまま地山(ローム層・灰黄色粘質土層)に達している。この表土層が耕土ともなる褐色味帯黒色粘質土層は東 へ行くほど厚みを増し、当地がかつて土地改良地として農業改善事業がなされたことを物語っていた。

第2試掘壙と第5、第4-1試掘壙において土壙および一条溝、さらには多数のピットが認められた。特にピ ット群は北西部分の試掘壙で多数検出された。

その年代も溝内で検出された土師器片や染付などからみて江戸時代をはるかに溯るものではないと言える。

この地味薄い梅ケ原においてもこの原野に近い荒れはてた台地が、なんとか稔りある土地に変ることを願いつ つ数百年に溯って耕地の開発が果されつつあったことがこの調査のなかからもおぼろげながら判明するのである。





第2図 梅ケ原遺跡試掘壙配置図

-63-

第6章 高島郡今津町弘川遺跡

弘川遺跡の概要

滋賀県高島郡今津町弘川に所在する弘川遺跡は、平安時代初頭の郷倉跡として知られている。滋賀県教育委員 会が昭和54年に発行した『弘川遺跡発掘調査報告書』によれば、遺跡の範囲は、今津川を北限とする南北約200 m、東西は宅地造成等で確認できなかったが、西の円山塚古墳までの約200mにわたると推定されている。遺構 は、門跡・溝跡・掘立柱建物跡・柵列・大型土壙・ピット等が検出され、遺構に伴う8世紀後半から10世紀の須 恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器等が出土した。他に縄文式土器・弥生式土器・古墳時代須恵器・ 石器等もわずかに出土しており、弘川遺跡周辺に郷倉以外の遺構の存在を暗示している。

2 位 置

今回発掘調査を行った地点は、弘川遺跡の北西にあたり、石田川以南、国道161号線バイパス予定地の西側約 1,57512㎡の範囲である。ことは弘川遺跡(郷倉跡)が立地する、小さく舌状に張り出した台地の裾部にあたる。

3 調査の経過

11.

16.

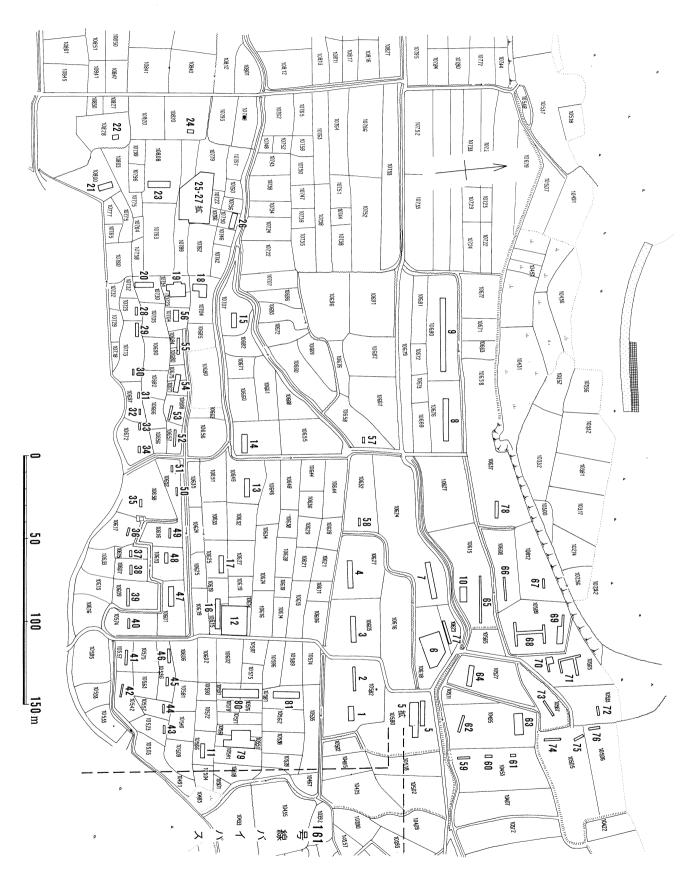
弘川A遺跡

上弘部遺跡

発掘調査は、ほ場整備事業に先立って、昭和54年10月16日から11月27日まで実施した。調査は、削平をうける 各水田にバックホウを用いてトレンチを穿ち、包含層及び遺構の確認を行った。検出されたトレンチについては、



15. 大供遺跡



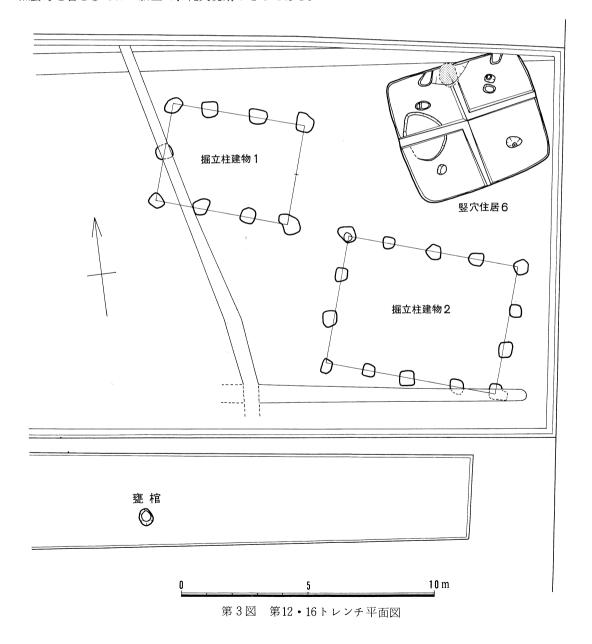
第2図 弘川遺跡トレンチ配置図

保存のため協議し、設計変更を行ったが、変更不能なものについてはトレンチを拡張して、遺構の広がりを調査した。穿ったトレンチは第 2 図に示すように全部で81カ所、うち包含層及び遺構の検出されたトレンチは、第 5 ・ 6 ・ 12 ・ 16 ・ 19 ・ 25 ・ 27 ・ 49 ・ 68 ・ 69 ・ 70 ・ 71 ・ 79 トレンチであった。他のトレンチについては、工事の削平面まで掘り下げ、土層を記録するにとどめた。

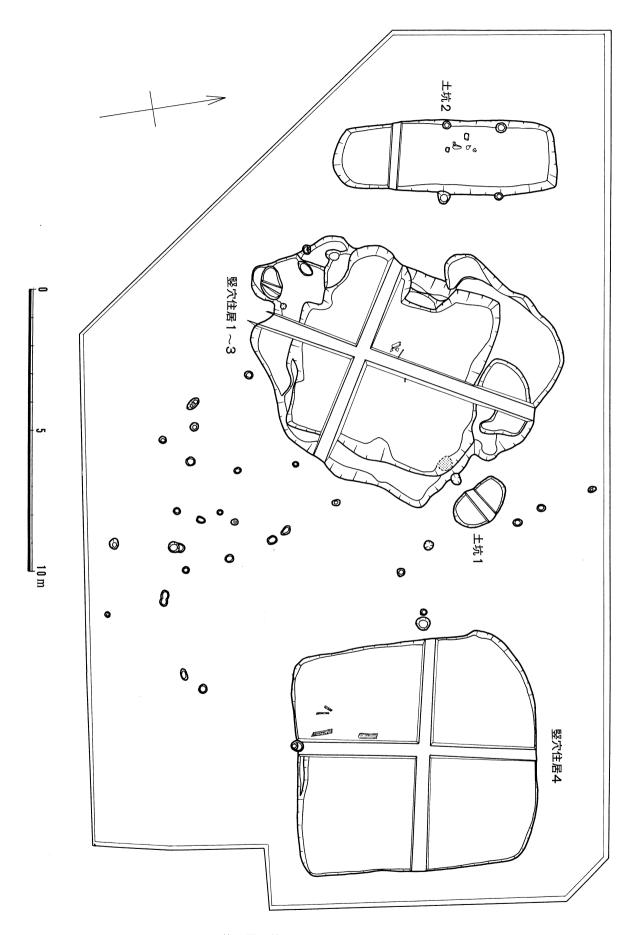
4 遺 構

甕棺、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙等を検出した。各遺構の関連については、次年度の調査結果とあわせて報告することとし、ここではその概要を示すにとどめたい。

甕棺 第16トレンチで検出。耕土約25cmを除去すると、上半部が削平をうけた状態で出土した。約50度の傾斜をもって埋置された単棺で、蓋の痕跡は認められず、骨や副葬品なども検出されなかった。色調は暗褐色を呈し、黒雲母を含む砂っぱい胎土で、縄文晩期のものである。



-66-



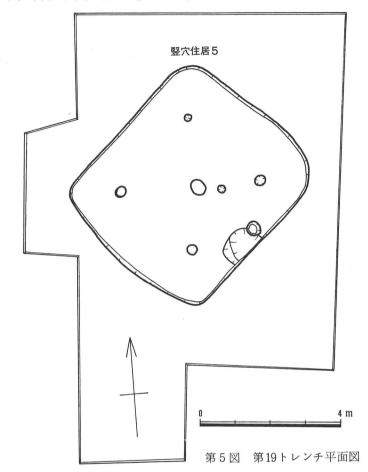
第4図 第25・27拡張トレンチ平面図

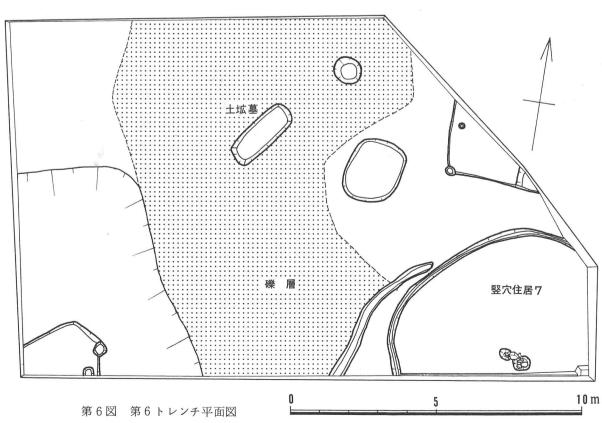
竪穴住居 $1\sim3$ 第25・27拡張トレンチで検出。方形プランをもつ規模一辺 $6.5\,\mathrm{m}$ の竪穴住居で、ほぼ同じ場所で $3\,\mathrm{回建て替えた結果}$ とみてよいだろう。床面に柱穴は無く、焼土が北東隅に $1\,\mathrm{カ所検出された}$ 。飛鳥時代

の須恵器の杯、線刻のある壷、土師器の 甕・鍋・竃片・壷・椀・砥石が出土して いる。主軸方向は北東をさす。

竪穴住居4 第25・27拡張トレンチで検出。一辺約8.5mの方形プランをもち、住居の残存する深さは20cmを測る。柱穴・炉跡・焼土等は検出されなかったが、炭化した柱の一部が北西部分の床面上で検出された。遺物は、弥生時代後期から古墳時代初頭の時期と思われる壷・甕・器台・有孔円板が出土した。主軸方向は、ほぼ南北をさす。

竪穴住居 5 第19トレンチで検出。 一辺約 5 mの隅丸方形プランをもち、4 本の主柱穴が方形に配置されている。住 居の残存する深さは、10cmを測る。また、 ほぼ中央に炉跡と思われるピットが検出





された。遺物は、南東辺のほぼ中程にある落ちこみ付近に集中しており、残りは悪いが、弥生時代末から古墳時 代初頭の時期と思われる土師器の壷・甕・器台・高杯等が出土している。主軸方向は、北東をさす。

竪穴住居 6 第12トレンチで検出。 $5.6 \times 4.5 \text{ m}$ の方形プランをもち、4本の主柱穴がほぼ方形に配置されている。住居の残存する深さは、約10cmを測る。また、住居内の北側で焼土が検出された。遺物は、飛鳥時代の土師器の甕・鉢等が出土している。主軸方向は南北をさす。

竪穴住居 7 第6トレンチで検出。直径 8 m程の円形住居かと思われる。住居の残存する深さは30cmを測り、住居の壁面にそって側溝がめぐらされている。柱穴は検出されなかったが、中央部に石の詰ったピット 2 個が残存していた。遺物は、壷・甕・器台等が出土しており、弥生時代後期のものである。

掘立柱建物 1 第12トレンチで検出。東西 3 間 $(5.20 \text{ m}) \times$ 南北 2 間 (3.84 m) で、建物方向は、N-73-W に偏っている。柱穴は掘り下げなかったため、深さは未確認である。

掘立柱建物 2 第12トレンチで検出。東西 4 間 (6.72 m) ×南北 3 間 (5.04 m) で、建物方向は、N-73-W に偏っている。柱穴は掘り下げなかったため、深さは未確認である。

掘立柱建物 3 第79トレンチで検出。東西 2 間 $(3.84 \, \mathrm{m}) \times \mathrm{n}$ 本 4 間 $(6.4 \, \mathrm{m})$ で、建物方向は、N $-5 - \mathrm{E}$ に偏っている。柱の掘り方は約 $0.4 \, \mathrm{m}$ の方形を呈し、柱穴の大きさは直径 $0.4 \sim 0.5 \, \mathrm{m}$ である。また、柱穴の深さは、 $0.1 \sim 0.5 \, \mathrm{m}$ とまちまちであった。

掘立柱建物 3 棟の時期については、主軸方向からみると、弘川遺跡の昭和52年調査地区で検出された掘立柱建物跡の、IV (9世紀後半)、V期 (10世紀代)に対応できると考えられる。

土坑 1 第25・27拡張トレンチで検出。形状は、 $2.0 \times 1.2 \,\mathrm{m}$ 、深さ $0.25 \,\mathrm{m}$ の楕円形を呈する。遺物は土師器が数点出土しているが、器形、時期とも不明である。

土坑 2 第25・27拡張トレンチの竪穴住居跡 $1 \sim 3$ の西側で検出。形状は、 2.5×8.0 m、深さ $0.1 \sim 0.4$ m の長方形を呈する。土坑の北寄りに、土坑の幅で方形に配置された 4 個のピットを検出した。遺物は土師皿がほとんどで、時期は鎌倉時代と思われる。

土坑3 第71トレンチで検出。一部しか検出していないが、深さ10cm程残っていた。遺物は、飛鳥時代の須恵器の杯、土師器の甕・椀等が出土している。

以上が明確な遺構であるが、他に土壙・落ち込み等を検出した。第25・27拡張トレンチでは、遺構とは関連のない径30cm程のピットを多数検出し、住居跡 1~3の南側では、長頸壺・高杯等を含む遺物包含層を検出している。第6トレンチでは、中央の南北につらなる自然流路と思われる礫層を掘り込んだ土壙を検出した。大きさは1×2.5 m、深さ約40cmを測り、遺物等は検出されなかったが、形状などからみて土壙墓になる可能性が強い。第49トレンチでは、地表より約25cm程掘り下げた粘質土層中で、足跡と思われる4個の窪みを検出した。時期については、遺物等を伴出していないため、明確ではない。第5トレンチでは、約20cmの耕土・床土、約10cmの暗灰色土をとりのぞくと、約10cm程の黒褐色粘質土になり、その土層内に弥生時代前期・後期の土器が検出された。遺構確認のため南側にも拡張トレンチをあけ調査した結果、自然の落ち込み内に土器が溜った状態であることが判明した。第55トレンチでは、表土・耕土を掘り下げると住居跡の一部かと思われる落ち込みを検出したが、プラン確認のみで掘り下げていないため、明確にはし得なかった。

なお、調査の詳細は、遺跡の全体像が把握された次年度の報告書にゆずり、本年度は概要にとどめる。

第7章 高島郡新旭町針江遺跡

1 はじめに

本報告書は、前年度に引き続いて実施された高島郡新旭町針江土地改良区による団体営は場整備事業に伴う、 昭和54年度の針江遺跡発掘調査の記録である。

調査は、県文化財保護課技師兼康保明氏の指導の下、新旭町教育委員会が行い、図司高志が現場を担当した。報告書作成に当っては、山口順子(滋賀県埋蔵文化財センター嘱託)・神谷友和(滋賀県文化財保護協会嘱託)両氏の協力を得、遺物整理作業に龍谷大学学生池田俊哉・奈良大学学生田中政彦両君の参加を得た。また、遺物写真の撮影にあたっては、寿福滋氏にお願いした。最後に、地元針江区民の方々を初めとする多数の人々の協力を得たことを記して、謝意を表したい。

2 調査の経過

本年度の調査は、前年度と同様に掘削を受ける水路予定地について実施し、 $6月\sim11$ 月にかけて4本のトレンチを設定した。第1トレンチは、前年度に発掘したAトレンチの南に、第2トレンチは、前年度に発掘したCトレンチの南にそれぞれ続いて設定し、第3トレンチは、前年度に発掘したCトレンチの西 200 mに、第4トレンチは、本年度に設けた第1トレンチの東 200 mにそれぞれ平行して設け調査を実施した。調査の結果、第2~第4トレンチでは、遺構・遺物とも全く検出されなかった。また、第1トレンチでは、遺構は検出されなかったが多量の遺物が出土した。したがって以下は、遺物が多量に出土した第1トレンチについて述べていくことにする。

3 調査の結果

第1トレンチは、前年度の調査において高床式建物の検出をみたAトレンチの南に位置し、当初遺構の存在が 予想されたが、遺物包含層が確認されたのみであった。

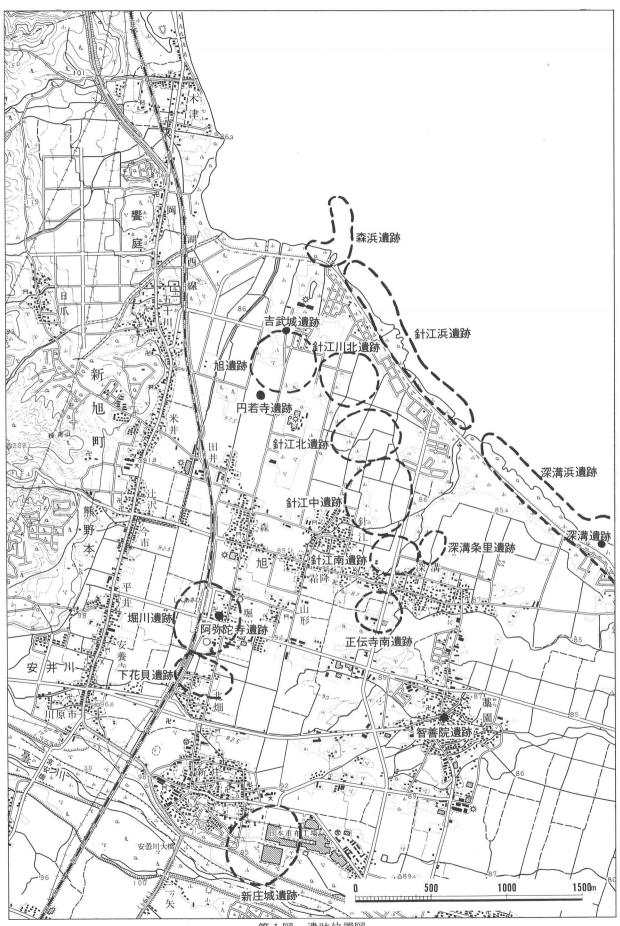
調査は、約300 mの調査予定地を分割し、約17 mを 1 ブロックとし、北より第1・第2・第3 ……と13 ブロックの小トレンチを設けて実施した。このうち遺物包含層が確認されたのは、第1~第10 ブロックからで、第11~第13 ブロックでは確認されなかった。したがって、第1 トレンチは、遺物包含層の有無によって大きく二つの地区に分けられるが、土層・遺物の出土状況によって、さらに次の4 地区に細分することが可能である。

(第1~第4ブロック) 当地区の基本土層は、第1層——耕作土、第2層——暗褐色粘質土層、第3層——暗青灰色粘質土層、第4層——青灰色粘砂質土層である。遺物包含層は、第2・第3層である。当地区は、遺物が濃密に出土し、特に第2ブロックでは完形品がかなり出土している。

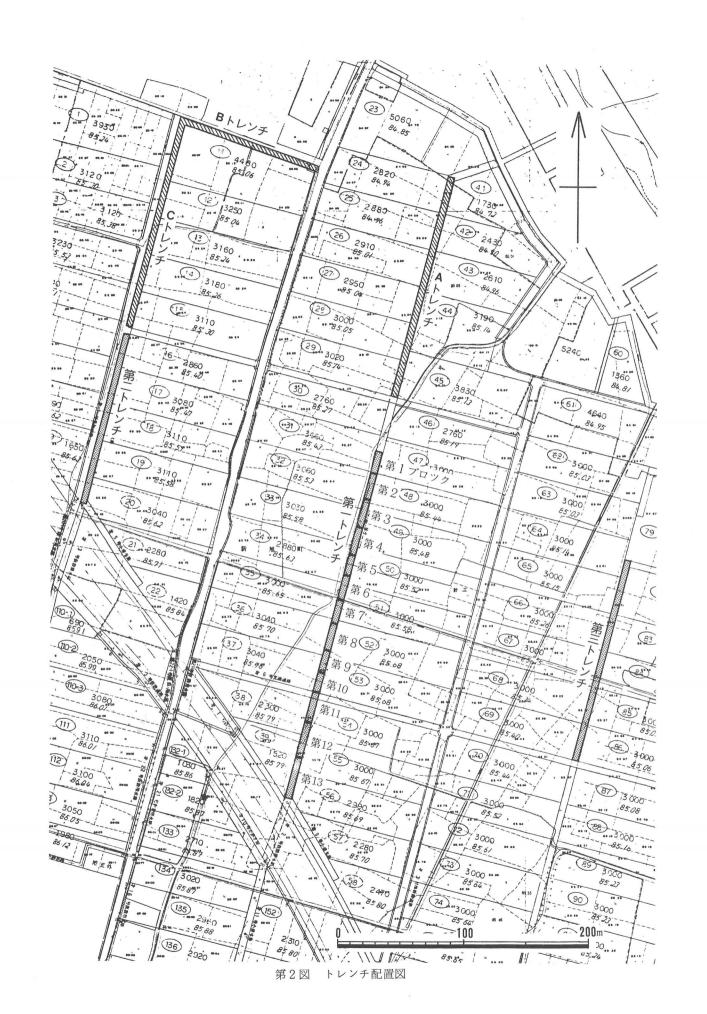
(第5・第6ブロック) 当地区の基本土層は、第1層――耕作土、第2層――暗褐色粘質土層、第3層――暗褐色砂質土層であり、第2・第3層が遺物包含層にあたる。当地区の遺物出土量は、第1~第4ブロックに比してやや少なく、また、第2・第3層は砂利を多く含んでいる。

(第7・第8ブロック) 当地区の基本土層は、第1層――耕作土、第2層――暗褐色粘質土層、第3層――暗青灰色粘質土層、第4層――暗青灰色砂利層であり、第2・第3層が遺物包含層にあたる。第4層は、第8ブロック南部において南方に傾斜し、青灰色粘質土層となる。

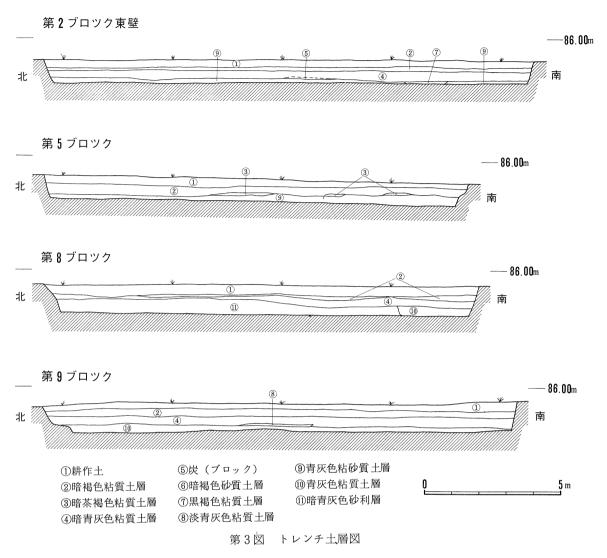
(第9・第10ブロック) 当地区の基本土層は、第1層――耕作土、第2層――暗褐色粘質土層、第3層――



第1図 遺跡位置図



-72-



暗青灰色粘質土層、第4層——青灰色粘質土層であり、第2・第3層が遺物包含層にあたる。当地区の遺物出土量は、前述の各地区と比較して少ない。

(第11~第13ブロック) 当地区の基本土層は、第1層——耕作土、第2層——暗褐色粘質土層、第3層——青灰色粘質土層であり、遺物包含層は認められない。第2層は、他地区の同層と比較して泥質であり、堆積が厚いにもかかわらず不安定である。

4 出土遺物

出土した土器は各ブロックとも層位的に堆積せず、包含層内に混在した状況であり、遺構なども確認することができず一括資料といえるものは皆無の状態であった。しかし、これらの出土遺物は、資料的にはやや年代幅をもつとはいうものの遺存状態も良く量的にまとまりがある。その中には、在地の土器と北陸・伊勢湾地方などの周辺地域との関連性を示すような資料も含まれている。そこで、できる限り出土遺物を図示することにより、この遺跡の性格と、当地域の弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器の様相を知る手がかりが得られよう。以下、器形別に資料を紹介して行きたい。

(1) 壷形土器

口縁部の形態などにより、口縁端部が垂下し、口縁部外面に擬凹線文や刺突列点文を施すもの(1・2)や口縁端部を上・下方に突出するもので外面に擬凹線文や円形浮文を施すもの(3~5)や文様などをもたないもの(6)や口縁部下端に箆状具による刻みをもつもの(7)などがある。口縁部がくの字状に外反して口縁端部に刷毛目痕をもつもの(8)や端部が丸くおわるもの(9・10)や上端をつまみ上げたもの(11・12)などがある。口縁部に段をもち立ち上がりの短い二重口縁をもつもので、口縁部を横なでするもの(13・14)や箆磨きを施すもの(15・16)などがある。短頸壷には、頸部に一条の貼付凸帯文をもつもの(17)や外上方にのびるもの(18)や直立気味のもの(19・20)などがある。

長頸壷の系譜をひくもので、外面に刷毛目を施し口頸部が退化したもの(22~24)や体部まで退化したもの(21)などがあり、また、体部が扁平な球形をなし外面に箆磨きを施すもので、口頸部が外反するもの(25)や内弯気味のもの(26)や口縁部に櫛描文をもつもの(26・27)などがあり、頸部は長頸であるがその形態は長頸壷そのものとは系譜の異なるものである。

少量ではあるが、伊勢湾系と思われる装飾された壷がある。口縁部内面に刺突列点文による羽状文などの文様を施すものである。口縁部内面に水平面をもたせるもの(28~30)や口縁部が大きく開くもの(31)や内面に瘤状突起をもつもの(32)や外面に丹彩を施すもの(33)などがみられる。口縁部が外上方にのびて下端をやや垂下させたもの(34)や口縁端部を外上方につまみ上げたもの(35)や直口する小形の壷で外面に櫛描文・羽状文を施したもの(36)などがある。また、口頸部下半が直立気味のもの(37)はこれまで他に類例をみないものである。

大形で口縁端部を垂下させ、外面に凹線を施すもの(38)と二重口縁をもつもの(39)などがある。二重口縁の壷は、口縁部に円形浮文・頸部に刻みをもつ貼付凸帯をもち、古墳時代前期のものと考えられる。

(2) 甕形土器

ほとんどのものが近江特有の受口状口縁をなすものであり、口縁部の形態などにより、若干の差異がみられるが、それらが時期差を反映しているのか地域差であるのか十分に明らかにすることができなかった。受口状口縁で頸部が比較的ゆるやかなもの(40)、外面屈曲部に刺突列点文や体部に直線文・刺突列点文を施すもの(41・43~49)があり、口縁端部を外方につまみ出したり、内傾させたり、内面に刷毛目痕をもっていたりするものなどがある。口縁部外面に櫛描波状文を施すもの(42)がある。また、屈曲部以外の体部外面の文様を省略気味にしたり、あるいは施文しなくなったり、刷毛目を外面屈曲部付近まで施すもの(50~57)などがあり、口縁部の形状に若干のバラエティがみられる。屈曲部外面に沈線のみを施すもの(58・59)や文様の消失したもの(60)がある。受口状の口縁部をもち内面に刷毛目を施すもので、頸部と体部下半に刺突列点文をもつもの(62)や肩部の張るもの(63)や頸部内面に刷毛目痕をもつもの(61)などがある。

口縁部をくの字状に外反するもので、口縁端部を上方につまみ上げて外面に擬凹線をもつもの(64~67)や有段口縁で外面に擬凹線をもつもの(68・69)や擬凹線をもたないもの(70・71)などがある。口縁端部を上・下方に突出させ外面に擬凹線をもつもの(72)や凹線文をもつもの(73)や沈線をもつもの(74)などがある。口縁部に屈曲部をもち外面に擬凹線をもつもの(75)や体部外面に羽状文をもつもの(76)や口縁端部が内弯気味のもの(77)などがある。体部外面に叩きを施すもので、体部が球形のもの(78)、口縁端部に刻みをもつもの(79)、体部外面に刷毛目を施すもの(80)などがある。口縁部がくの字状に外反するものの中で、口縁端部の形状にやや差異が認められるが、体部は球形気味のもの(81・82)や肩部のあまり張らないもの(83~86)などがあり、大形の甕で体部が丸味をもち内面に指圧痕をもつもの(87)や口縁端部に刷毛目痕をもち頸部のゆるや

かなもの (88) や口縁部が直立気味で内外面に指圧痕をもつもの (89) や口縁部に稜をもつもの (90) などがあり、小形の甕で、体部中位が張り口縁部の短いもの (94) や口縁端部が丸くおれるもの (91) や尖り気味のもの (92) や口縁部まで叩きを施し体部に刷毛目を施すもの (93) や口縁部に弱い段をもつもの (95・96) などがある。

(3) 鉢形土器

甕と同様に受口状口縁をもつものが主流を占め、外面屈曲部や体部に文様をもつもの(97~99)や扁平気味な体部で文様をもたないもの(100)や屈曲部に刺突列点文をもつもの(101)などがある。有段口縁で口縁部外面に擬凹線をもつもの(102)や口縁部を外側に水平状に折り曲げた大形の片口をもつもの(103)や小形で脚台付のもの(104)や底部より外反してそのまま端部が丸くおわるもの(105)などがある。

壷・甕・鉢類の底部・脚台部と考えられるものがあり、小形で上げ底のもの(106)や平底のもの(107~110)などがある。底部で凹み底のもの(111・115・117・119)や上げ底のもの(112~114・116・118・120・123~126)や薄手のもの(121・127)や平底のもの(122・128)などがあり、体部外面に箆磨きを施すもの(115・123)は壷かもしれない。体部外面に叩きをもつもの(129~135)があり、甕と考えられる78と135は同一個体と思われる。甑(有孔鉢)では、口縁端部を方形状におわるもの(136)や底部のみで一孔をもつもの(137~144)がある。脚台部では、台付鉢と思われるもの(145)や台付甕と思われるもの(146~148)などがある。その形状などから製塩土器としての可能性が考えられるもの(149~153)があるが、体部などに二次焼成を受けた痕跡は認められない。このうち、(150)は体部が薄く、脚台部に指圧痕を残すもので製塩土器とみて誤りないであろう。

(4) 高杯形土器

口縁部の形態などにより、坏部口縁部が外反するもの(154~162)があり、その中には、口縁部外面に山形状に箆磨きするもの(156)や断続的に施すもの(161)や外面屈曲部に箆状具による刺突文をもつもの(160)がある。同様の坏部で脚部中実のもの(163)がある。口縁部が外上方にのび端部が尖り気味のもの(164・165) ⑧ がある。伊勢湾地方の欠山式に類似すると思われるものの坏部(171~173)や脚部(174)、元屋敷式に類似すると思われるもので裾部外面に櫛描文などの文様をもつもの(175~177)がある。小形で円孔をもたないもの(170)や脚部中実で裾部が外方にのびるもの(178)がある。台付椀かと思われるものの椀部(179)や脚部(180)がある。外下方に外反する脚部のもの(183)は、あるいは脚付壷であるかもしれない。小形の脚部(184)がある。

(5) 器台形土器

口縁部下端を垂下させるもの(185~192)があり、口縁部外面に櫛状具による直線文を施すもの(188・189・191・192)や竹管文を施した円形浮文をもつもの(187・189・190・192)や竹管文を施したもの(188)や円形浮文をもつもの(186)などがある。口縁端部を上・下方に突出したり丸くおわったりするもので、口縁部外面に竹管文を施すもの(193)や擬凹線を施し棒状浮文をもつもの(194)や擬凹線を施すもの(196)などがある。口縁端部の上・下端をつまみ出し、くびれ部を上位にもち下半に櫛描直線文を施すもの(200)や受部・脚部とも直線的であり、くびれ部を中位にもつもの(201)がある。小形器台の受部と思われるもの(204~206)やその脚部のもの(206)がある。

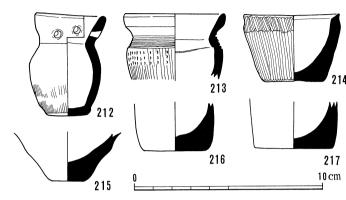
若干、形状が異なるもので、口縁部下端を外方に大きく垂下させたもの(202)や口縁部を上・下方に大きく 突出させたもの(203)があり、両者は外面に擬凹線を施すものである。小形のもの(208)があり、あるいは 脚台部としての可能性も考えられるものである。

(6) 蓋形土器・その他

蓋には、小形で円孔を 2 個一組で 2 方にもつもの (209) や大形で摘みの部分のもの (210・211) があり、 (209) は壷用で (210) と (211) は甕用のものと思われる。

ミニチュア土器として、口縁部に2個の 円孔をもつもの(212)、体部外面に文様 をもつもの(213)、外面に箆磨きを施す もの(214)、体部に丸味をもつもの(215)、平底のもの(216・217)などがある。

以上、土器の概要を述べてきたけれども、 時期的には第V様式~庄内式にわたる数型 式の時期のものである。その内容を具体的



第4図 ミニチュア土器実測図

にみると、壷では、西ノ汁 I 式と比べると、西ノ辻 I 式にみられる口縁端部を垂下させ外面に加飾する壷(1・ 2) は少量であり、口縁下端部に刺突文を施すもの(7) などのように無文化が大勢(4 \sim 6など)を占める。 さらに、長頸壷は、口頸部が退化して短く全体に小形化(21~24)しており新しい様相を示している。受口甕で は、受口状口縁の屈曲部外面に刺突列点文を施すもの(47~49など)があり、高坏では、坏部口縁部の立ち上が りが直立気味ではなくなり外反するもの(161・162など)があり、器台では、壷同様に口縁部を垂下させるも の (185・186など) などが同一時期の遺物としてセットを構成するであろう。これらの一群が出土遺物の中で は最も古い様相を示すもので、第V様式の中でも西ノ辻I式より新しく、西ノ辻E・D式——最近の中河内の資 料でいえば「上小阪期」・「馬場川期」に併行すると思われ、県内では野洲郡野洲町久野部遺跡七ノ坪地区のS D_{∞}^{2} に近い時期の所産であろう。続く時期のものとしては、壷では無文のもの($11 \cdot 12$ など)、受口甕の屈曲部 外面に刺突列点文・沈線などの文様をもち、口縁端部を外上方につまみ出すもの(44・45など)があり、高坏で は外上方にのびるもの(164・165)や脚部中実のもの(163)、器台では受部が直線的でくびれ部を上位にも つもの (200) や中位にもつもの (201) などがあげられる。これらの特色をもつ一群は、中河内における「上 六万寺期」に併行すると思われ、県下では草津市片岡遺跡77-B IV層砂層の時期に近い。弥生時代末頃~古墳 時代初頭頃と考えられる。次に続く時期のものとして、二重口縁をもつ壷(13・14)、受口甕の屈曲部が無文の もの (60)、脚部中実で柱状部より屈曲して外方にのびる裾部をもつ高坏 (178) などがあげられる。大津市湖 西線関係遺跡ⅢE区下層式の時期に相当し、庄内式に併行するものと考えられる。ただ、本遺跡では湖西線関係 遺跡ⅢE区下層式の甕D類とされる河内の庄内式甕の特色ともいうべき、体部外面に細かい右上がりの叩きをも ち下半に刷毛目を施すものが出土していない。叩きをもつ甕(78・79)は口縁部が外反し、体部が球形気味の連 続ラセン叩き様であり、(80)は体部3分割成形で外面に刷毛目を施すなど「弥生型の甕」と言われるものであ ろう。しかし、近接する新旭町森浜遺跡では、その出土例が知られている。このように、隣接している森浜遺跡 とは土器の構成に差異がみられ、両者の違いが庄内式の内での古相・新相によって生じているのか、あるいは遺 跡の地点による差であるのかもしれない。庄内式の土器と考えているもののうち、大形の二重口縁壷(39)や小 形器台(206)などは、針江遺跡の下限を示すものであり、出土量は少量である。あるいは布留式に近い時期の ものであるかもしれない。

受口状口縁の甕は別として、土器の形態や構成はどちらかというと畿内色の強いものであるが、その中に少量ではあるが、北陸地方などの日本海側や伊勢湾地方との関連を示す土器が混在している。まず、日本海側系の土器としては、甕(64~69)、鉢(102)、器台(202・203)などの口縁部外面に擬凹線をもつものがあげられ、一部の甕(70・71)には擬凹線をもたないものがあり、また、有段口縁をもつ甕の立ち上がりに大・小がみられるなどの差異がある。これらが時期差を示すのか、日本海側からの影響を受ける場合の地理的にみる周辺地域間の差異を示すかと思われる。日本海側系と思われる土器の分布は、湖西線関係遺跡Ⅲ E 区下層式の甕 E 類や大津市北大津遺跡 S B −18・S B −20の甕 D 類や長浜市高田遺跡第3・第7層の甕 D 類など全県下にみられ、それらとの共伴遺物などの時期は第V様式~圧内式の間で認められている。伊勢湾系には壷・高坏などがあり、口縁部内外面や体部上半に加飾するパレス壷(28~30など)、深い坏部をもち坏底部と口縁部との屈曲が著しいもの(173)である。それらの特色をもつ土器の分布は、長浜市鴨田遺跡・高田遺跡・十里町遺跡など近江北半に集中してみられ、それらの共伴遺物などの時期も第V様式~庄内式の間に求められる。中に、脚部裾部外面に文様をもつ高坏(175~177)は、時期が若干下がる可能性があると考えている。

5 おわりに

今回の調査は、前年度検出された高床式建物のような遺構は検出されなかったが、以下のことが判明した。

第1に本遺跡の広がりについてであるが、今回の東西 400 mにわたる調査によって、東西 700 mと推測されていた範囲が、かなり縮小されることである。特に本遺跡の東限は、まったく遺物の出土がみられなかった第4 ブロック周辺にあたると思われる。また、南北においても、今回の第1 ブロックの調査結果のように一面に遺構・遺物の存在・出土がみられるのではなく、沼及び自然流路等によって分断され、島状に点在していると思われることである。特に前年度調査の Aトレンチ・本年度調査の第1トレンチ周辺、及び現在の針江集落周辺が、最も濃密に分布する地域と思われる。

第2に、当地域は弥生時代後期を中心とする多量の土器が出土したことによって、遅くても弥生時代後期には 安定した土地を居住地として、集落周辺の低湿地・沼・及び琵琶湖に生活の糧を求めた生活が営まれていたこと が、確実に証明されたと言えよう。

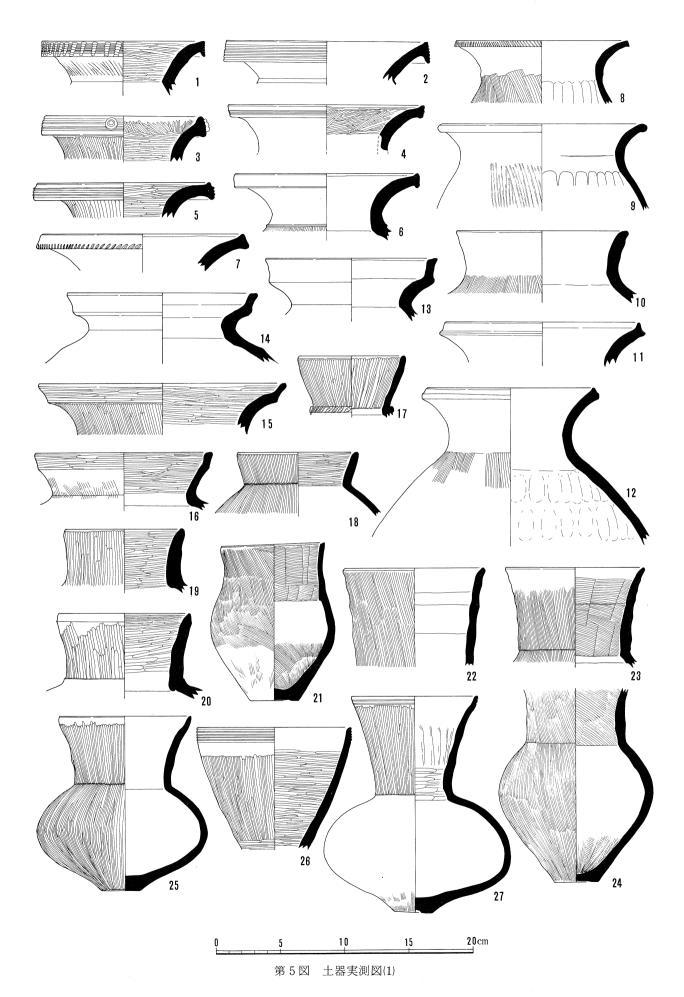
いずれにしても、ほ場整備における水路予定地の線的な発掘調査のため、針江遺跡の詳細は、今後の多くの資料の追加が必要である。

註

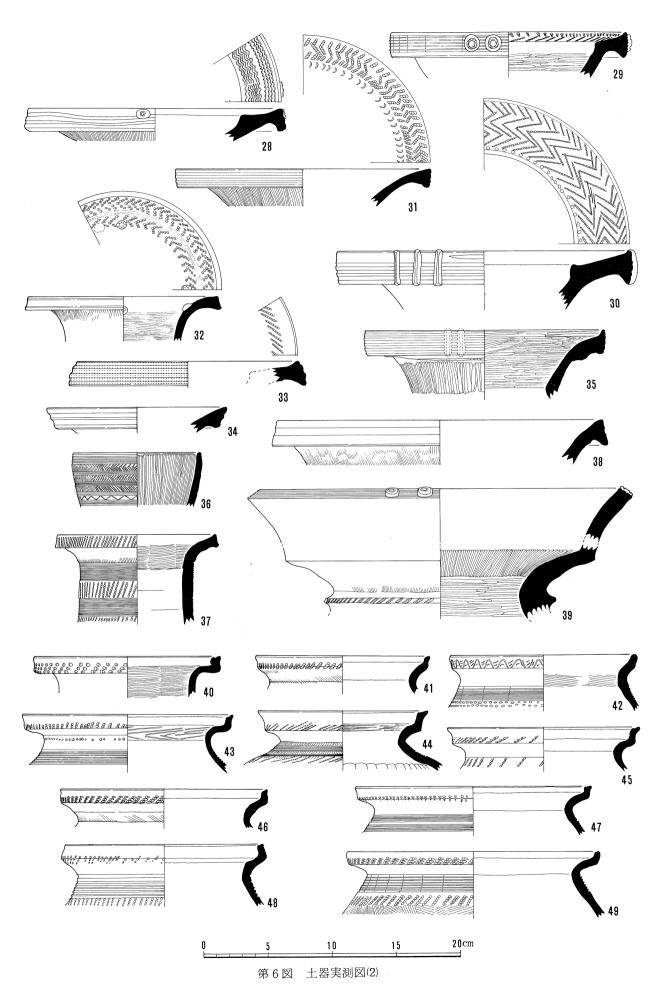
- ① 澄田正一・大参義一・岩野見司『新編一宮市史 資料編二』(一宮市 1967年)
- ② 久永春男•芳賀陽「欠山遺跡」(『瓜郷』 豊橋市教育委員会 1963年)
- ③ 大参義一「弥生式土器から土師器へー東海地方西部の場合ー」(『名古屋大学文学部研究論集(史学)』第47期 1968年)
- ④ 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡 I 地点の土器」(『弥生式土器集成』資料編 1 1958年)
- ⑤ 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」(『考古学研究』第20巻第4号 1974年)
- ⑥ 勝田邦男「上小阪遺跡」(『上小阪・瓜生堂・新家遺跡調査報告書』 東大阪市遺跡保護調査会 1976年)
- ① 芋本隆裕ほか『馬場川遺跡 Ⅲ』(東大阪市埋蔵文化財包含地調査概報14 東大阪市教育委員会 1975年)
- ⑧ 大橋信弥・別所健二・谷口徹『久野部遺跡発掘調査報告書-七ノ坪地区-』(滋賀県教育委員会・野洲町教育委

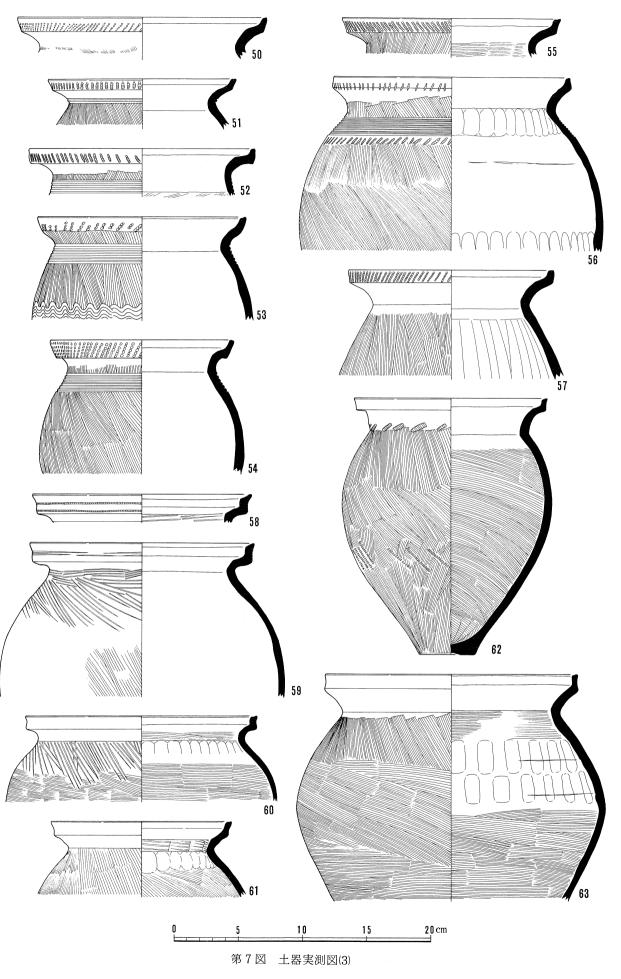
員会・滋賀県文化財保護協会 1977年)

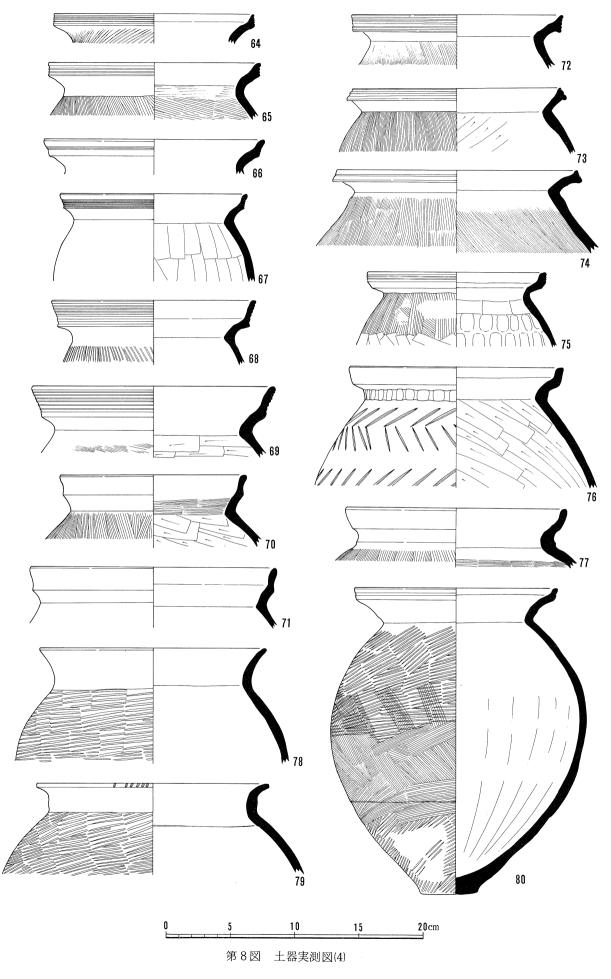
- (9) 福永信雄「上六万寺遺跡」(『東大阪市遺跡保護調査会年報』I 東大阪市遺跡保護調査会 1975年)
- ⑩ 丸山竜平ほか「草津市片岡遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ-Ⅱ』 滋賀県教育委員会・滋賀県文 化財保護協会 1977年)
- ① 田辺昭三編『湖西線関係遺跡調査報告書』(滋賀県教育委員会 1973年)
- (②) 原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」(『大阪府立島上高校研究紀要3』 1968年)
- ③ 石野博信・関川尚功『纒向』(桜井市教育委員会 1976年)
- ④ 本田修平・堀内宏司・奥野宗寛・折井千枝子「滋賀県下の庄内式土器 畿内より搬入された甕形土器の分布 」 (『滋賀文化財だより』 No.9 滋賀県文化財保護協会 1977年)
- ⑮ 置田雅昭「大和における古式土師器の実態-天理市布留遺跡出土資料-」(『古代文化』第26巻第2号 1974年)
- 18 橋本澄夫・荒木繁行「金沢市下安原海岸遺跡の第Ⅰ次調査」(『石川考古学研究会々誌』第18号 1975年)平良泰久『曽我谷遺跡発掘調査概報』(園部町埋蔵文化財調査報告書第二集 園部町教育委員会 1977年)
- ⑪ 中西常雄『北大津の変貌-弥生時代から古墳時代へ-』 (1979年)
- ® 宮成良佐『高田遺跡(長浜電報電話局敷地内所在)調査報告書』(長浜市教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1980年)
- 19 註①・②・③に同じ
- ⑩ 中谷雅治ほか「鴨田遺跡」(『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』Ⅱ 滋賀県教育委員会 1973年)
- ② 註18に同じ
- ② 宮成良佐『宮司遺跡・十里町(字十五町地区)遺跡調査報告書』(宮司遺跡発掘調査団・長浜市遺跡発掘調査団 ・長浜市教育委員会 1977年)



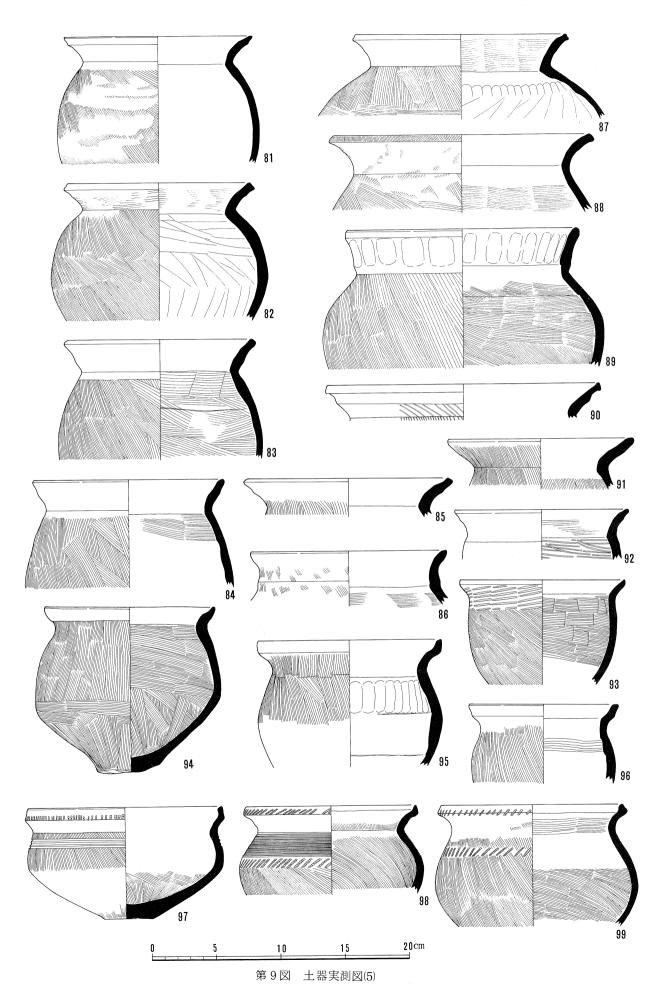
-79-



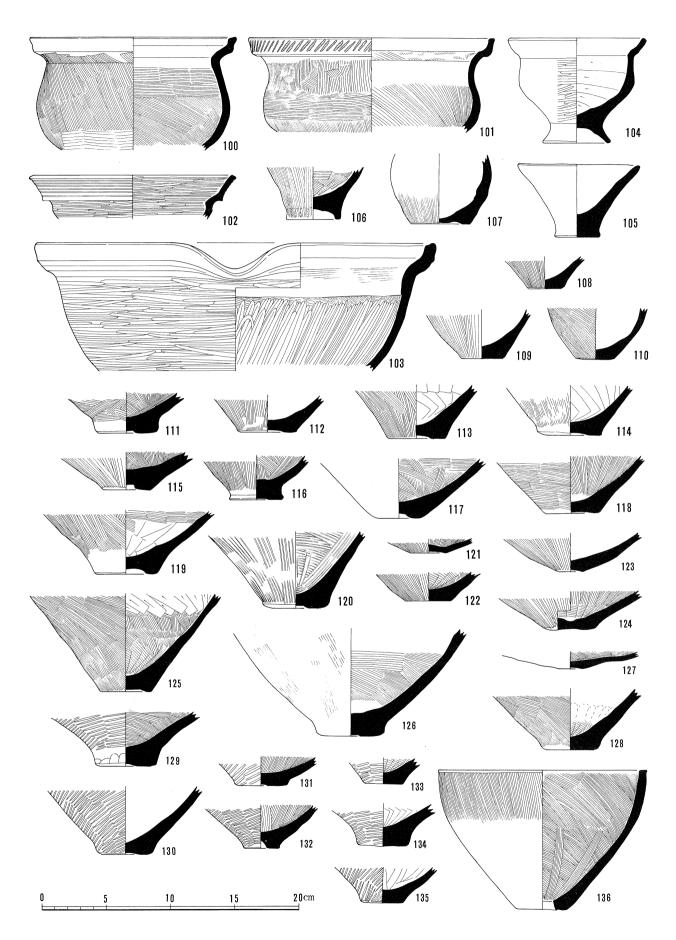




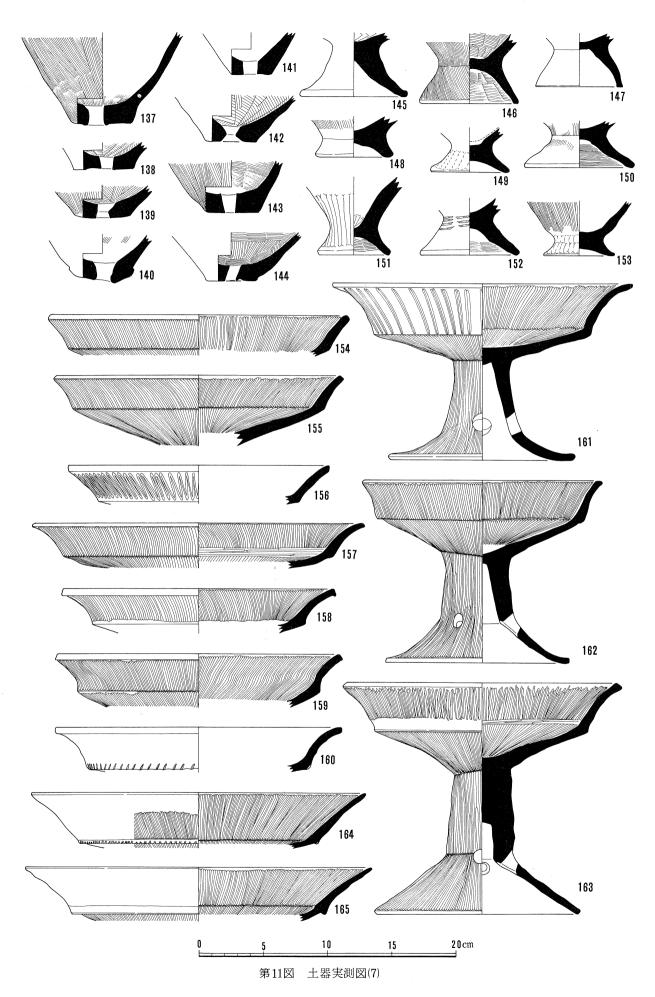
-82-

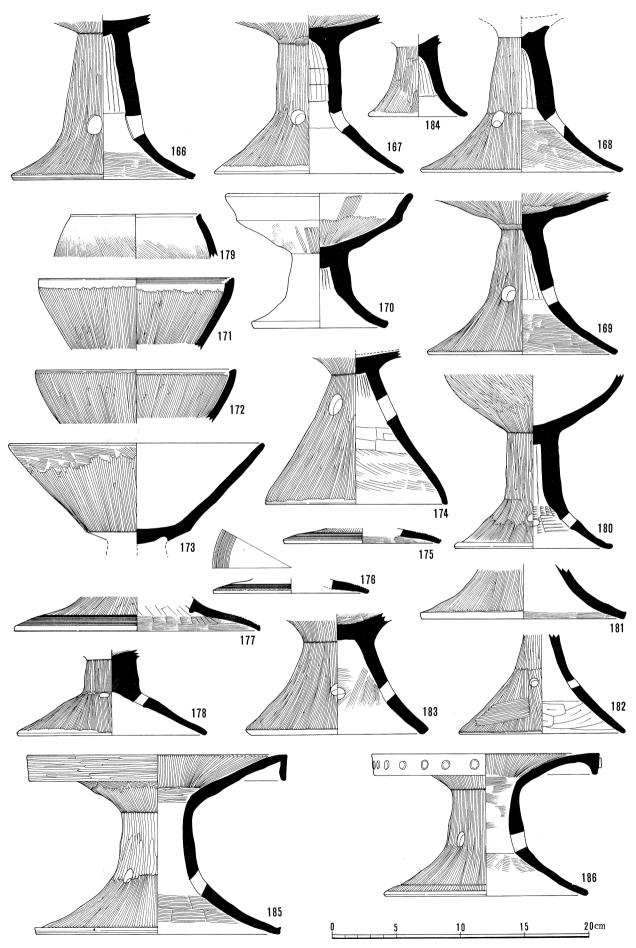


-83-

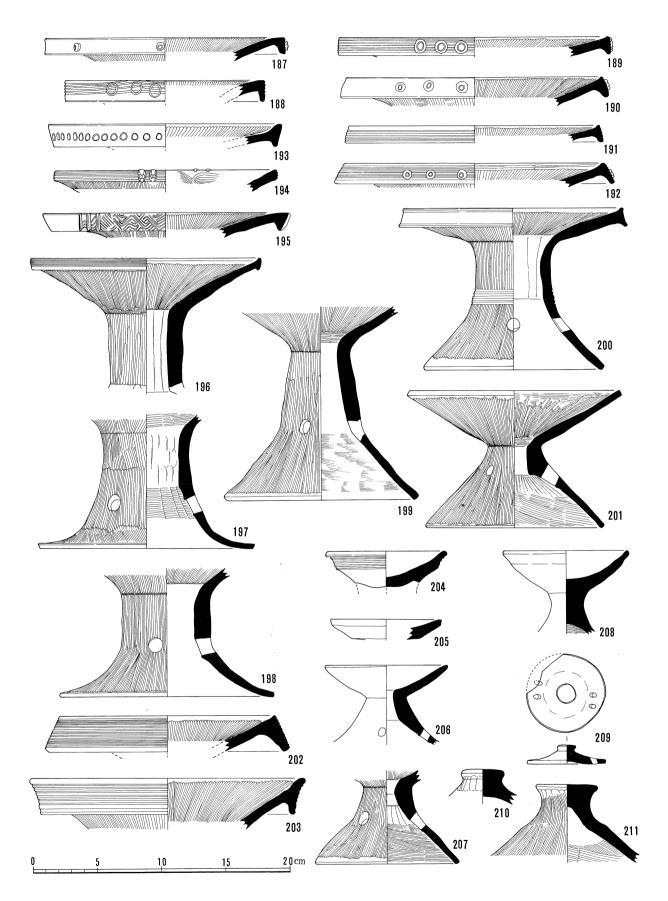


第10図 土器実測図(6)





第12図 土器実測図(8)



第13図 土器実測図(9)

針江遺跡出土土器観察表

器形	番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備	考
壷	1	口径	頸部よりくの字状に外反し、	外面刷毛目、内面横方向の	色調 灰白色(1 • 2)
	•	1,12.6	口縁部を垂下し、端部はやや	箆磨き(1)施す。		焼成 硬
	2	2, 15.6	尖り気味におわる。(1・2)	口縁部外面に擬凹線(1・	残部 1/5(1)、	
					地区 第2ブロ	
				1)、頸部貼付凸帯(2)を	第6ブロ・	ック (2)
				施す。2は内外面摩滅する。		
	3	口径	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なでし、外面縦方	色調 淡黄灰色	
	\	3, 11.9	口縁端部を上・下方に突出す	向・内面横方向の篦磨き(3	茶灰色(
	5	4, 15.0	る。 (3~5)	5)、内面横方向の箆磨き	黄灰色(
		5, 13, 2		(4) 施す。		焼成 硬
				口縁部外面に擬凹線施す。	残部 1/6(3	
				(3~5)	完存(4)	
				竹管文をもつ円形浮文施す	地区 第2ブロ・	
				(3) もある。	第1ブロ· 第6ブロ·	
	6	│ □径	頸部よりくの字状に外反し、	□縁部構なで(6・7)、	売りフロ· 色調 淡茶褐色	···
	•	6、14.2	関部よりくの子状に外及し、 口縁端部を上・下方につまみ		色調 淡余褐色 淡黄灰色	
	7	7.15.6	山	日縁部下端部に箆状具によ		焼成 硬
	'	1, 10.0		る刺突文(7)施す。	加工 相及 3 残部 1∕3 (6)	
					(7)	/ 1
					地区 第9ブロ・	ック (6)
					第8ブロ	
	8	口径 13.2	頸部よりくの字状にゆるや	口縁部横なで、体部外面刷	色調 赤褐色	
						焼成 硬
			状におわる。	痕あり。	残部 1/10	
				口縁端部に刷毛目痕あり。	地区 第8ブロ	ック
	9	口径 15.6	頸部よりくの字状にゆるや	口縁部横なで、体部外面板	色調 淡赤褐色	
			かに外反し、口縁端部は肥厚	状具による器面調整、内面な	胎土 精良 炸	焼成 硬
			し丸くおわる。	で仕上げする。	残部 1∕10	
			,		地区 第8ブロ	ック
	10	口径 10.0	頸部より外反気味に上方に		色調 赤褐色	
			のび、口縁端部は丸くおわる。	毛目、内面なで仕上げする。		焼成 硬
					残部 1/3	
	-1-	[] (Y)	循切レルノの穴がたって	口 绿 的 ## +> ~ / 1.1 · 1.0	地区 第1ブロー	
	11	口径	頸部よりくの字状にゆるや	口縁部横なで(11・12)、	色調 淡灰白色	
	12	11, 15, 0	かに外反し、口縁端部は上端 をつまみ出す。(11・12)	体部外面なで仕上げで刷毛目 痕・内面なで仕上げで指圧痕	淡黄灰色 胎土 精良	(12) 焼成 硬
	14	14, 14.8	をつまみ出す。 (11・12) 体部は丸味をもつ (12)。	限・内面なで仕上げで指圧限 (12)あり。	府土 有良	
			rrupioルがとも ノ (14) o	(14) 00 00	残部 1/8 (1 1/4 (1	
					地区 第2ブロ	
					第1ブロ	
	13	口径	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なで(13.14)、	色調 淡赤橙色	
	•	13, 13.0	屈曲部をもち、そのまま外反	体部内外面なで仕上げ(14)	淡黄橙色	
	14	14, 14. 0	気味に上方にのび、口縁端部	する。		焼成 硬
			は外方につまみ出すように丸		残部 1/4 (13	
			くおわる。		(14)	
					地区 第2ブロ	ック (13)
					第7ブロ	
	15	口径	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横方向の箆磨き(15)		
	•	15、19.0	弱い屈曲部をもち、そのまま	・16)、外面縦方向の箆磨き	褐灰色(
	16	16、13.6	 立ち上がり、端部を丸く(15)	(15)、外面横なでで刷毛目		焼成 硬
	10	10, 10.0	1 > > - > - > - > - \ (10)	(10) · / [[[]] () () () [[] [] []	加上和及	90/90

						(16)
					まる	第8ブロック(15)
					762	第9ブロック (16)
-	17	口径 8.0	頸部よりやや内弯気味に直	口縁部縦方向の箆磨き、頸	色調	淡赤褐色
			口し、口縁端部は丸くおわる。		胎土	精良 焼成 硬
				刺突列点文施す。	残部	1/5
				113C73MC<8E70	地区	
	18	口径 9.2	頸部よりくの字状に直口し、	口縁部外面縦方向・内面横	色調	淡赤黄色
	10		口縁端部は丸味をもたせる。	方向の箆磨き、体部外面縦方	胎土	精良 焼成 硬
				向の篦磨き、内面なで仕上げ	残部	1/6
				する。	地区	,
-	19	口径	頸部よりくの字状に直口し、	口縁部外面縦方向・内面横		淡黄灰色 (19)
		19、9.0	口縁端部は尖り気味におわる。	'		灰白色 (20)
	20	20, 10.1	(19 • 20)	頸部内面に接合の際の突出	胎土	精良 焼成 硬
			·	痕あり。(19・20)	残部	1/6 (19) 、 完存
						(20)
					地区	第7ブロック(19)
						第2ブロック (20)
	21	口径 8.0	頸部より外反気味に上方に	内外面縦・横方向の刷毛目	色調	赤褐色
		器高 12.1	のび、口縁端部は方形状にお	で、体部外面下方・内面上方	胎土	精良 焼成 硬
		底径 3.8	わり、体部は丸味をもち、底	なで仕上げで、体部外面刷毛	残部	ほぽ完形
			部は平底である。	目痕あり。	地区	第2ブロック
	22	口径	頸部より外反気味に上方に	口縁部外面刷毛目(22~24)	色調	淡赤褐色 (22)
	≀	22, 10.6	のび、口縁端部は尖り気味に	で、内面刷毛目(23.24)・		赤橙色 (23)
	24	23、10.7	おわる。 (22.23)	なで仕上げ(22)する。		淡赤橙色 (24)
		底径	体部は丸味をもち、底部は	体部外面刷毛目、内面上方	胎土	精良 焼成 硬
		24, 3.3	平底で若干上げ底気味である。	なで仕上げ・下方刷毛目(24)	残部	1/5 (22 • 23)
			(24)	施す。		1/2 (24)
					地区	第3ブロック(22)
						第4ブロック(23)
_			į.			第2ブロック(24)
	25	口径 10.2	頸部より外反気味に上方に	口縁部外面縦方向の篦磨き	色調	赤褐色
		器高 13.7	のび、口縁端部は内弯気味に	・内面横なでし、体部外面縦	胎土	精良 焼成 硬
		底径 3.0	尖り気味におわり、体部は扁	方向の箆磨き・内面なで仕上	残部	完形
			平気味に丸味をもたせ、底部	げで平滑である。	地区	第2ブロック
			は平底である。			
	26	口径 11.8	頸部より内弯気味に上方に	口縁部横なで、縦・横方向	色調	淡黄灰色
		:	のび、口縁端部は丸くおわる。	の箆磨き施す。	胎土	精良 焼成 硬
		rá.		口縁部に櫛描文施す。	残部	1/4
				,		第2ブロック
	27	口径 9.8	頸部より外反気味に上方に	口縁部横なで、縦・横方向	色調	赤褐色
		器高 16.9	のび、口縁端部は内弯気味に	の箆磨き、内面に凹凸あり。	胎土	精良 焼成 硬
		底径 2.9	尖り気味におわり、体部は扁	体部外面摩滅するが、刷毛		ほぼ完形
			平気味に丸味をもたせ、底部	目痕あり、内面なで仕上げで	地区	第2ブロック
-			は上げ底である。	平滑にする。		
	28	口径	頸部よりくの字状に外反し、	,	色調	淡茶褐色 (28)
	}	28, 19.6	内面に突出部をもち平坦面を	外面刷毛目(28)、内面横方		淡黄橙色 (29)
	30	29、18.2	もち、口縁部上端をつまみ上	向の箆磨き(29)、内外面な	.,	淡灰白色 (30)
		30、22.6	げ下端を垂下し、口縁端部は	で仕上げ(30)する。	胎土	精良 焼成 硬
			方形状 (28) 、尖り気味 (29	口縁部外面に凹線(28~30	残部	1/15(28) , 1/10
			.30) におわる。)施し、竹管文をもつ円形浮		(29) , 1/7 (30)
				文(28.29)・3本一組の棒	地区	第4ブロック(28
				状浮文(30)、内面に櫛状具		. 29)

					による波状文(28)・刺突列 点文(29.30)施す。		第3ブロック	(30)
	31	口径	19.6	頸部より外反し、口縁端部	口縁部横なで、外面刷毛目	鱼 調	赤褐色	
	01		10.0	を垂下し、丸くおわる。	口縁部外面に凹線文、内面	胎土	精良 焼成	硬
				2210,70,4047.08	に櫛状具による刺突文・半截	残部	1/7	H.C.
							·	
		47			竹管文施す。		第4ブロック	
	32	口径	14.6	7	口縁部横なでし、刷毛目痕		淡黄灰色	
				端を外方につまみ出し、丸く	あり。口縁部内面に櫛状具に	胎土	精良 焼成	硬
				おわる。	よる刺突列点文・瘤状突起を	残部	1/4	
					2個一対施す。	地区	第3ブロック	
	33	口径	17.0	外反する口縁部で水平面を	口縁部横なでする。	色調	淡黄橙色	
				もち、端部を上・下方に突出	口縁部外面凹線施し、丹塗	胎土	精良 焼成	硬
	,			し、丸くおわる。	し、内面に櫛状具による刺突	残部	1/20	
					列点文施す。	地区	第5ブロック	
	34	口径	13.9	外上方にのびる口縁部をも	口縁部横なでし、口縁部外	色調	淡黄褐色	
			10.0	ち、口縁端部上端は丸くおわ	面に凹線施す。	胎土		硬
				り、下端は垂下し丸くおわる。		残部	1/10	-5~
				り、「端は至」 したく おりる			第2ブロック	
	05	F1 47	10 5	変がないの人のウルンスを	口妈如桃本不 从五级十台	-	*****	
	35	口企	18.5				淡灰白色	776
				口縁端部を上・下方に突出し	• 内面横方向の箆磨き施す。		精良 焼成	便
				尖り気味におわる。	口縁部外面に凹線・棒状浮	残部	1/8	
					文を施す。	地区	第2ブロック	
	36	口径	9.6	内弯気味に直口し、口縁端	口縁部内面縦方向の箆磨き	色調	淡灰黄色	
				部は丸くおわる。	施し、外面に櫛状具による直	胎土	精良 焼成	硬
					線文・刺突列点による羽状文	残部	1/6	
					・山形文を施す。	地区	第2ブロック	
	37	口径	12.2	上方にのびる頸部で、口縁	口縁部横なで、刷毛目痕あ	色調	淡褐灰色	
				部上方が外反し、端部上・下	り、内面下方なで仕上げする。	胎土	精良 焼成	硬
				端をつまみ出す。	口縁部外面に櫛状具による	残部	1/4	
					刺突列点文・直線文を施す。		ディー 第8ブロック	
	38	口汉	25.0	外上方にのびる口縁部であ	口縁部横なで、外面に刷毛		※灰白色	
	30	口笙	20.0	り、口縁端部を垂下し丸くお	目を施す。	胎土		皕
								収
				わる。	口縁部外面に一条の凹線を	残部	1/8	
					施す。		第2ブロック	
	39	口径	30.0			色調	赤褐色	
				屈曲部をもち、そのまま外反	り、内面に縦・横方向の篦磨	胎土	精良 焼成	使
				気味に立ち上がり、口縁端部	き施す。口縁部外面に櫛状具	残部	1/15	
				は方形状におわる。	の直線文・竹管文をもつ円形	地区	第5ブロック	
	-				浮文、頸部に貼付凸帯施し、			
					櫛状具による刺突列点文施す。			
甕	40	口径	14.4	頸部よりゆるやかに外反し、	口縁部横なで、内面刷毛目	色調	淡灰白色	
				屈曲部をもち、口縁端部を凹	痕あり、屈曲部に櫛状具によ	胎土	精良 焼成	硬
				状に丸くおわる。	る刺突列点文施す。	残部	1/8	
						地区	第10ブロック	
	41	口径		頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なでし、外面に刷		淡褐灰色 (41)	
			13.4		毛目痕(41・46)あり、内面	[[淡黄橙色(43)	
	43	1	16.3		に刷毛目痕(43・44)あり。		淡茶灰色(44	
	⁴⁵ ≀		13. 2		屈曲部外面に櫛状具による		淡茶褐色(46)	
)
	49		14 . 8		刺突文、頸部に櫛状具による		灰白色(47)	
			16.0				黄灰色 (48)	
	1	1 47	18.2	方形状におわる(47)、内傾	口縁端部に櫛状具による直	1	淡黄灰色(49)
		48、	15 · 2 19 · 6	して方形状におわる(48)、	線文(47) 施す。	胎土		

		1				
			49) 。	体部外面に刷毛目(44・49		(43) 、1/5(44
) 施し、内面なで仕上げ(41		• 48) 、 1/7 (45)
				・43~49)し、指圧痕あり(1/10 (46 • 47 • 49)
				44) 。	地区	第10ブロック
						(41 • 46 • 49)
						第2ブロック(43)
						第7ブロック(44)
						第5ブロック(45)
						第8ブロック (47)
						第4ブロック(48)
	42	口径 14.2	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なで、内面刷毛目	色調	淡赤褐色
			弱い屈曲部をもち、そのまま	痕あり。屈曲部にくずれた櫛	胎土	精良 焼成 硬
			上方にのび、口縁端部は丸く	描波状文、体部に櫛状具によ	残部	1/5
			おわる。	る直線文・刺突列点文施す。	地区	第7ブロック
-	50	口径	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なでし、外面刷毛	色調	淡黄褐色 (50)
	₹	50、19.2	屈曲部をもち、そのまま上方	目(50・52~56) 施し、内面	IV4J	茶褐色 (51)
	57	51, 14.4	にのびるが、屈曲部が若干下	刷毛目痕(52・55)あり。		淡赤橙色 (52)
	01	52, 17. 4	がり気味(52・54)・ゆるや	体部外面刷毛目(51・53・		灰白色 (53)
		53, 16.0	かな屈曲部(53)があり、口	54・56・57) 施し、内面なで		淡赤褐色 (54)
		54, 14.0				
		, i		仕上げであり、指圧痕(56)		淡茶灰色 (55)
		55、16.9 56、18.2	・52~54・56・57) ・凹状に	・板状具による器面調整(57)		淡赤橙色(56)
			丸くおわる(51・55)がある。		ELA I.	淡褐灰色 (57)
		57、15.8	体部は下方にのびる(53・	具による刺突列点文を施し、	胎土	精良 焼成 硬
			54) 、丸味をもつ(56)があ	頸部に櫛状具による直線文(残部	1/5 (50 • 56)
			る。	51 • 52 • 54) 施し、体部外面		1/8 (51),1/10 (52)
				に櫛状具による直線文・波状		1/4 (53), 1/3 (54)
				文(53)、直線文•刺突列点		1/7 (55), 1/6 (57)
				文(56)施す。	地区	第4ブロック(50
						• 55)
			ì.			第5ブロック(51)
						第6ブロック(52
						• 57)
						第8ブロック(53)
						第3ブロック(54)
-			,			第2ブロック (56)
	58	口径	頸部よりくの字状に外反し、		色調	淡黄白色(58)
	•	58、17.0	屈曲部をもち、そのまま上方	目痕(58)あり、体部外面は	l	灰白色 (59)
	59	59、17.4	にのび、口縁端部は外上方に	カキ目で下方刷毛目、内面な	胎土	精良 焼成 硬
		~	突出し、丸くおわる。体部は	で仕上げする(59)。	残部	1/9 (58) 、1/4
			球形気味(59)である。	屈曲部に櫛状具による直線		(59)
				文施し、58は断続的である。	地区	第9ブロック(58)
						第2ブロック(59)
	60	口径 18.0	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なで、内面刷毛目	色調	灰白色
			屈曲部をもち、そのまま上方	痕あり、体部外面カキ目・下	胎土	精良 焼成 硬
			にのび、口縁端部は外方につ	方刷毛目、内面刷毛目•指圧	残部	1/3
			まみ出す。	痕施す。	地区	第2ブロック
	61	口径 13.8	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なで、内面刷毛目	色調	黄橙色
			屈曲部をもち、そのまま上方	痕あり、体部内外面刷毛目施	胎土	精良 焼成 硬
			にのび、口縁端部は凹状に丸	し、内面指圧痕あり。	残部	1/5
			くおわる。		地区	第2ブロック
	62	口径 14.8	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なでし、体部内外	色調	褐灰色
		器高 20.0	屈曲部をもち、口縁端部は方	面刷毛目施す。頸部・体部下	胎土	精良 焼成 硬
		底径 4.2	形状におわる。体部は丸味を	位外面に櫛状具による刺突列	残部	完形
L						

			1	もち、底部は上げ底である。	点文施す。	地区	第2ブロック
-	63	口仅	19.5	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なでし、体部内外		淡赤黄色
	05	口徑	19.5	屈曲部をもち、口縁端部は方	面刷毛目施し、内面上方なで	胎土	精良 焼成 硬
				形状におわる。体部は中位が	仕上げ・指圧痕・刷毛目痕あ	残部	1/4
					り。	地区	第2ブロック
	0.4	C 47		張る。	口縁部横なでし、外面刷毛		※灰橙色 (64)
	64	口径	15 4	頸部よりくの字状に外反し、	目施し(64)、頸部内面に刷	巴加	黄灰色(65 • 67)
	}		15 . 4	端部を上方につまみ上げ口縁			淡赤褐色 (66)
	67		14 . 4	端部を尖り気味(64)・丸く	毛目痕(65)あり、体部内外	松工	精良 焼成 硬
			17.0	おわるもの(65)や口縁部が	面刷毛目施し(65)、体部外	胎土残部	1/7 (64),1/6
		67.	14.4	立ち上がり気味で端部は丸く	面なで仕上げ・内面板状具に	戏叫	$(67), 1/10(65 \cdot 66)$
				おわる(66・67)がある。	よる器面調整施す(67)。	HH IV	第7ブロック(64)
					口縁部外面に擬凹線施す。	地区	第 2 ブロック(65)
					(64 ~ 67)		第10ブロック(66)
							第4ブロック(67)
-		- ZZ			口縁部構なでし、外面刷毛	色調	※灰白色(68・69)
	68	口径	45 0	頸部よりくの字状に外反し、	目施し、内面なで仕上げ(68	胎土	精良 焼成 硬
	•		15.3	内面に段をもち、そのまま立) ・ 箆削り (69) する。	残部	1/8 (68)、1/5
	69	69、	18.6	ち上がり、口縁端部は丸くお		戏印	(69)
				わる(68・69)。	口縁部外面に擬凹線施す。	₩ I⊃	第2ブロック
						PE C	(68 • 69)
_	70	口径		頸部よりくの字状に外反し、	□縁部横なで(70・71)、	色調	
	70 •		14.2	内面に段をもち、そのまま上	内面に刷毛目痕(70)あり、		淡茶灰色 (71)
	71		18.6	方にのび、口縁端部は丸くお	体部外面刷毛目・内面左上が	胎土	精良 焼成 硬
	11	/1,	10.0	わる (70・71)。	りの篦削り(70)施す。	残部	1/5 (70),1/8
				(10-11) 6	O DE HIS CION NE 9 8	200	(71)
						地区	
						70,83	第2ブロック(71)
	72	口徑	16.2	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なでし、体部外面	色調	淡黄橙色
	12		10.2	□縁端部を上・下方に突出さ	刷毛目、内面板状具による器	胎土	精良 焼成 硬
				せ、尖り気味におわる。	面調整で平滑に仕上げる。	残部	1/7
					口縁部外面に擬凹線施す。	地区	第 2 ブロック
-	73	口径	16.0	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なでし、体部外面	色調	 淡黄橙色
				口縁端部を上・下方に突出さ	刷毛目、内面右上がりの箆削	胎土	精良 焼成 硬
				せ、丸くおわる。	り施す。	残部	1/15
					口縁部外面に凹線施す。	地区	第5ブロック
	74	口径	18 . 6	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なでし、体部内外	色調	茶灰色
				口縁端部を上・下方に突出さ	面に刷毛目施す。	胎土	精良 焼成 硬
				せ、丸くおわる。		残部	1/6
						地区	第 4 ブロック
	75	口径	13.8	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なで、体部外面刷	色調	淡茶灰色
				内面に段をもち、そのまま上	毛目・なで仕上げ・板状具に	胎土	精良 焼成 硬
				方にのび、口縁端部は方形状	よる器面調整、内面板状具に	残部	1/8
				におわる。	よる器面調整・指圧痕あり。	地区	第3ブロック
	76	口径	16.4	頸部より外反し、内面に段	口縁部横なで、頸部外面指	色調	
				をもち、そのまま上方にのび、	圧痕あり、体部外面摩滅し、	胎土	
				口縁端部は方形状におわり、	篦状具による羽状文、内面は	残部	
				体部は丸味もつ。	左上がりの箆削りする。	地区	
	77	口径	16.8	頸部よりくの字状に外反し、			
				さらに内弯気味に上方にのび、	面刷毛目施す。	胎土	
				口縁端部は丸くおわる。		残部	
		-			- A7 to 1"	地区	
	78	口径		頸部よりくの字状に外反さ	口縁部横なでし、体部外面	色調	淡黒灰色 (78)

1						U (EQ.)
	•	78. 17. 4		右上がりの叩き、内面なで仕		黄灰色(79)
	79	79、17.6	体部は球形気味である(78・	上げする(78・79)。	胎土	精良 焼成 硬
			79) 。	口縁端部に箆状具による刺	残部	1/6 (78),1/10
				突文施す(79)。		(79)
					地区	第2ブロック(78)
						第7ブロック(79)
	80	口径 15.6	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なで、内面刷毛目	色調	淡灰色
		器高 23.9	口縁部を上方につまみ上げ、	痕あり、体部外面3分割の叩	胎土	精良 焼成 硬
		底径 4.4	端部は丸くおわる。	きで、中位に刷毛目・下位に	残部	ほぼ完形
		ALL I.I		なで仕上げ、内面板状具によ		第2ブロック
			底部をもつ。	る器面調整・なで仕上げする。		
	01	 口径	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なで、刷毛目痕(色調	灰白色 (81)
	81	81、14·6		82) あり、体部外面刷毛目、		淡茶褐色 (82)
			·	なで仕上げ(81)、内面なで	胎土	
	82	82, 14.2	り気味(81)、方形状(82)	仕上げ(81)・板状具による		1/4 (81 • 82)
			におわる。			第8ブロック(81)
			体部は球形気味である(81	器面調整 (82) で平滑に仕上	地区	
			• 82) 。	げる。	Д. ≑m	第4ブロック (82)
	83	口径	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なでし、外面に刷	 色調	淡茶灰色 (83 · 84)
	₹	83、14.2		毛目痕(86)あり、体部外面		淡茶褐色 (85)
	86	84、14。7		刷毛目で、内面刷毛目(83)	m., -	淡白灰色 (86)
		85、15.6	・85)、丸くおわる(84・86	なで仕上げで刷毛目痕(84・	胎土	精良 焼成 硬
		86、15.0) 。	86)、なで仕上げ(85)する。	残部	1/5 (83 • 85)
			体部は丸味をもつ。			1/7 (84) 、1/10
						(86)
					地区	第3ブロック(83)
						第4ブロック(84)
						第2ブロック(85)
						第10ブロック(86)
	87	口径 16.2	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なで、内面刷毛目	色調	淡赤褐色
			口縁端部は方形状におわる。	施し、体部外面刷毛目、内面	胎土	精良 焼成 硬
			体部は丸味をもつ。	板状具による器面調整・指圧	残部	1/4
				痕あり。	地区	第4ブロック
	88	口径 19.8	頸部よりくの字状にゆるや	□縁部横なで、外面刷毛目	色調	淡茶褐色
			かに外反し、口縁端部は方形	痕あり、体部内外面に刷毛目	胎土	精良 焼成 硬
			状におわる。	を施し、口縁端部に刷毛目痕	残部	1/6
			N(10 40 42 0	あり。	地区	·
	89	□径 17.6	頸部より外反気味に上方に	口縁部横なでし、内外面指		
	60	II - (のび、口縁端部は丸くおわる。		胎土	
		\$i-	C C C Marketin market on C C C C C C C C C C C C C C C C C C	施す。	残部	
				Ne > 0	地区	·
	90	口径 21.0		□縁部構なでし、外面に刷	色調	
	90	口往 21.	弱い稜をもち、口縁端部は上	毛目痕あり。	胎土	, ·· –
				¹ ロIRのソ。 	残部	
			• 下端をつまみ出す。		地区	~
	-	= /2	775 to 1, 20 2 or to 10 10 to 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10	□緑如性かず1 母エ門で□	+	
	91	□径 14.2			色調	
			口縁端部は丸くおわる。	施し、体部内外面に刷毛目施	1	
5				す。	残部	
					地区	
	92	口径 13.	1 頸部よりくの字状に外反し			
			口縁端部をつまんで、丸くお			精良 焼成 硬
			The state of the s	I was a series of the t	1 KB 017	1/7
			わる。	げし、内面刷毛目施す。	人残部	
			わる。	げし、内面刷毛目施す。 口縁部横なでし、外面口縁	地区	第8ブロック 淡茶灰色

		T						
				口縁端部は上方に尖り気味に	部まで叩きを施し、体部外面刷	胎土	精良 焼成	硬
				おわる。	毛目、内面刷毛目、下方なで	残部	1/3	
					仕上げする。	地区	第1ブロック	
	94	口径 13.	0	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なでし、体部内外	色調	淡茶灰色	
		器高 13.	2	口縁部は内弯気味に端部は尖	面刷毛目施す。	胎土	精良 焼成	硬
		底径 4.	8	る。体部は中位が張り、平底	底部裏面に板状具による調	残部	ほぼ完形	
				の底部をもつ。	整痕あり。	地区	第2ブロック	
	95	口径		頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なでし、外面刷毛	色調	淡褐灰色 (95)	
	•	95、14.	2	内面に弱い段をもち、口縁端	目施し(95)、体部外面刷毛		淡茶褐色 (96)	
	96	96、11。	4	部は方形状におわる(95・96	目で、95は下方摩滅、内面は	胎土	精良 焼成	硬
) 。	なで仕上げであり、指圧痕(残部	1/3 (95) 、1/	/ 5
				体部は丸味をもつ。	95) ・刷毛目痕(96)あり。		(96)	
						地区	第3ブロック(9	95)
							_第4ブロック(9	96)
鉢	97	口径 14.	9	頸部より外反して、屈曲部	口縁部横なで、体部内外面	色調	茶灰色	
		器高 8.	7	をもち、口縁端部は方形状に	刷毛目、なで仕上げする。	胎土	精良 焼成 荷	硬
		底径 3.	8	おわる。体部は扁平気味で、	屈曲部、頸部に櫛状具によ	残部	ほぼ完形	
				平底の底部をもつ。	る刺突列点文・直線文施す。	地区	第2ブロック	
	98	口径		頸部よりくの字状に外反し、	口縁部横なでし、内面刷毛	色調	淡黄褐色 (98・9	99)
	•	98、13.	2	屈曲部をもち、そのまま内上	目痕あり、体部内外面刷毛目	胎土	精良 焼成 荷	硬
	99	99、14.	0	方にのび、口縁端部は丸くお	施す。屈曲部・頸部外面に櫛	残部	1/6 (98) 、1/	5
				わる。体部は丸味をもつ。	状具による刺突列点・直線文		(99)	
					施す。	地区	第10ブロック(9	98)
							第8ブロック(9	99)
	100	口径 15.	8	頸部より外反して、屈曲部	口縁部横なでし、体部内外	色調	淡褐灰色	
				をもち、口縁端部を外方につ	面に刷毛目施す。	胎土	精良 焼成 荷	硬
				まみ上げ丸くおわる。		残部	1/5	
				体部は扁平気味である。		地区	第3ブロック	
	101	口径 19.	0	頸部より外反して、屈曲部	口縁部横なでし、内面に刷	色調	淡黄褐色	
				をもち、口縁端部は方形状に	毛目痕あり、体部内外面刷毛	胎土	精良 焼成 桶	硬
				おわる。体部は扁平気味であ	目施す。屈曲部に櫛状具によ	残部	1/6	
				る。	る刺突列点文施す。	地区	第3ブロック	
	102	口径 15.	4	頸部よりくの字状に外反し、	口縁部内外面横方向の箆磨	色調	淡褐灰色	
				内面に段をもち、そのまま上	き施す。口縁部外面に擬凹線	胎土	精良 焼成 研	硬
				方にのび、口縁端部は方形状	施す。	残部	1/6	
				におわる。		地区	第3ブロック	
	103	口径 30.	8	頸部より外反して弱い段を	口縁部内外面横なで、内面	色調	茶灰色	
				もち、口縁端部は丸くおわり、	刷毛目痕あり、体部外面横方	胎土	精良 焼成 研	硬
				外方に水平状に折れ曲がる片	向・内面縦方向の箆磨きで、	残部	1/7	
				口をもつ。	内面刷毛目痕あり。	地区	第7ブロック	
	104	口径 10.	4	頸部よりくの字状に内弯気	口縁部横なで、体部外面横	色調	淡赤褐色	
		器高 8.	2	味にのび、口縁端部は方形状	方向の箆磨き、内面左上がり	胎土	精良 焼成 研	硬
		底径 5.	2	におわる。体部は丸味をもち、	の箆削り施し、脚台部横なで	残部	1/2	
				脚台をもつ。	する。	地区	第2ブロック	
	105	口径 9.	6	平底の底部より外反気味に	内外面、摩滅にて不明。	色調	淡茶灰色	
		器高 5.	7	外上方にのび、口縁端部は丸		胎土	精良 焼成 碌	硬
		底径 3.	6	くおわる。		残部	1/2	
		Alle V				地区	第3ブロック	
底 部	106			上げ底の底部で、体部は内	内外面刷毛目、底部裏面な	色調	茶灰色	
				弯気味にのびる。	で仕上げする。	胎土	精良 焼成 砥	硬
		底径 4.	2			残部	2/3	
						Lete 15-2	tete 4 × 1-	
						地区	第4ブロック	

		は内弯する。	刷毛目痕あり。	胎土	精良 焼成 硬
	底径 4.8			残部	1/2
	724 121			地区	第7ブロック
108		平底の底部で、外上方にの	外面刷毛目であり、内面摩		赤褐色(108 · 110)
100		びる(108・109)、内弯気	滅(108)、なで仕上げする		淡黄灰色(109)
110	底径	味に上方にのびる。(110)	(109 · 110)。	胎土	精良 焼成 硬
110	108, 2 . 8	- 外に上力にめ ひる。(110)	(109 - 110) 8		1/2 (108)
				772, cip	完存 (109・110)
	109, 3 . 4			## [2]	第9ブロック(108)
	110, 3 . 0			地区	第 7 ブロック (109)
					第 2 ブロック (110)
111		即庁の庁が示すり、庁がお	(111) 是比如由从无刚毛	A≡⊞	淡黄灰色 (111)
111		四底の底部であり、底部が	(111)は体部内外面刷毛	巴调	
117	F-47	突出気味 (111)、やや丸味	目施し、底部裏面なで仕上げ		茶灰色(117)
117	底径	(117・119) をもたせるよ	する。(117)は外面摩滅す	11.45 1	淡赤褐色 (119)
•	111、4 . 5	うにおわる。	るが、内面刷毛目施す。		精良 焼成 硬
119	117, 3 . 5	体部は外上方にのびる。	(119)は体部外面刷毛目	残部	完存(111)
	119, 4.2		・下方なで仕上げし、内面刷		2/3 (117)
			毛目・下方板状具による器面	Luc Ex	1/2 (119)
			問整施す。	地区	第9ブロック(111)
					第5ブロック(117)
			(440) 11 (4 7 7 7 7 7	An Orm	第8ブロック(119)
112		上げ底の底部であり、体部	(112)は外面刷毛目、内	色調	淡茶灰色 (112・
\ \		は外上方にのびる。	面スス付着で不明。(113)		114 • 120 • 125)
114	底径		は外面刷毛目、内面板状具に		茶灰色(113)
•	112, 4 . 4		よる器面調整施す。(114)		淡赤橙色 (118)
118	113、4 . 6		は外面刷毛目・なで仕上げ、		灰白色(126)
•	114、4 . 9		内面板状具による器面調整施		精良 焼成 硬
120	118, 4, 4		す。(118)は内外面刷毛目	残部	1/2 (112 • 126)
•	120, 5.0		施す。(120)は内外面粗い		2/3 (113 • 120 •
125	125, 4.0		刷毛目施し、外面なで仕上げ		125)
•	126, 5 . 2		する。(125)は内外面刷毛		完存(114・118)
126			目施し、内面上方左上がりの	地区	第2ブロック
			箆削り施す。(126)は内外		(112•125)
		A Company of the Comp	面刷毛目施し、なで仕上げす		第4ブロック
		ı	3.		(113 • 114)
		\(\frac{1}{2}\)			第8ブロック(118)
		, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,			第3ブロック(120)
					第5ブロック(126)
115	4	凹底の底部であり、体部は	外面箆磨き施し、内面刷毛	1	茶灰色
		外上方にのびる。	目施す。	胎土	
	底径 3.8			残部	完存
				地区	第6ブロック
116		上げ底気味の底部で、やや	内外面刷毛目施し、外面下	色調	淡茶灰色
		突出し、体部は外上方にのび	方なで仕上げする。	胎土	精良 焼成 硬
	底径 4.2	る。		残部	2/3
		***************************************			第9ブロック
121		(121) は、上げ底の底部	(121)は、内外面刷毛目	色調	淡黒灰色(121)
•		であり、体部は外上方にのび	を施す。(127)は、外面な		淡灰白色(127)
127	底径	る。(127)は、裏面に窪みを	で仕上げ、内面刷毛目施す。	胎土	精良 焼成 硬
	121, 2 . 8	もつが丸味をもち、体部は外		残部	2/3 (121)
	127, 1 . 7	上方にのびる。			完存 (127)
				地区	第 4 ブロック (121)
1	i .	i	İ	1	第2ブロック(127)

r	1	1		1	1	
	122		平底の底部であり、体部は		色調	淡灰白色(122)
	•	4.72	外上方にのびる。	し、底部裏面に板状具による		茶灰色(128)
	128	底径		調整痕あり。(128)は内外		精良 焼成 硬
		122, 3, 6		面刷毛目施し、内面上方なで	残部	
		128, 4, 2		仕上げ・指圧痕あり。	地区	第2ブロック(122)
	100					第8ブロック (128)
	123		裏面に小さな窪みをもち、体		色調	淡茶灰色
		±	部は外上方にのびる。	内面なで仕上げで平滑に仕上	胎土	精良 焼成 硬
		底径 2.0		げる。	残部	完存
	101				地区	第8ブロック
	124		上げ底気味の平底で、体部	内外面刷毛目を施す。 	色調	茶灰色
			は外上方にのび、内面に窪み		胎土	精良 焼成 硬
		底径 3.8	をもつ。 		残部	完存
	100				地区	第6ブロック
	129		底部には、上げ底気味(129		色調	褐灰色(129)
	105		・130・131)、裏面窪みをもつ			黒灰色(130)
	135	底径	(132)、平底(133~135)			黄灰色(131)
		129, 4 . 7	があり、体部は外上方にのび	右上がりの叩き、内面なで仕		淡茶灰色(132)
		130、4 . 2	る。	上げする。(131~133)は		淡赤褐色(133)
		131、3 . 9	·	外面右上がりの叩き、内面刷		淡褐灰色(134)
		132, 2 . 9		毛目施す。(134・135)は		茶灰色(135)
		133、3 . 0		外面右上がりの叩き、内面板	胎土	精良 焼成 硬
		134、4 . 0		状具による器面調整施す。	残部	1/2 (129 • 130)
		135, 3 . 3				完存(131・133)
						2/3 (132 • 134 •
						135)
					地区	
						(129 • 132)
						第8ブロック
			, &			(130 • 134)
			×			第6ブロック
						(131 • 133)
#E	100	□4▼ 1F 0	正序の片如子 仏如りとも変	ATOTO THE -U.	A 500	第2ブロック(135)
甑	136	口径 15.2	平底の底部で、体部は内弯	外面刷毛目・下方なで仕上		
		器高 10.9	気味に外上方にのび、口縁端	げし、内面刷毛目施す。底部	胎土	精良 焼成 硬
		底径 4.8	部は方形状におわる。	に一孔をもつ。口縁端部刷毛	残部	1/2
	137		平底の底部をもち、体部は	状具により面取り施す。	地区	
	137		十成の底部をもら、体部は 外上方にのびる。	(137)は外面刷毛目、内面なで仕上げ・下方に刷毛目	色調	淡赤褐色 (127 - 141)
	144	底径	底部の不定形気味(140・			(137・141)
	1.44	137, 4 . 6	144) がある。	痕あり。(138 ・ 142 ・ 144)は外面なで仕上げ、内面刷		黄灰色(138 • 143)
		138. 4 . 8	144 / 2000 00	毛目施す。(139・143)は		淡褐灰色 (120 - 144)
		139, 4 . 3		七日記9。(139 · 143)は 内外面刷毛目施す。(140)		(139・144) 赤褐色(140)
		140, 5 . 0		は内外面摩滅するが内面に刷		
		140, 3 . 0		毛目痕あり。(141)は外面	胎土	淡茶灰色 (142) 精良 焼成 硬
		142, 4 . 0		では成めり。 (1417 は外面 摩滅し、内面板状具による器	加工 残部	相及
		143, 4 . 2		声級し、円面似仏共による話 面調整で平滑である。	ルロ	144)
		144、3 . 9		画調金で平角である。 底部には焼成前の一孔をも		完存
		111, 0 , 0		つ(137~144)。		(138 • 141 • 142)
				- \101 177 0		2/3 (140 • 143)
					₩区	第 2 ブロック (137)
					~u	第7ブロック(138)
						第6ブロック
	1					32 U J L J J

		1				(100 110 110)
				9		(139 • 140 • 143)
						第9ブロック
						(141 • 144)
						第1ブロック(142)
脚台部	145		脚台部であり、外反気味に	脚部内外面横なでし、底部	色調	赤褐色
			外下方にのび、脚端部は丸く	内面板状具による器面調整施	胎土	精良 焼成 硬
		底径 8.0	おわる。	す。	残部	1/2
	~				地区	第7ブロック
	146		台付甕の脚台部であり、外	(146)は内外面に刷毛目	色調	淡茶灰色
	≀		下方にのび端部が方形状にお	を施し、(147)は内外面構		(146 • 147)
	148	底径	わる(146)、内弯気味に外	なでで、外面に弱い指圧痕あ		淡褐灰色(148)
		146, 6 . 9	下方にのび端部は方形状にお	り、(148) は内外面なで仕	胎土	
		147、6 . 6	わる(147)、外下方にのび	上げで、外面に刷毛目施す。	残部	完存(146~148)
		148、5 . 6	端部は丸くおわる(148)。		地区	第 5 ブロック(146)
						第1ブロック(147)
						第 6 ブロック (148)
	149		脚台部であり、外下方にの	(149) は内外面横なで、	色調	
	≀		び、脚端部を丸くおわる(149)			淡赤 褐色(150)
	153	底径	、外反気味に外下方にのび脚	剝落の痕跡がある。(150)		淡茶灰色(151)
		149.6.0	端部は丸くおわる(150 ・	は内外面なで仕上げで、外面		赤褐色(152)
		150. 8 . 2	152)、外反気味に下方にの	に刷毛目痕あり、脚部内面刷		灰褐色(153)
		151, 5, 4	び脚端部を方形状におわる(毛目施す。(151)は内外面	胎土	精良 焼成 硬
		152, 7 . 4	151)、外下方に外反し脚端	なで仕上げで、外面箆状具に	残部	完存(149・152)
		153, 5 . 5	部が尖り気味におわる(153)。 	よる調整痕あり、内面板状具		1/3 (150 • 153)
				による調整痕・刷毛目施す。		1/2 (151)
				(152)は内外面なで仕上げ	地区	第 4 ブロック (149)
				で外面に板状具による調整痕		第3ブロック
				・内面刷毛目施す。(153)		(150 · 153)
				は内外面なで仕上げで、外面 に刷毛目施し、指圧痕あり。		第7ブロック
高 坏	154	口径		口縁部内外面縦方向の篦磨	色調	(151 · 152) 淡赤褐色
10 %	104		は外反気味に外上方にのび、	き施す(154・155)。内外		(154 ~ 156)
	156	155, 22 • 0	口縁端部は丸くおわる(154)	面横なでし、外面に波状の箆	胎土	精追 焼成 硬
	100		方形状におわる(155・156)。		残部	
		100, 20 , 2	7570 ((1-454) 8 (166 166)	7. C. N. E. Y. (100 / C.	200	1/3 (155)
						1/10(156)
			,		地区	第9ブロック(154)
						第6ブロック(155)
						第8ブロック(156)
	157	口径	坏底部より屈曲し、口縁部	内外面に縦方向の箆磨きを	色調	淡茶褐色
	}	157, 25 . 4	は外上方に外反し、口縁端部	施し(157~159)、内面		(157 • 160)
	160	158, 21.0	は方形状におわる。	横方向の箆磨きを施す(158		赤褐色(158・159)
		159、21 . 8	(157 ~ 160))。内外面横なでし、屈曲部	胎土	精良 焼成 硬
		160, 22.0		外面に箆状具による刺突文施	残部	1/7 (157)
				す(160)。		1/6 (159)
						1/10 (158 • 160)
					地区	第10ブロック(157)
						第8ブロック (158)
						第4ブロック
						(159 • 160)
	161	口径 23.2	外反する口縁部で端部は方		色調	茶灰色
		器高 13.8	形状におわる。脚部は柱状部	向の箆磨き施す。脚部外面縦	胎土	精良 焼成 硬
		底径 14.2	より屈曲して、裾部端部は方	方向の箆磨き、内面なで仕上	残部	1/2
	L		1			

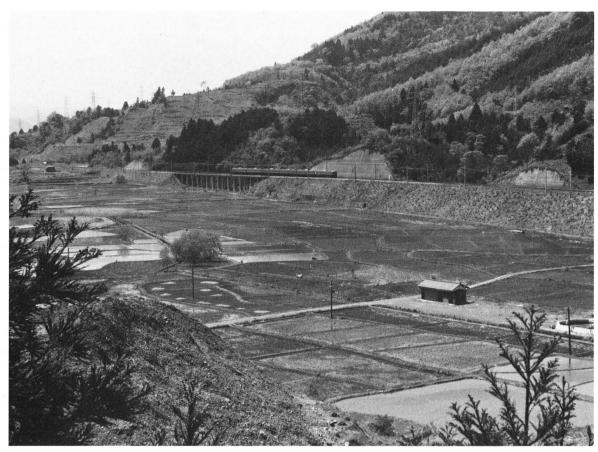
		形状におわる。	げする。円孔は4方にもつ。	地区	第5ブロック
162	口径 18.3	外反気味の口縁部で端部は	坏部内外面縦方向の箆磨き	色調	赤褐色
	器高 14.2	方形状で、脚部は柱状部より	施し、脚部外面縦方向の篦磨	胎土	精良 焼成 硬
	底径 14.3	屈曲して、裾部端部は方形状	き、内面なで仕上げする。	残部	ほぼ完形
		におわる。	円孔は三方にもつ。	地区	第2ブロック
163	口径 20.8	外反する口縁部で端部は方	坏部内外面縦方向の箆磨き	色調	淡赤褐色
	器高 18.1	形状で、脚部は柱状部より屈	施し、脚部中実で外面縦方向	胎土	精良 焼成 硬
	底径 15.6	曲して外下方にのび、裾端部	の篦磨き、内面なで仕上げす	残部	完形
		は方形状におわる。	る。円孔は三方にもつ。	地区	第2ブロック
164	口径	坏底部より外上方にのびる	口縁部内外面横なで、縦方	色調	赤褐色
	164, 25 . 8	口縁部で、端部は尖り気味に	向の箆磨き施す。屈曲部外面		(164 • 165)
165	165、13 . 4	おわる。屈曲部外面に下方に	に櫛状具による刺突列点文施	胎土	精良 焼成 硬
		突出する。	す(164)。	残部	1/10 (164)
					1/7 (165)
				地区	第1ブロック
166		脚部であり、下方にのびる	(166・168・169) は外		淡茶橙色 (166)
≀		柱状部より屈曲気味に外下方	面縦方向の篦磨き、内面にし		赤褐色
169	底径	に外反し、裾部端部は方形状	ぼり目・なで仕上げ・刷毛目		(167 ~ 169)
	166、14.0	におわる。(166~169)	施す。(167)は外面縦方向	胎土	精良 焼成 硬
	167、14 . 4		の箆磨き、内面しぼり目・横	残部	1/3 (166)
	168, 15 . 4		なでする。(166)は裾部端		1/2 (167~169)
	169、14.4		部に沈線を施す。円孔は三方	地区	第2ブロック(166)
			にもつ(166~169)。		第1ブロック
					(167 ~ 169)
170	口径 14.2	外反気味の口縁部で端部は	坏部内外面横なで、縦方向	色調	茶灰色
	器高 10.5	丸くおわり、脚部は外下方に	の箆磨き施し、外面刷毛目痕	胎土	精良 焼成 硬
	底径 10.1	外反し、裾部端部は方形状に	あり、脚部内外面なで仕上げ	残部	完形
		おわる。	で、内面しぼり目痕もつ。	地区	第2ブロック
171	口径	内弯気味に外上方にのび口	(171・172)は内外面縦	色調	淡茶灰色
1	171、15.0	縁端部内側に面をもつ(171	方向の箆磨き施し、(171)		(171 • 173)
173	172, 15.4	・ 172)、丸くおわる(173)	は口縁端部に櫛状具による直		淡黄橙色(172)
	173、19.6		線文施す。(173)は外面縦	胎土	精良 焼成 硬
			方向の箆磨き、刷毛目痕あり。	残部	1/8 (171)
		,			1/6 (172)
					1/4 (173)
				地区	第2ブロック
					(171 • 173)
1/7.1		Dan dary was the like the state of the state		—	第2ブロック(172)
174	4	脚部であり、内弯気味に外	外面縦方向の篦磨き、内面	色調	赤褐色
	庁仅 1/ ↑	下方にのび、脚端部は方形状		胎土	精良 焼成 硬
	底径 14.0	におわる。	具による器面調整・横なでで	残部	完存
175			刷毛目痕あり。 (175~176)は外面縦方	地区	第2ブロック
175		内島気味に外下方にのひる 裾部であり、端部は方形状に	(175~176) は外国縦万 向の 箆 磨きで、内面刷毛目(色調	黄褐色
177	底径	おわる。			(175 · 176) ※匠白色(177)
111	底径 175、12.0	4U4160	175)、横なで(176)、板 状具による器面整・刷毛目(₽ <u>₩</u> _1.	淡灰白色(177)
	175, 12. 0			胎土	精良 焼成 硬 1/8(175)
	170, 12.0		177 施9。外国に個队員に よる直線文・(176)は刺突列	残部	1/8 (175) 1/10 (176)
	111/19 0		点文施す。円孔は不明。		1/7 (177)
			杰入旭 y o 口Tura 小奶o	₩□	第3ブロック
				Æ스	第3プロック (175~177)
178		柱状部より屈曲して、裾部		色調	淡黄橙色
110		は外下方にのび、端部は方形	受部刷毛目、脚部なで仕上げ	胎土	精良 焼成 硬
		CONTRACTOR AND CONTRACTOR	V H5 W42 C IT T 1)	/1111 ⊥_	115以 灰烬 饭

<u> </u>					ar N. dara	- /-
		底径 14.4	状におわる。	で平滑である。円孔は三方に	残部	1/4
				もつ。		第2ブロック
	179	口径 10.0	内弯気味に内上方にのびる	口縁部内外面横なでし、下	色調	淡灰茶色
			口縁部で、端部は方形状にお	方刷毛目施す。	胎土	精良 焼成 硬
			わる。		残部	1/6
					地区	第1ブロック
	180		内弯気味に外上方にのびる	外面縦方向の箆磨き、内面	色調	淡茶灰色
			体部、脚部は下方にのびる柱	体部なで仕上げ、脚部しぼり	胎土	精良 焼成 硬
		底径 12。0	状部に外反する裾部をもち、	目残し、下方刷毛目・横なで	残部	ほぼ完存
			端部は丸くおわる。	する。円孔は四方にもつ。	地区	第3ブロック
	181		脚部であり、外反しながら	(181・182)は外面縦方	色調	赤褐色(181)
	•		外下方にのび、裾部端部は方	向の箆磨き、内面(181)は		茶灰色(182)
	182	底径	形状におわる(181)・丸く	磨滅するが刷毛目痕あり、(胎土	精良 焼成 硬
		181、15。6	おわる(182)。	182)はなで仕上げ、下方箆	残部	1/3 (181)
		182, 12 . 6		 削り施す。円孔は三方にもつ		1/4 (182)
		,		(182)。	地区	第5ブロック(181)
						第2ブロック(182)
	183		脚部であり、外下方に外反	外面縦方向の箆磨き、内面	色調	赤褐色
	100		気味にのび、脚端部は方形状	底部刷毛目施し、脚部なで仕	胎土	精良 焼成 硬
		底径 13。2	におわる。	上げで刷毛目痕あり。円孔は	残部	完存
			1~4047公0	工りで制造した。 「別しは 四方にもつ。		第1ブロック
	104		脚部であり、外下方に外反	外面縦方向の篦磨き施し、	色調	灰白色
	184			刷毛目痕あり、内面しばり目	胎土	精良 焼成 硬
			しながらのび、脚端部は丸く			完存
		底径 7.7	おわる。	を残し、下方なで仕上げを施	残部	,
				to the to a tree be	地区	第4ブロック
器台	185	口径 20.2	受部は直線的にのび、口縁	内外面縦・横方向の箆磨き	色調	灰白色
		器高 14.0	部を垂下し、端部は丸くおわ	施し、内面なで仕上げ・刷毛	胎土	精良 焼成 硬
		底径 18.8	る。脚部は外反し、脚端部上	目施す。円孔は三方にもつ。	残部	1/2
			端をつまみ上げる。		地区	第2ブロック
	186	口径 17.6	受部は外反し、口縁部を垂		色調	赤褐色
		器高 11.1	下し、端部は方形状におわる。		胎土	精良 焼成 硬
		底径 15.6	脚部は外反気味にのび、脚端	縁部に円形浮文、裾部外面に	残部	1/2
			部は丸くおわる。	沈線を施す。円孔は三方。		第2ブロック
	187	口径	外反気味に外上方にのびる	内外面横なで・縦方向の箆	色調	茶灰色(187)
	₹	187、18.6	(187・188)、直線的にの	磨きを施し、外面刷毛目痕(淡黄橙色(188)
	192	188, 15 . 4	び(189~192)、口縁部を	190) あり。外面に櫛状具に		黄橙色(189)
		189, 20 . 8	垂下し、端部を方形状におわ	よる直線文施す(188・189		淡褐灰色(190)
		190, 19.8	る(187・191・192)、丸	・ 191 ・ 192)、竹管文もつ		淡灰茶色(191)
		191、19 . 4	くおわる(188~190)。	円形浮文を施す(187・189		茶褐色(192)
		192, 20.0		・ 190 ・ 192)、竹管文を施	胎土	精良 焼成 硬
				す(188)がある。	残部	1/6 (187)
						1/8 (188)
						1/20 (189)
						1/4 (190)
						1/10(191 • 192)
					地区	
						第4ブロック
						(188 • 192)
						第7ブロック
						(189 • 191)
						第6ブロック(190)
	1200		A 1 + 1 = = = 10 = 10 + 10 + 1	カタを持っていっている	<i>4</i> 2. ≨⊞	
	193	□径 18.0	外上方にのびる口縁部をも	内外面横なでし、内面に縦		淡茶橙色 梅成 碩
			ち、端部を上・下方に突出し	方向の箆磨き施す。	胎土	精良 焼成 硬

		丸くおわる。	外面に竹管文施す。	残部	1/10
		7.5 (40 42 50 6	/「四に川自久心り。	地区	1/10 第 5 ブロック
194	口径 17.0	外上方にのびる口縁部をも	外面刷毛目、内面横なです	色調	
101	LE 11.0	ち、端部は方形状におわる。	る。外面に擬凹線、内面に櫛	胎土	茶灰色 精良 焼成 硬
		2 Ch (th (th 2) 1) 0 (th (th 1) 10 0	状具による波状文施す。外面	残部	精良 焼成 硬 1∠10
			に棒状浮文もつ。	地区	1/10 第6ブロック
195	口径 19.0	外上方にのびる口縁部をも	内外面横なで、縦方向の篦	色調	
100	LE 10.0	ち、端部は垂下し尖り気味に	磨きで、外面刷毛目痕あり。	胎土	赤褐色
		おわる。	外面に櫛状具による波状文	残部	精良 焼成 硬 1/8
		10.12.00	・3個一組の棒状浮文施す。	地区	, -
196	口径 17.8	受部は外上方にのび、口縁	内外面横なで、縦方向の箆	色調	赤褐色
		端部は上・下方に突出する。	磨き、柱状部内面なで仕上げ	胎土	精良 焼成 硬
		脚部柱状部は下方にのびる。	する。口縁部外面櫛状具によ	残部	1/2
		1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	る直線文施す。円孔は三方。	地区	•
197		柱状部より裾部は外反しな	(197) は内外面刷毛目・		第1ブロック
•		がら下方にのび、裾部端部は	縦方向の篦磨き、内面しぼり	色調	淡赤褐色
198	底径	方形状におわる。	目・なで仕上げする。(198)	R4s I	淡茶灰色
100	197, 16 . 5	777/2015 40 47 30	は内外面縦方向の篦磨き、脚	胎土	
	198, 16 . 4		部内面なで仕上げする。円孔	残部	2/3 (197 • 198)
	150, 10 . 4		は三方にもつ。	地区	第3ブロック(197)
199		外上方にのびる受部で、脚	内外面縦・横方向の箆磨き	左 部	第2ブロック(198)
100		部は外下方に外反しながらの		色調	茶灰色
	底径 14.4	び、裾部端部は方形状におわ	施し、内面なで仕上げし刷毛	胎土	精良 焼成 硬
	及庄 14.4	る。	目痕もつ。	残部	1/2
200	口径 17.0	外上方にのびる受部で、口	 内外面、縦方向の箆磨き施	地区	第1ブロック
200	器高 12.7	縁端部上・下端を突出する。	し、脚部内面なで仕上げ・構	色調	淡黄灰色
	底径 13.8	脚部は外下方にのび、端部は	なでする。脚部外面に櫛描文	胎土	精良 焼成 硬
	AGE 10.0	方形状におわる。	施す。円孔は四方にもつ。	残部地区	1/2
201	口径 16.3	受部は外上方にのび、端部	内外面縦方向の箆磨きで、	色調	第2ブロック 淡赤褐色
	器高 16.6	は方形状におわる。脚部は外	内面になで仕上げ・刷毛目施		精良 焼成 硬
	底径 15.6	下方にのび端部は方形状にお	す。円孔は三方にもつ。	残部	
	/24/III 10 1 0	わる。)		第3ブロック
202	口径 16.6	外上方にのびる受部で、口	内外面横なで・縦方向の箆		
		縁部を外方に垂下し、端部は			精良 焼成 硬
		方形状におわる。	施す。内面にススの付着痕あ	残部	
		7570 001-45 45 80	り。		第4ブロック
203	口径 21.2	外上方にのびる受部で、口	内外面横なで、縦方向の篦		淡灰褐色
		縁端部が上・下方にのびて、	磨き施す。口縁部外面に擬凹		精良 焼成 硬
	Sec.	端部は丸くおわる。	線施す。	残部	
					第7ブロック
204	口径	浅い受部で、内弯気味に外	(204)は内外面横なでを		淡黄橙色
	204、9.0	上方にのび、端部は丸くおわ	施し、外面に櫛状具による直	C #/#)	(204 • 205)
205	205, 8 . 4		線文を施す。(205)は内外	胎土	
		(205)。	面摩滅する。		完存 (204)
			7,7,000	Mup.	1/4 (205)
				地区	第6ブロック
				حس ب	(204 • 205)
206	口径	内弯気味で外上方にのびる	(206) は内外面横なです	色調	赤褐色(206)
	206, 9.4	· · · · ·	る。(207)は内外面縦方向	니바비	淡褐灰色 (207)
207	底径	る (206)・。脚部は内弯気味		胎士	精良 焼成 硬
	207, 10 . 8	に外下方にのび、端部は方形	げ・板状具による器面調整・	7	2/3(206)
		状におわる。(207)	刷毛目施す。円孔は三方にも	MIN	完存 (207)
			つ (206 · 207)。	地区	第3ブロック(206)
			- (200 201) 0	15 K	32 3 7 L 7 7 (200)

							第2ブロック(207)
蓋	208	口径	5.5	内弯気味に外上方にのびる	内外面横なでし、脚部内面	色調	淡赤褐色
				受部で、端部は丸くおわる。	に刷毛目施す。	胎土	精良 焼成 硬
						残部	完存
						地区	第1ブロック
	209	口径	6 . 1	低い円盤状をなし、中央に	手捏ね様であり、内外面な	色調	赤橙色
		器高	1.5	摘みをもつ。	で仕上げ・指圧痕あり。	胎土	精良 焼成 硬
					2個一組の円孔を二方にも	残部	ほぼ完形
				,	つ。	地区	第2ブロック
	210			上部の摘みの部分で、天井	(210)は内外面なで仕上	色調	淡赤褐色(210)
	211			部は平坦であり、外下方にの	げする。(211)は上部なで		淡黄褐色(211)
				びる。	仕上げし、外面刷毛目、内面	胎土	精良 焼成 硬
					なで仕上げ・刷毛目施す。	残部	完存(210・211)
						地区	第3ブロック
							(210 • 211)
ミニチ	212		3.6	頸部よりくの字状に上方に			赤褐色
ュア		器高	5.4	のび、口縁端部は丸くおわる。		胎土	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,
		底径	2.2	体部は細長く、平底の底部を	2 カ所もつ。	残部	完形
				もつ。			第2ブロック
	213	口径	5 . 2	頸部よりくの字状に外反し、	手捏ねで仕上げ、体部外面	色調	
				口縁端部は丸味をもっておわ	刷毛目施す。体部外面に櫛状	胎土	精良 焼成 硬
				る。体部は細長く下方にのび	具による直線文・刺突列点文	残部	1/2
	01.4		1 0	3. TE - E - E - E - E - E - E - E - E - E	施す。		第8ブロック
	214		4 . 8	平底の底部より、内弯気味	手捏ねで仕上げ、体部外面	色調	-
		器高	3 . 6	に上方にのび、口縁端部に面	縦方向の箆磨き施す。	胎土	精良 焼成 硬
		底径	3.4	をもたせておわる。		残部	1/2
	215			平広の広がより 中変与叶	工程10元(1.1.1) 中加工亚	地区	
	215			平底の底部より、内弯気味 に外上方にのびる(215)、	手捏ねで仕上げ、内外面平 滑である (215 ~ 217)。	色調	
	217	底径		上方にのびる(216・217)	何じのな(213~217)。		淡黄灰色 (216) 茶灰色 (217)
	211		. 1 . 9	がある。		胎土	
			. 3 . 4	N-100-20 0		残部	完存 (215~217)
			. 4 . 2			/	第 9 ブロック (215)
		211	· · · · · ·			125	第 4 ブロック (216)
				:			第8ブロック(217)
						L	20 7 L 7 7 (211)

図 版



遺跡全景(北東より)



遺跡全景 (北東より海津を望む)

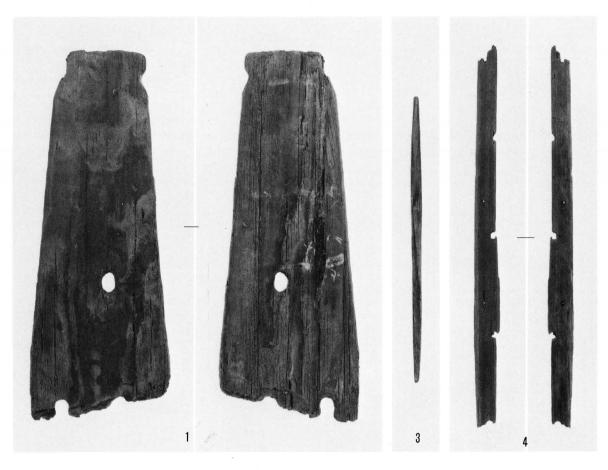


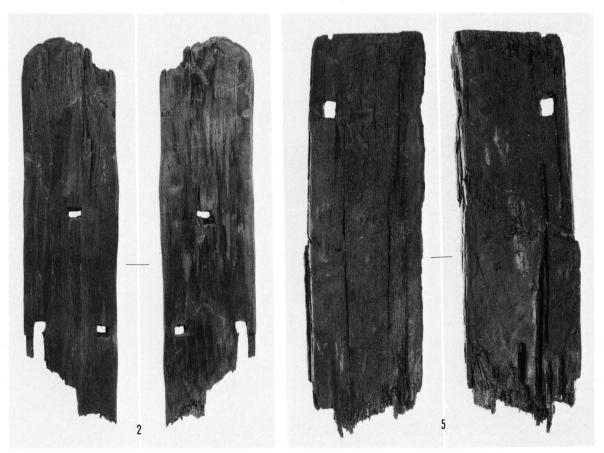
Cトレンチ南壁面



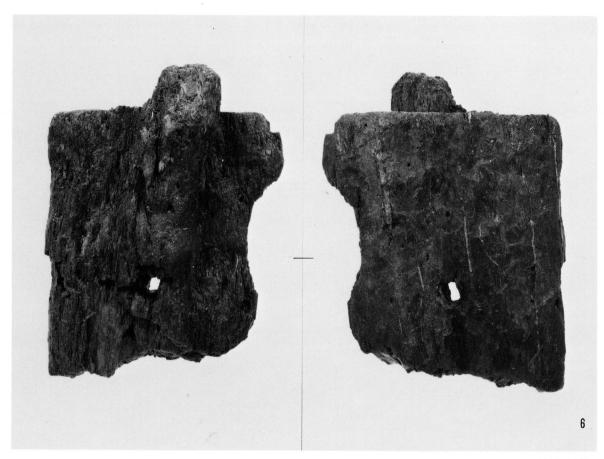
トレンチ樹木出土状況

図版三 マキノ町海津遺跡

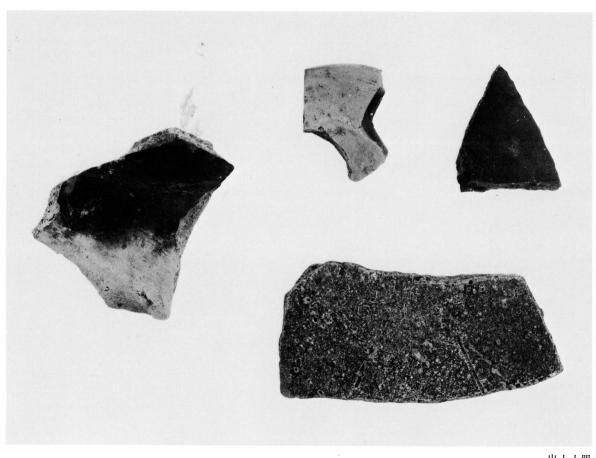




出土木製品(1~5)



出土木製品



出土土器



遺跡全景(北より)



第20トレンチ調査状況



第16トレンチ全景(西より)



第41トレンチ・焼土拡(南西より)



第21トレンチ全景 (東より)



第21トレンチ・土坑2~4 (北より)



第21トレンチ・土坑1 (北東より)



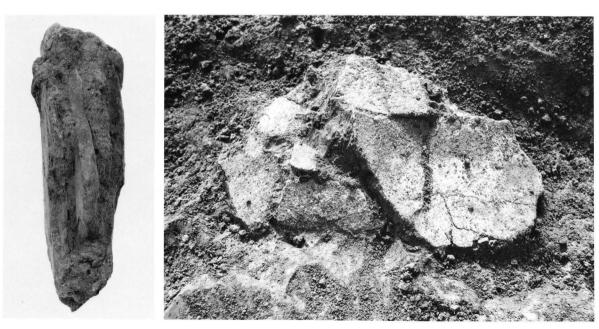
第40トレンチ全景 (西より)



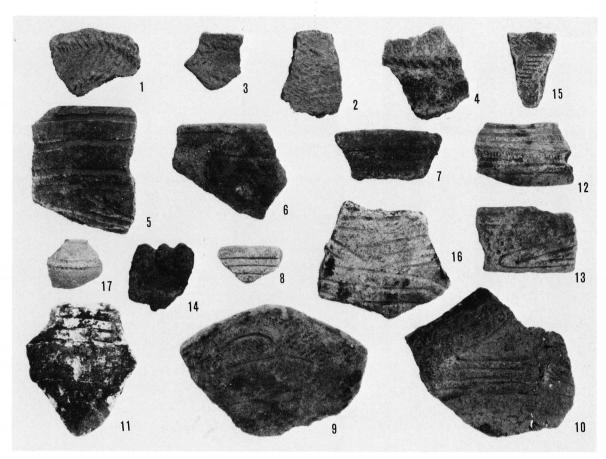
第21トレンチ南東部全景(東より)



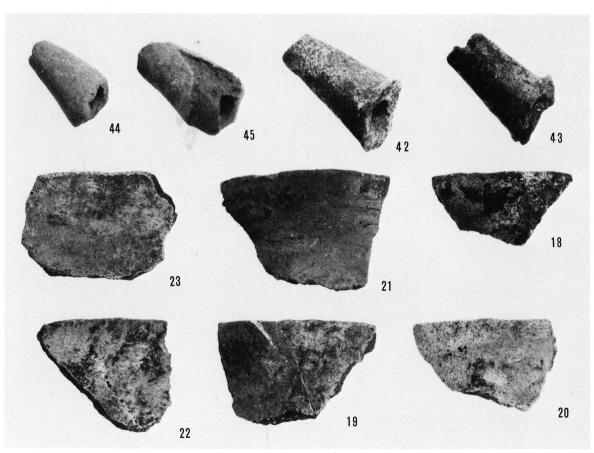
第20トレンチ下層堆積状況



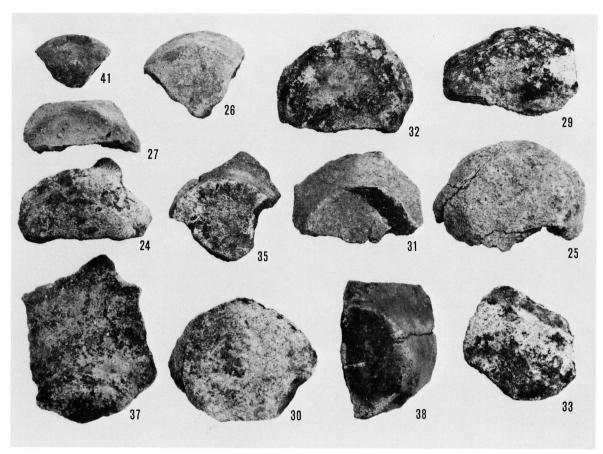
(左)第20トレンチ打製石斧出土状況 (右)第20トレンチ縄文式土器出土状況



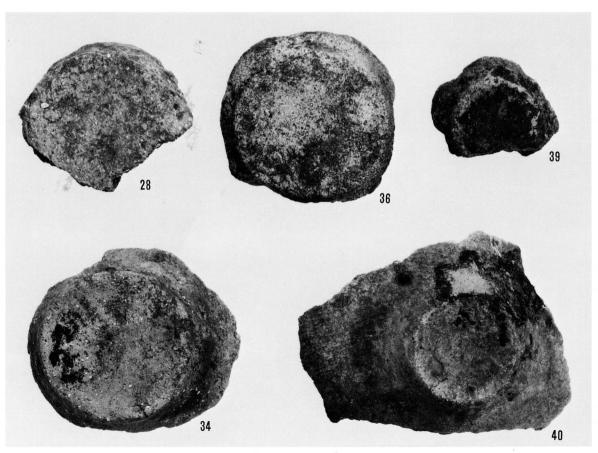
1. 第20トレンチ出土・縄文式土器



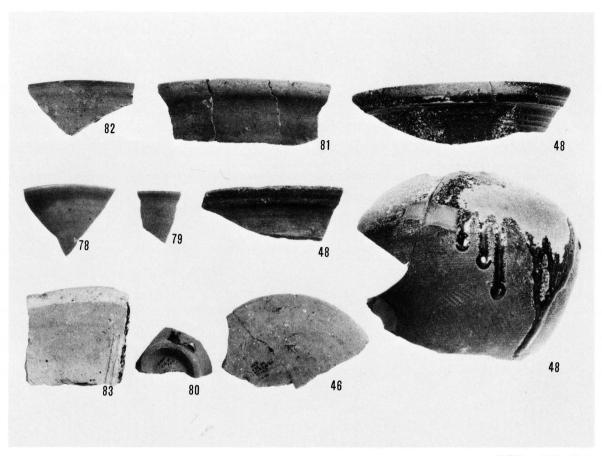
2. 第20トレンチ出土・縄文式土器



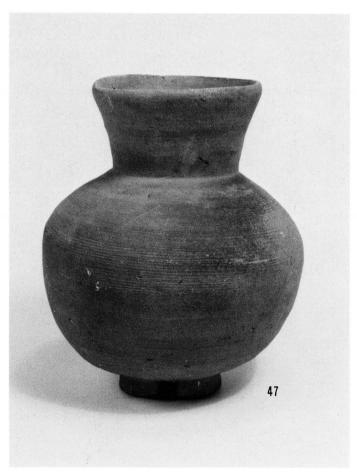
3. 第20トレンチ出土・縄文式土器



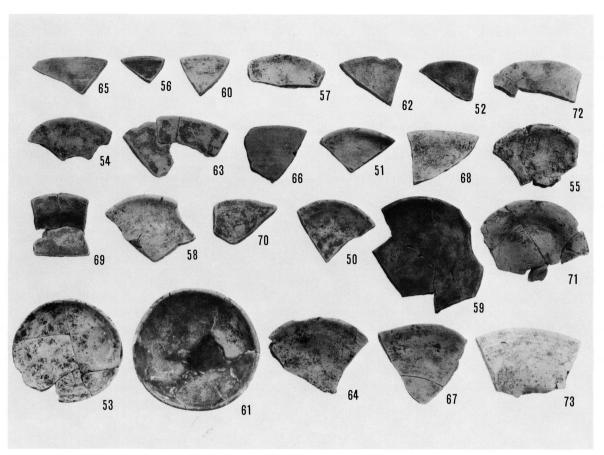
4. 第20トレンチ出土・縄文式土器



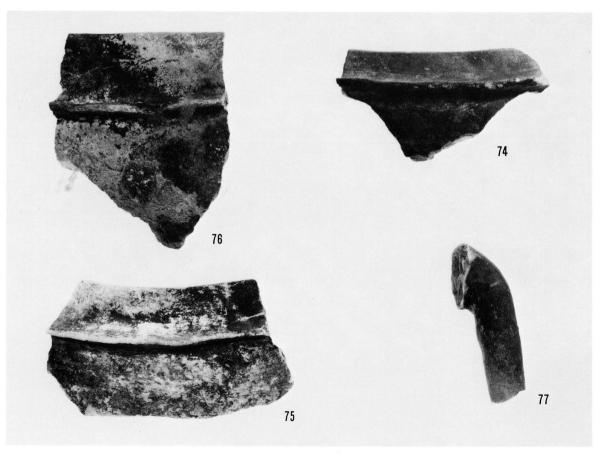
須恵器・磁器・陶器



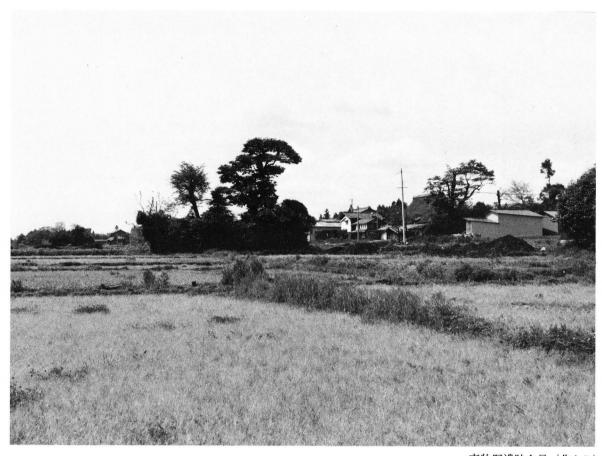
土城出土・須恵器



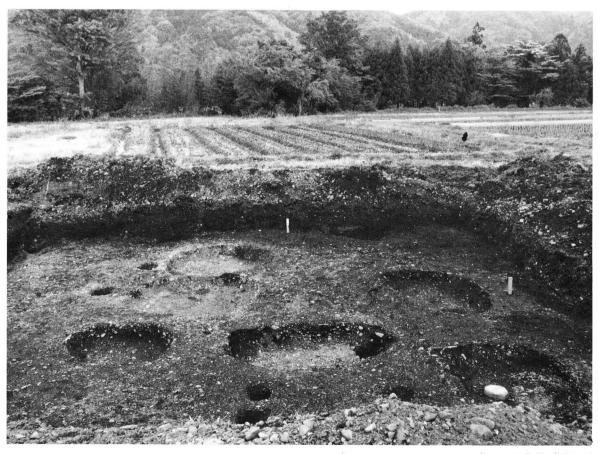
土師質土器・皿



瓦質土器・土師質土器・羽釜



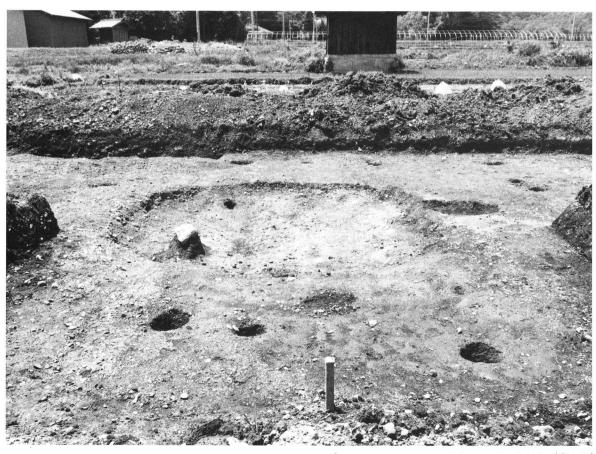
南牧野遺跡全景(北より)



Gトレンチ全景(西より)



Jトレンチ全景(北より)



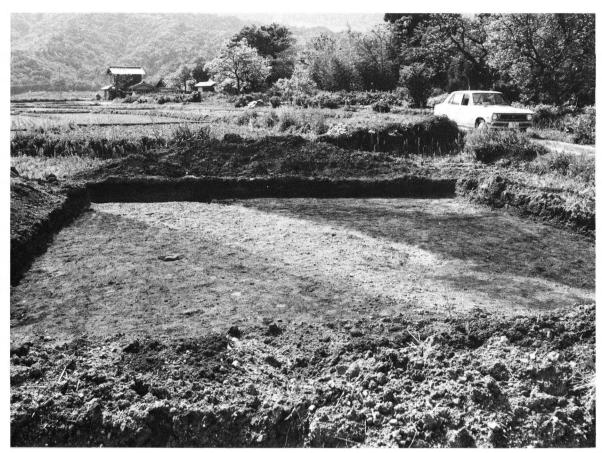
Jトレンチ・SK3 (東より)



Hトレンチ上層全景(南より)



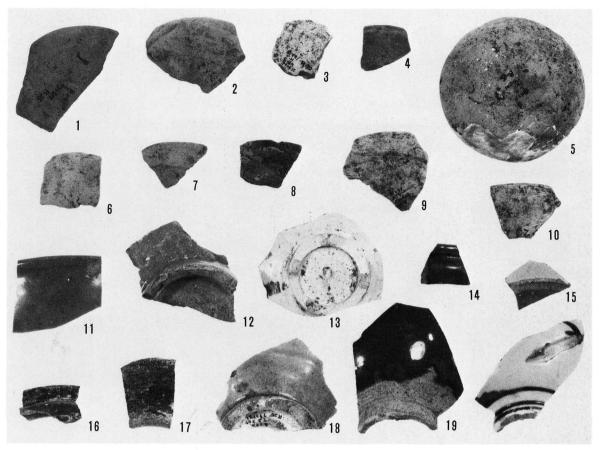
Hトレンチ下層全景(北より)



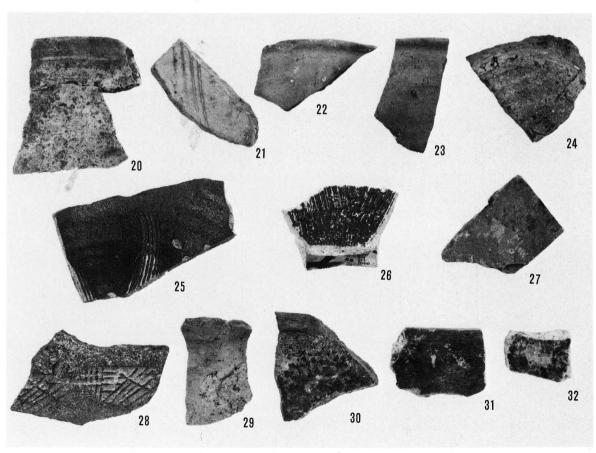
いトレンチ自然流路検出状況 (東より)



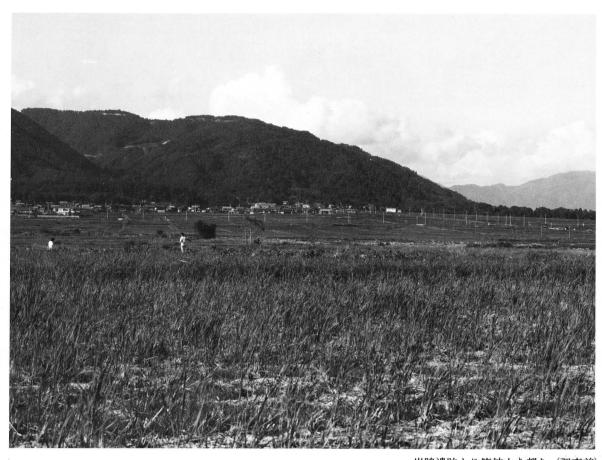
同 上 (南より)



1. 土師質土器・陶磁器



2. 陶器・瓦質土器



岸脇遺跡より箱館山を望む (調査前)



湿気抜き (第30トレンチ)



首塚 (調査前)



第29・19トレンチ全景(東より)



第19・15トレンチ全景 (東より)



第1次調査・溝状遺構検出状況(西より)



同 上 (東より)



第II 次調査・溝状遺構検出状況 (西より)



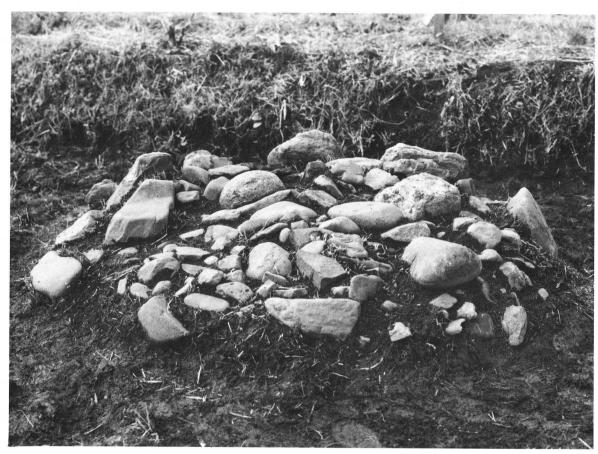
同 上 (東より)



第17トレンチ土坑・石検出状況(西より)



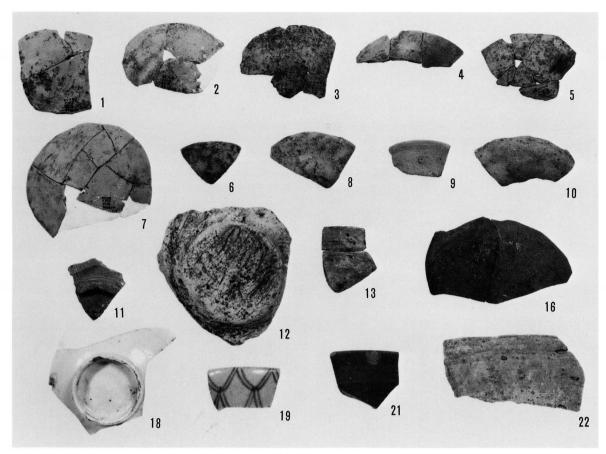
第17トレンチ土坑・調査終了後の状況(西より)



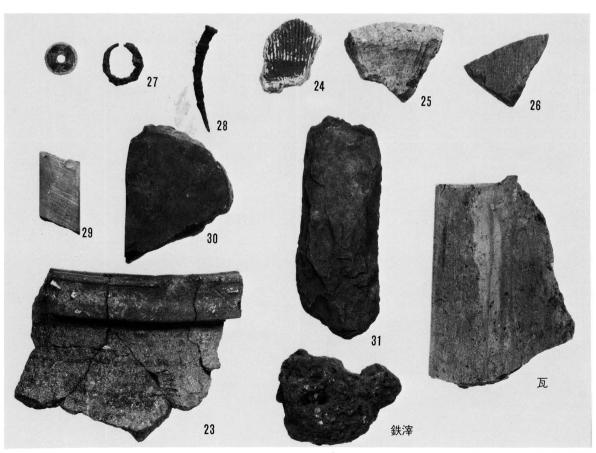
首塚・表土除去後の状況 (東より)



首塚・調査終了後の状況 (東より)



1. 出土土器



2. 出土土器. その他



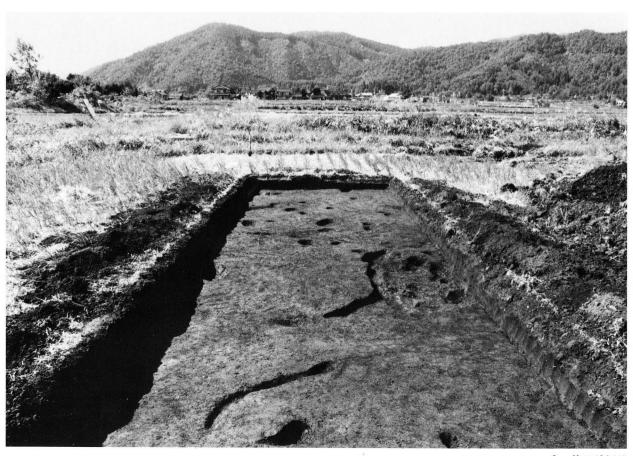
須恵器(15・17)、土師器(14)、青磁(20)



首塚出土五輪塔残欠



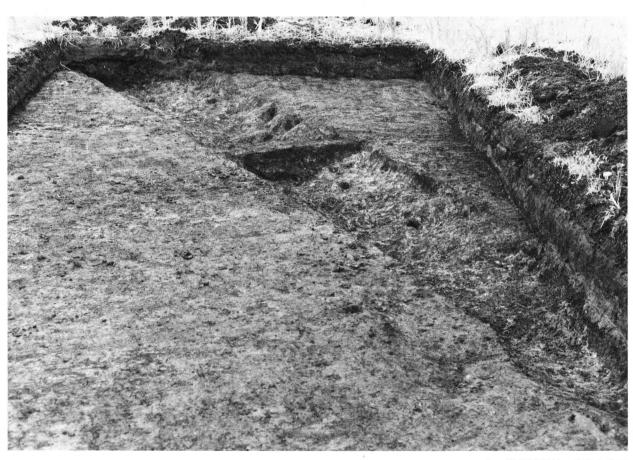
1. 第5-1試掘拡調査状況 山裾右端の森は弓削八幡宮、背後の集落は梅原



2. 第28試掘址



1. 第28試掘城、海津大崎、竹生島を望む



2. 第5試掘垃 溝検出状況



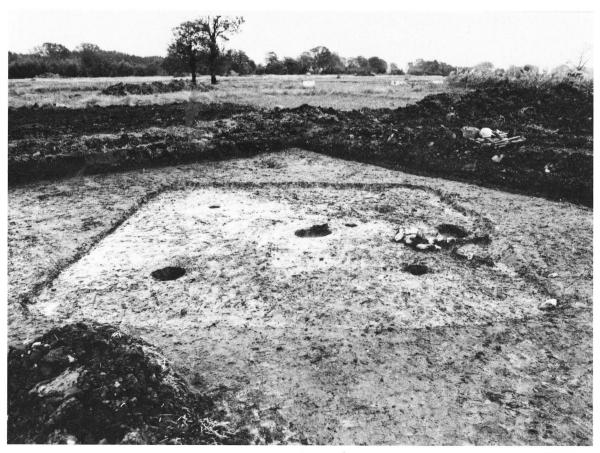
調査地区遠景 (東より)



竪穴住居1~3



竪穴住居4



竪穴住居5



第6トレンチ全景(西より)



第12トレンチ掘立柱建物1・2(東より)



調査地区遠景(北より)



第1トレンチ 第2ブロツク (南より)

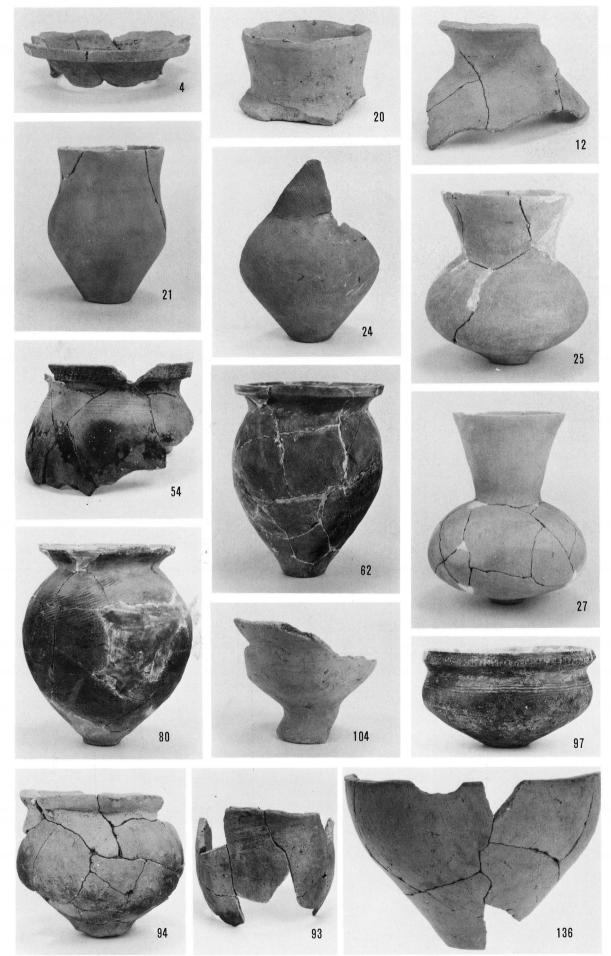


第2ブロツク土層堆積状況

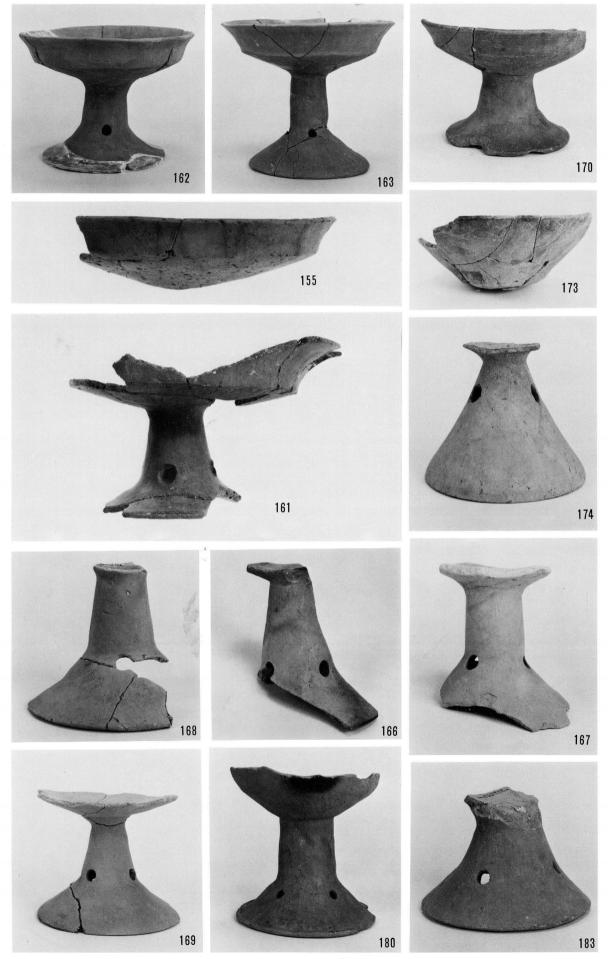


第2ブロツク土器出土状況

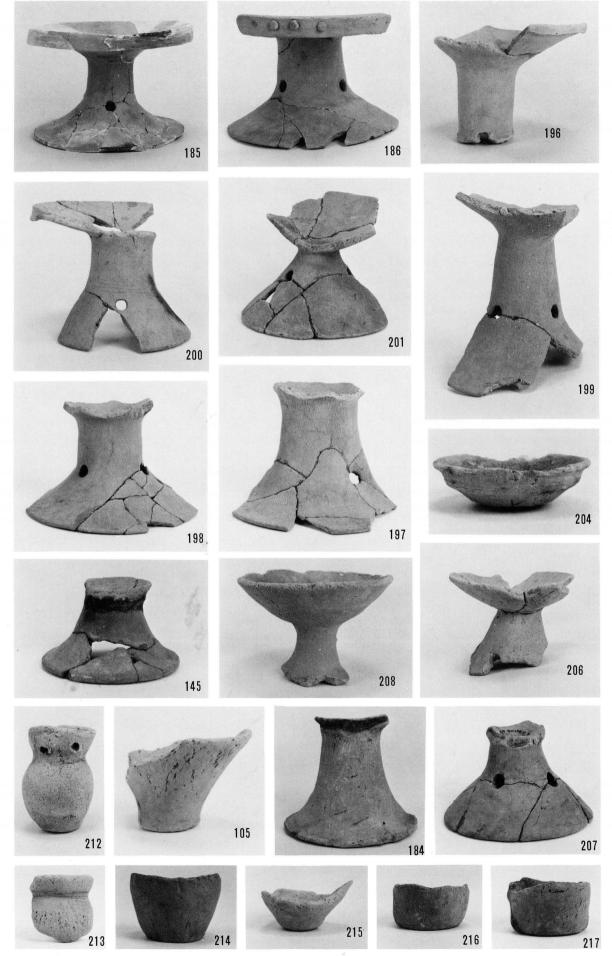
図版三五 新旭町針江遺跡 出土土器 (1)



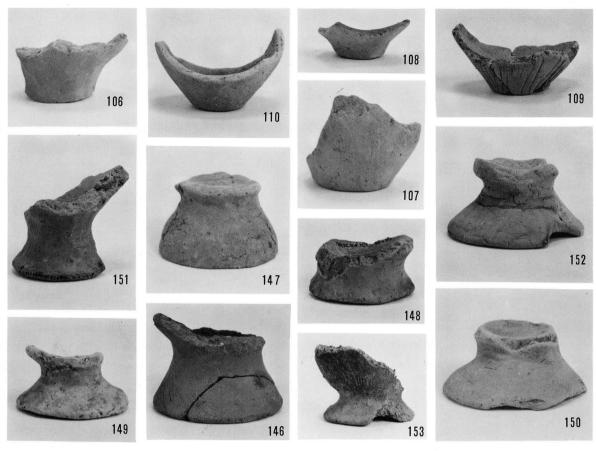
図版三六 新旭町針江遺跡 出土土器 (2)

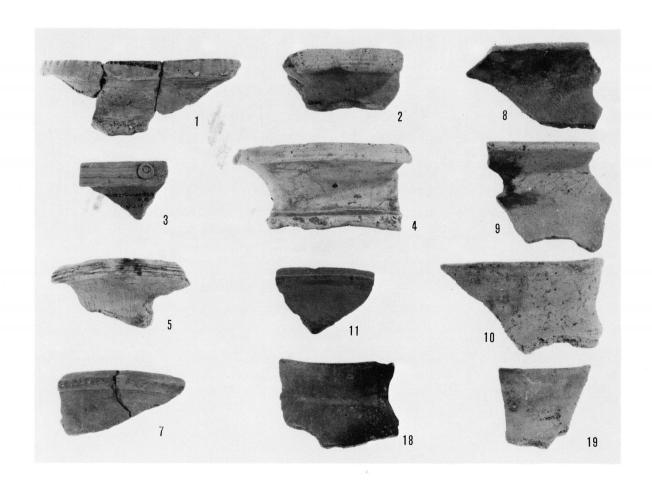


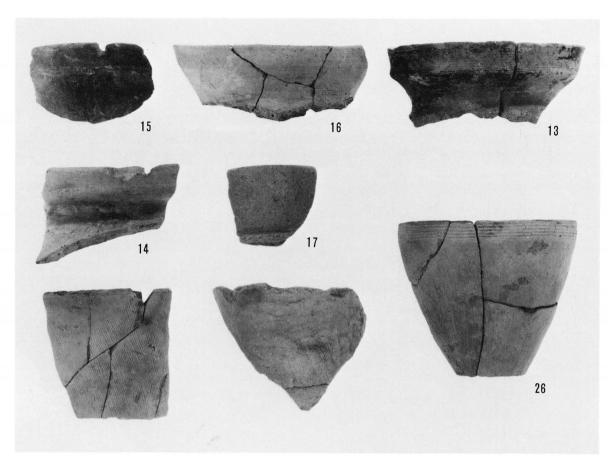
図版三七 新旭町針江遺跡 出土土器 (3)

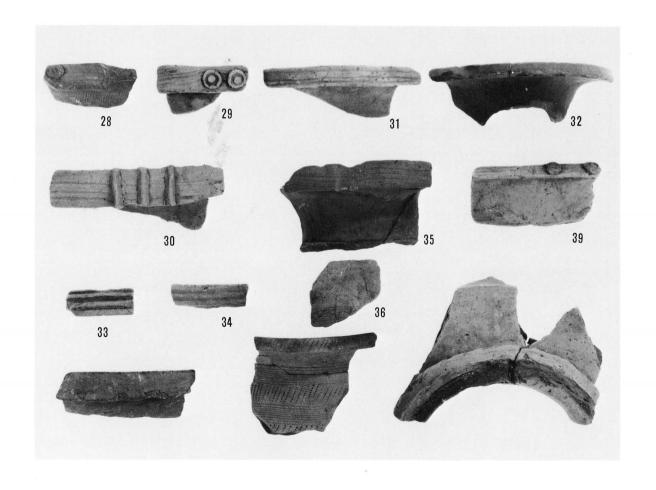


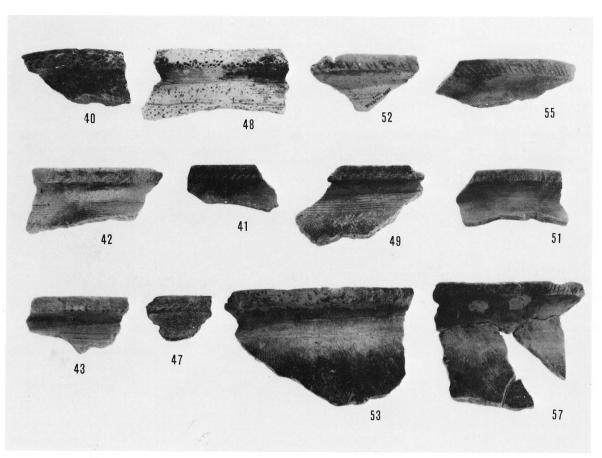
図版三八 新旭町針江遺跡 出土土器 (4)

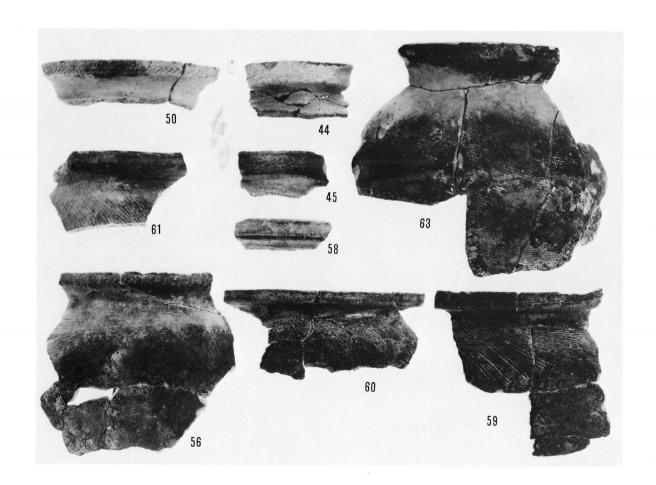


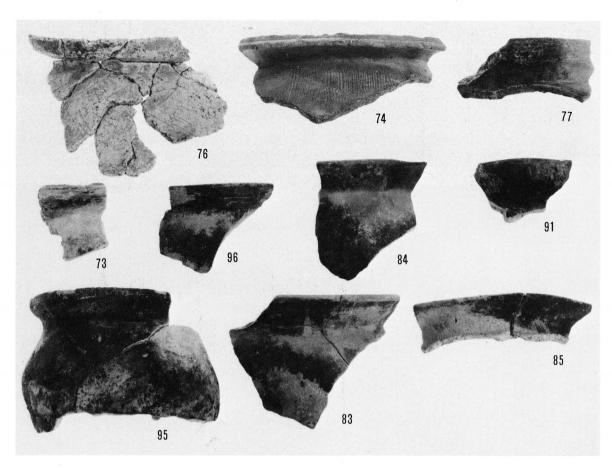


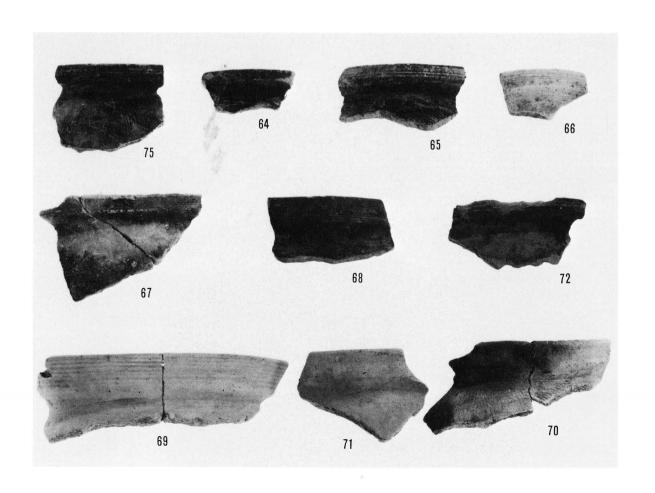


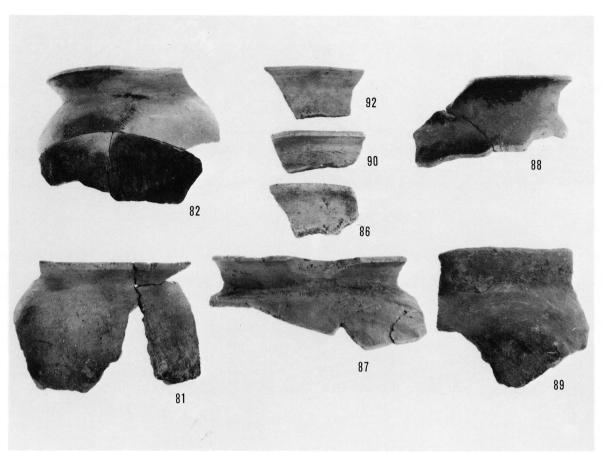


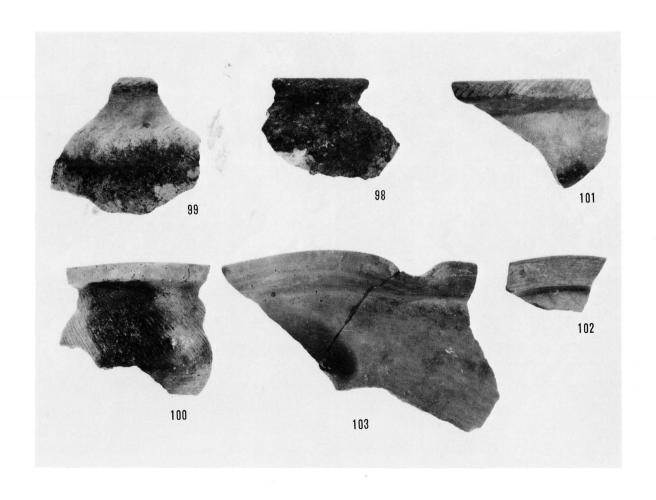


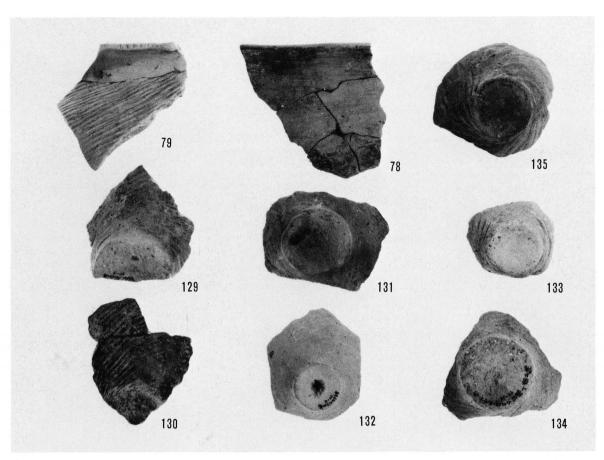


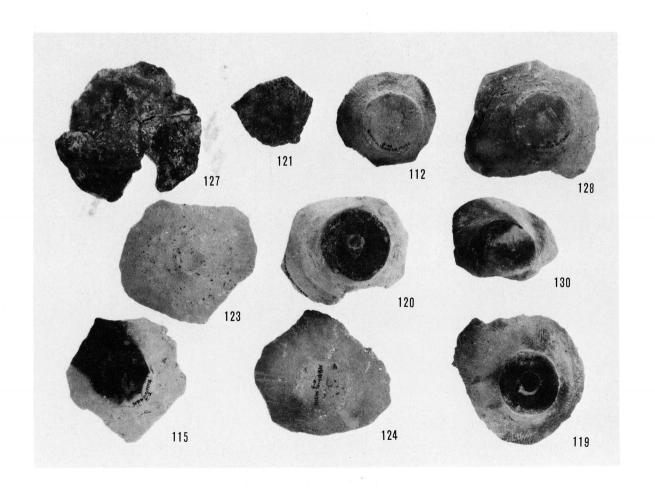


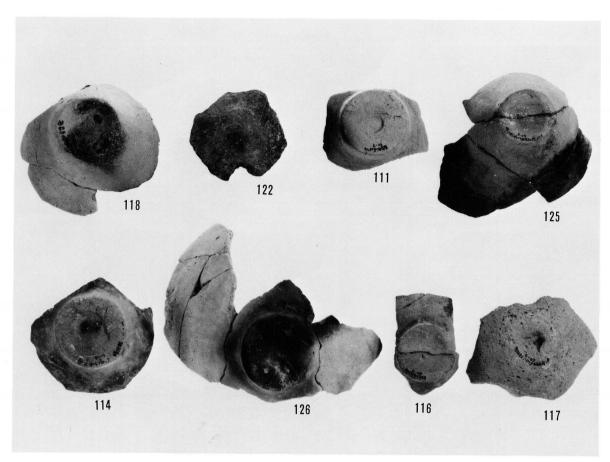


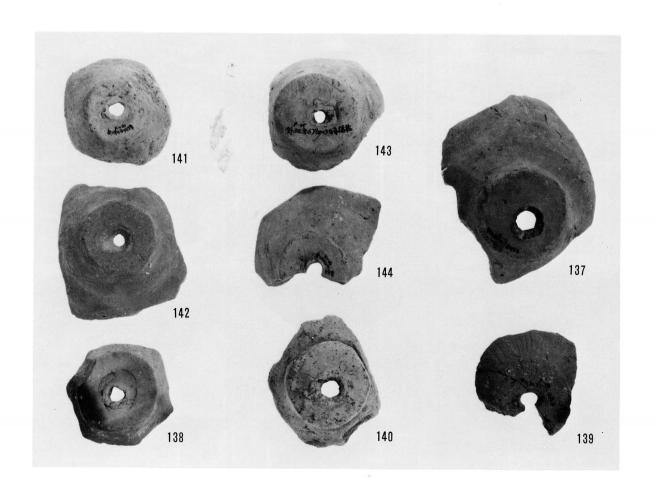


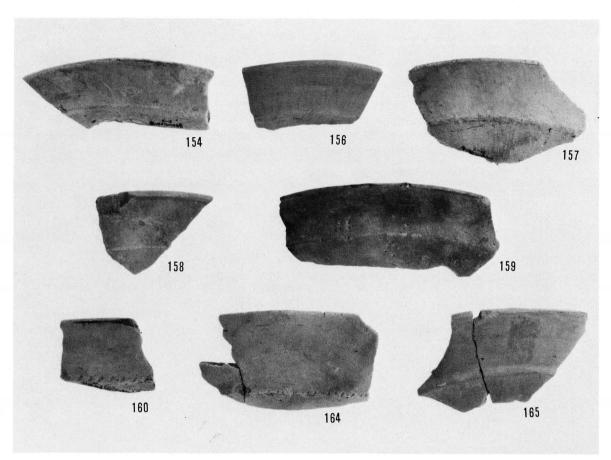


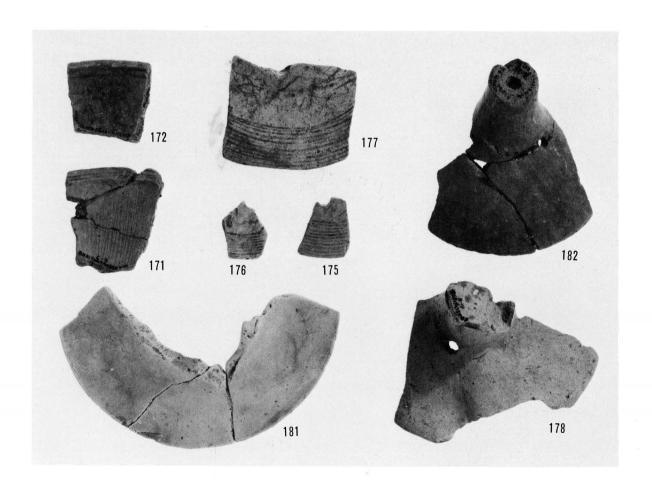


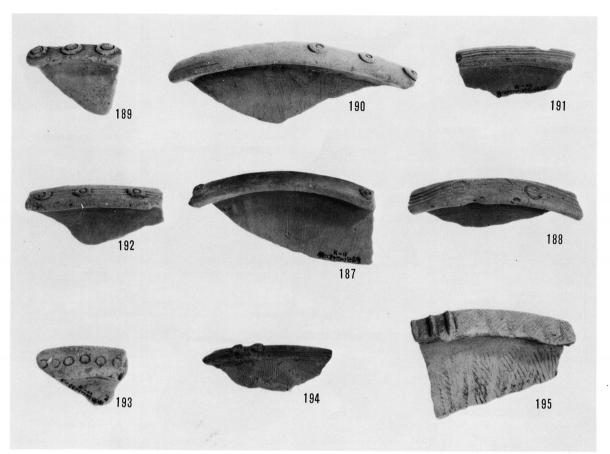


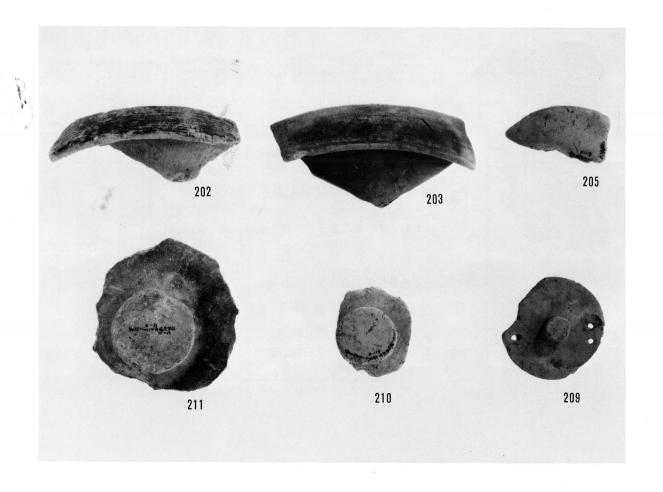












900 昭和 5 5 年 3 月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告Ⅷ─Ⅰ

編集 滋賀県教育委員会発行 滋賀県教育委員会財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 富士出版印刷株式会社 大津市札の辻4番20号

 $\mathtt{TEL}\ (0\,7\,7\,5)\ 2\,3\,-\,2\ 5\ 8\ 0$